大正六年九月十四日　第三種郵便物認可・昭和十七年四月廿五日印刷納本・昭和十七年五月一日發行（毎月一回一日發行）

建築と社會

5

日本建築協會

第25輯 第5號
昭和17年5月1日

三星印

三星印岩綿製品
防音・保温・耐火裝置
三星岩綿（バザール）ブロック構成の防音裝置は爆音に耐へる吸音率を有す

設計施工
大阪市北区中之島五ノ三〇
大阪田島應用化工株式會社
電話土佐堀(44) 1323.5682.6221.7294

東京市神田區錦町二丁目四ノ一
三星産業株式會社
電話 神田(25) 四三九七番

ノザワ波形スレート
新六甲スレート
バガス製テツクス
アルテツクス
興亞テツクス
高壓木質製テツクス
ノザワポード

野澤幸三郎商店

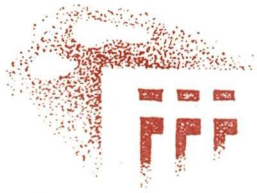
本店　神戸市神戸區榮町一丁目鮮銀ビル
電話三宮四八七〇・四八七一・四八七二

支店　大阪市東區伏見町五丁目日本徴兵ビル
電話北濱六九九三・六九九四番

東京市麹町區丸ノ内二　昭和ビル
電話丸ノ内三六七〇・四六七五番

門司市棧橋通一〇番地
電話門司五三八・一九三六番

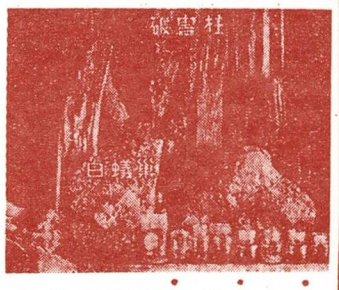
専賣特許
ロータス
セメント防水剤



ロータス防水工法責任施行
関城化学工業株式會社大阪營業所
大阪市西区京町堀一丁目　(電)土佐堀(44)825 3825
東京營業所　東京市渋谷区金王町五　(電)青山 3810
広島營業所　広島市鯉城町一八　(電)中(2)1344
満州国總代理店　株式会社大信洋行建材部

日英米特許及実用新案登録百數十件所有
大野式防火捲上ヶ戸
〔特許大野式シヤッター〕
主要製品
大野式シヤッター
大野式ルーブルシヤッター
大野式融金付自動開鎖戸
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐・戸車
各種防火扉・鋼製建具類
應用特殊機械類設計製作
株式会社　大野製作所
本社　東京市芝区三田四國町二番地
三田工場　電話三田(45)3737・3738・3787
板橋工場　東京市板橋区志村町一五九二番地　電話赤羽2768・3272
大阪詰所　大阪市此花区上福島中二丁目六十番地　電話福島㊹588

白蟻防除
施工場所　日本全國
白蟻駆除・豫防方法
前田式白蟻誘導撲滅法
前田式白蟻防蟻防腐法
樹木殺菌殺虫法
（白蟻侵害並予防的施設）
（風致木庭園樹保護）



・油断大敵氣付いた時の直ぐの駆除
・被害を受けて騒ぐより受けない前の予防が大切
・白蟻被害年額二億五阡有余円の現今木材危機の今日白蟻防除は國家的急務

諸官廳大会社御指定

前田白蟻研究所
本店　和歌山市湊通り町南一丁目三番地
電話　和歌山四三八九番

建築と社會

第25輯　第5號　　昭和17年5月發行

五　月　號

目　　次

「二十五年回顧と變遷を語る」座談會……（1）
「建築界の將來を語る」座談會……（15）
ハガキ回答……（32）
木造家屋實驗報告……擔當　大阪府建築課　兵庫縣建築課…（36）
建築技能工界の現狀及將來……鈴木忠五郎…（50）
新興木構造の理論と實際 VI……宇賀神行一…（54）
建築聯合協議會の經過に就て……幹事　中澤誠一郎…（60）
新體制部會經過報告……日本建築協會…（64）
靜岡市靈城懸賞應募作品審査報告
同　競技設計應募圖案審査總評……岸田日出刀…（66）

☆紫　煙　室☆

勤勞奉仕……津田　鑿…（70）
まどがみ……山口　正…（72）
新らしき體制を待つ……中川了文…（75）
自然漫語……明山幸治郎…（77）
「施工上の基礎智識」の必要性……西村清士…（78）

☆建築行政☆

防空建築規則の改正・防火改修規則の公布……岡田達也…（80）
戰時立法と建築物法……岡本正次郎…（82）
創立25年記念式典・功勞者感謝表彰式・祝賀會……（84）

☆寫　眞　欄☆

逆瀨川實爆演習木造家屋實驗寫眞・25年記念式典
靜岡市靈城懸賞當選圖案……
會　報……（88）
編輯後記……（91）

會　　告

創立廿五年記念事業寄附申込御芳名

本會記念事業計畫發表するや各方面より多大の御聲援と御賛同を辱ふしつゝあるが本稿締切迄に御援助を得て寄附金御申込を受けたる諸賢下記の通りなり茲に尊名を列擧し御芳志に對し深甚の謝意を表す

追而　別項會告の通り本年は愈々記念事業として都市武裝促進に邁進するため着々進行中に御座候尚寄附金募集期限も三月末日迄の認可につき本會趣旨に御賛同賜る諸賢にして御申込洩れの向も有之候ば、此際至急御援助方御申込み賜はらん事を熱望仕候

三月中ノ御申込芳名

200.00	株式會社朝日ビルヂング殿	3.00	井尻義雄殿
100.00	池本電氣工務所殿	20.00	五十嵐辰三郎殿
200.00	關西ペイント株式會社殿	5.00	一井武壽殿
200.00	栗原工業所殿	3.00	石原政三殿
500.00	久保田鐵工所殿	5.00	今井進殿
100.00	清光社殿	50.00	池田忠治殿
100.00	矢橋大理石商店殿	10.00	池田梅親殿
100.00	ライトラバー工業合資會社殿	2.00	板野宏殿
500.00	株式會社奥村組殿	10.00	石川學殿
10.00	赤尾弘殿	1.00	井上忠吾殿
3.00	安孫子三雄殿	3.00	植村俊一殿
2.00	有巣亮輔殿	3.00	上西正敏殿
3.00	青木茂雄殿	3.00	上田善三郎殿
5.00	安部恒夫殿	3.00	大岡喜治殿
10.00	井上義一殿	5.00	岡本正次郎殿
5.00	市岡末廣殿	5.00	大村勢一殿
10.00	今西太一殿	3.00	乙部男殿
2.00	岩戸聯一殿	5.00	小野田松夫殿
10.00	岩井勘二殿	3.00	岡村市太郎殿
10.00	伊藤長次殿	10.00	小津利一殿
10.00	板井公威殿	5.00	大平忠吾殿
4.00	生田種治郎殿	3.00	大島彌一郎殿
2.00	磯野康治殿	5.00	大石忠夫殿

5.00	猿丸吉左衛門	殿	
5.00	白鹿政典	殿	
10.00	下田稔	殿	
2.00	白井利夫	殿	
10.00	正田德大郎	殿	
5.00	守隨乙作	殿	
10.00	鈴木冬藏	殿	
10.00	杉本正一	殿	
10.00	鈴木忠五郎	殿	
10.00	末廣實藏	殿	
100.00	佐村木實	殿	
100.00	辰己吉政	殿	
10.00	武田經一	殿	
2.00	高木春雄	殿	
2.00	嶽山文生	殿	
10.00	高木登	殿	
50.00	高田馨三	殿	
5.00	高木芳松	殿	
10.00	高橋誠美	殿	
3.00	田中芳郎	殿	
5.00	田中德太郎	殿	
10.00	高田利一郎	殿	
10.00	竹內佐平治	殿	
10.00	武富英一	殿	
3.00	多田久夫	殿	
20.00	瀧澤眞弓	殿	
30.00	高野新次郎	殿	
5.00	高橋鶴治	殿	
3.00	田中四郎	殿	
50.00	津田敏雄	殿	
2.00	堤四郎	殿	
5.00	寺岡眞	殿	
5.00	土岐俊吉	殿	
30.00	鳥井信	殿	
10.00	永田三次郎	殿	
2.00	中垣了	殿	
2.00	中山章	殿	
5.00	中陣千代吉	殿	
10.00	永井喜市	殿	

5.00	落合勇一	殿	
5.00	押川忠夫	殿	
5.00	大谷勳	殿	
10.00	大塚眞宏	殿	
5.00	大澤一郎	殿	
3.00	大江武夫	殿	
1.00	岡田文夫	殿	
10.00	江藤忠實	殿	
5.00	加藤得三郎	殿	
3.00	川野平造	殿	
10.00	河田亮路	殿	
5.00	川瀨涉	殿	
2.00	加藤勝彥	殿	
2.00	笠野藤吉	殿	
2.00	笠井駒之助	殿	
150.00	木下昌次	殿	
50.00	木子七郎	殿	
5.00	木內成芳	殿	
20.00	熊本喜代治	殿	
5.00	熊谷道太郎	殿	
3.00	桑原勇	殿	
5.00	楠田實	殿	
10.00	久保田廉	殿	
3.00	窪島宗治	殿	
2.00	黑野芳夫	殿	
1.00	近藤勝美	殿	
10.00	神足繁雄	殿	
5.00	兒玉充弘	殿	
3.00	小畑純一	殿	
2.00	小堀順朗	殿	
5.00	小山源次郎	殿	
10.00	後藤和太郎	殿	
10.00	笹岡美代吉	殿	
2.00	佐々木俊朗	殿	
2.00	佐久間逸治	殿	
10.00	酒井勇三郎	殿	
5.00	佐藤德一	殿	
2.00	坂本啓裕	殿	
10.00	佐藤平助	殿	

3.00	永井佐藏殿
2.00	永澤龍雄殿
10.00	並木長吉殿
3.00	中西一郎殿
3.00	中原茂殿
10.00	中村傳治殿
10.00	中野梅太郎殿
2.00	中澤吉郎殿
5.00	西田庄三郎殿
3.00	西山秀之助殿
2.00	西出米次郎殿
10.00	野口正登殿
2.00	野中實殿
5.00	野呂長四郎殿
20.00	早矢仕兼道殿
5.00	林良信殿
2.00	服部四郎殿
3.00	原田昇殿
10.00	東一男殿
3.00	廣橋臣一殿
5.00	平松龍太郎殿
2.00	比良榮二殿
5.00	廣川藤作殿
5.00	廣瀨源三郎殿
20.00	本田林八殿
5.00	本田明三二殿
7.00	本田登殿
10.00	牧野忠殿
20.00	前田仲右衞門殿
2.00	松本喜三郎殿
5.00	前田善增殿
5.00	松本晶一殿
14.00	三宅嘉三郎殿
5.00	美浪德一殿
3.00	道林義治殿
5.00	水原旭殿
2.00	三木一男殿
2.00	村谷定殿
5.00	村上清一殿
5.00	村田後郎殿
5.00	森正雄殿
21.00	森山裕殿
7.00	森口清殿
3.00	森通殿
5.00	森里好久殿
5.00	森山松之助殿
10.00	山下忠一殿
5.00	山口泰夫殿
20.00	山內嘉兵衞殿
5.00	矢部芳夫殿
10.00	保田信夫殿
10.00	山本勝殿
5.00	山口松次殿
5.00	山口正殿
7.00	山田千代松殿
2.00	山口末吉殿
20.00	八木豪志殿
10.00	和田登殿
10.00	渡邊利雄殿
2.00	渡邊義雄殿
5.00	渡邊顯殿
100.00	和田治郎市殿
100.00	河津商店殿
200.00	立花商會殿
100.00	田中工業株式會社殿
300.00	東洋陶器株式會社殿
100.00	リーダー建材工業株式會殿
5.00	藤田令二殿
10.00	古川東一殿
5.00	福田政治殿
10.00	福永佐和吉殿
3.00	福山良三殿
2.00	藤岡正一殿
5.00	古都猛雄殿
5.00	吉武章夫殿
15.00	吉田信武殿
20.00	湯淺慶三殿
20.00	奥田唯一殿

5.00	田口昇殿	10.00	長谷川勇殿
14.00	帆玉隆司殿	5.00	大倉三郎殿
200.00	大日本紡績株式會社殿	10.00	川井要殿
5.00	元良勳殿	30.00	田中勇吉殿
7.00	根本繁土殿	10.00	前田保永殿
5.00	小田健治郎殿	5.00	三宅利雄殿
10.00	谷川政夫殿	200.00	住友金屬工業株式會社殿

以上　本月計　¥　4577.00
累　計　¥　17,5616.00

（此の外創立記念として本會基本金へ寄附受け入額　¥ 5000.00
振替貯金にて御拂込賜りし分は本會告を以て領收書に代へ別に
領收書發行いたさず候條不惡御諒承被下度候）

昭和十七年五月一日

社團法人　日本建築協會

會　告

五月は記念事業主催の見學會として京都方面に、又クラブ室主催として彦根方面に、見學開催の豫定でありますので本幹事會主催の見學は五月は中止し六月に延期する事に致しました。六月の催は次號に掲載御通知致します。

五月一日

日本建築協會　會勢幹事長
山脇友三郎

會　　告

海軍建築技術者募集

海軍の要望されてゐる建築技術者は我が戰果に依り裁定されたる南方々面の主として重要建築物の設計並に現場監督に從事するものにして、目下內地に於ては次第に建築工事は減少し、此處半ケ年も經過するに於ては建築用資材（特に木材）の點より特殊の時局に要望さるゝ以外の建築物は殆ど建築を爲し得ざる狀勢に立到るべきを豫想さる。

建築技術者諸君は將來其の手腕を活用し得る滿足の境地を得難き本土に止まるが如きは賢明の策にあらざるべし。倖ひ海軍當局に於て南方の作戰上、或は開發上諸君の手腕に期待さるゝ處大なるものあり。諸君は振つて之に應募し、以つて職域を通じ國家に御奉公申上ぐると共に大東亞建設の戰士としての榮譽を荷はれん事を望む。

下に志望者に對する諸條件を揭記す。

1. 採用先　　海軍省
1. 任地　　南方方面ニシテ諸建築物建設ニ從事ス
1. 待遇　　學歷經驗任地ノ遠近等考査相當優遇セラレ又赴任旅費支給ス
1. 募集人員　　海軍技師、技手トシテ約〇〇名
1. 勤務年限　　二ケ年トス但シ本人ノ希望ニヨリ引續キ勤務歡迎ス
1. 希望者ハ各府縣建築課長、主任官宛又ハ本會ヘ履歷書並ニ資格、待遇、赴任地等ノ希望條項ヲ添エ御申出或ハ照會サレ度シ。
1. 現在奉職中ニシテ應募ノ向ハ主務省及關係各廳等ヨリ雇傭主ニ對シ充分斡旋ノ勞ヲ執リ決シテ本人ニ迷惑ヲ及ボサザルコト。
1. 申込期日　　昭和十七年五月二十日迄

昭和十七年五月一日

社團法人　日本建築協會

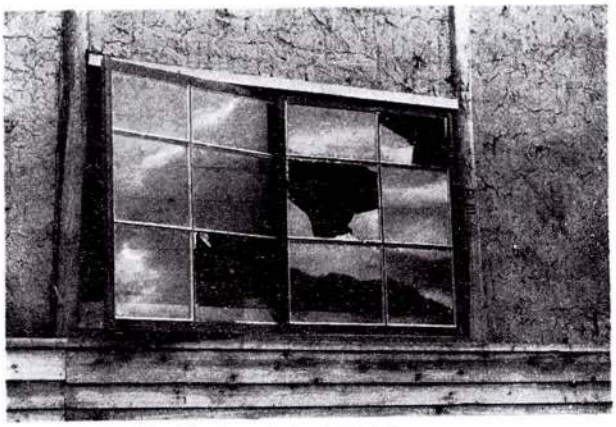
會長　片岡　安

逆瀬川實爆演習●木造家屋調査・・擔當　大阪府建築課、兵庫縣建築課

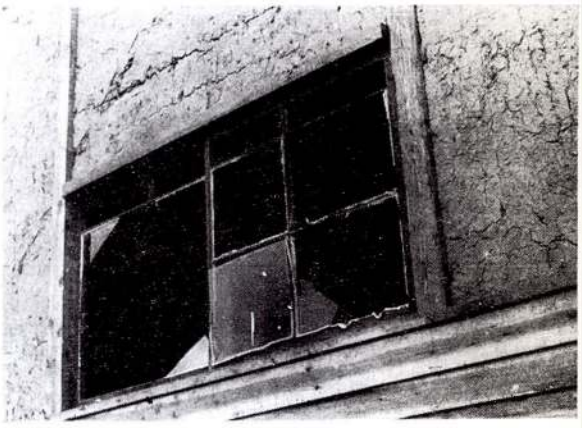
（中部軍司令部檢閲濟）



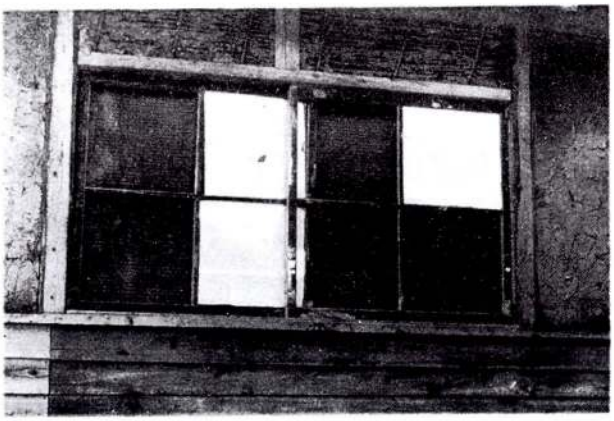
1. 第1號家屋全景（南方ヨリ眺ム）



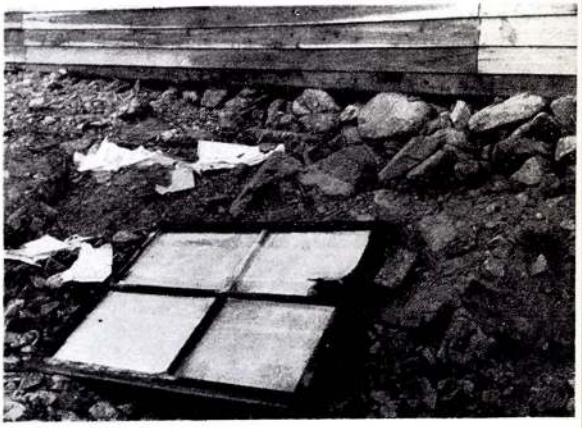
2. 第1號家屋南側東寄リ窓（板防護）



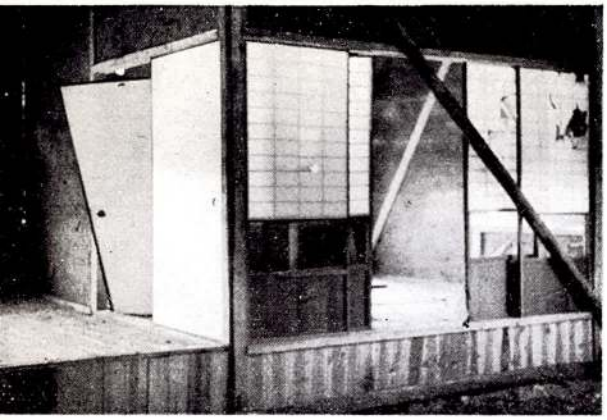
3. 第1號家屋西側北寄リ窓



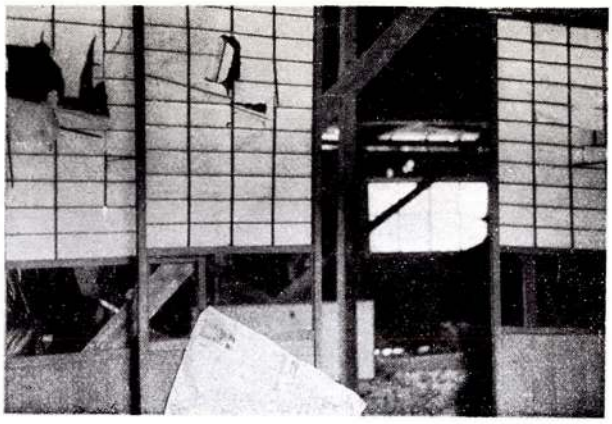
4. 第1號家屋南側西寄窓（疊防護）



5. 第1號家屋西側南寄リ窓

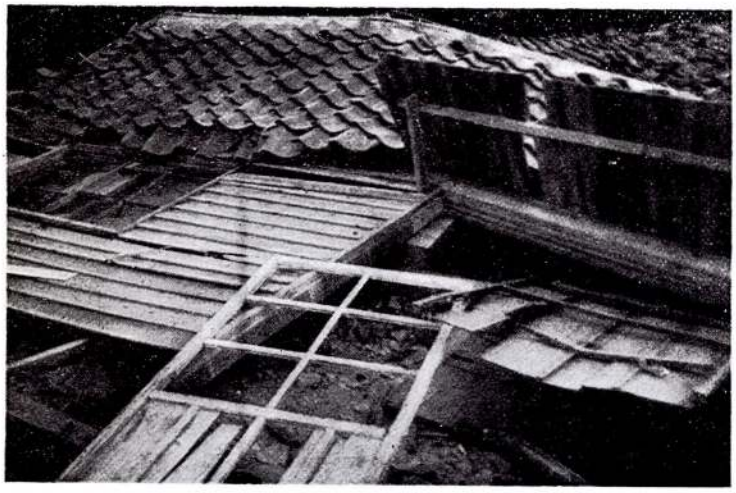


6. 第1號家屋內部被害狀況



7. 同　　左

逆瀨川實爆演習・木造家屋調査・・擔當 大阪府建築課、兵庫縣建築課

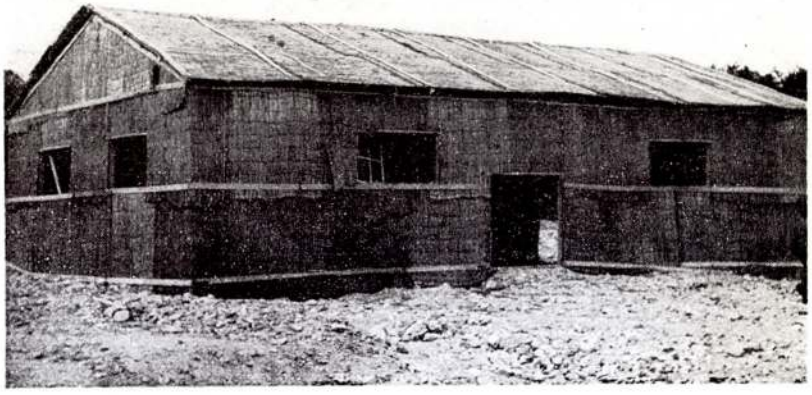


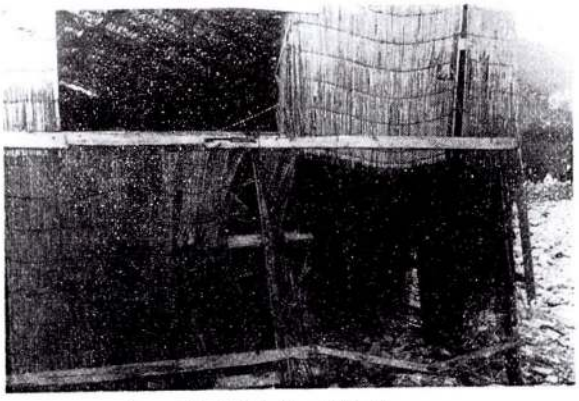
8. 第2號家屋倒壞狀況
（東側ヨリ）



9. 第2號家屋倒壞狀況
（西側ヨリ）

10. 第 3 號 家 屋





11. 第 3 號家屋隅柱ノ被害

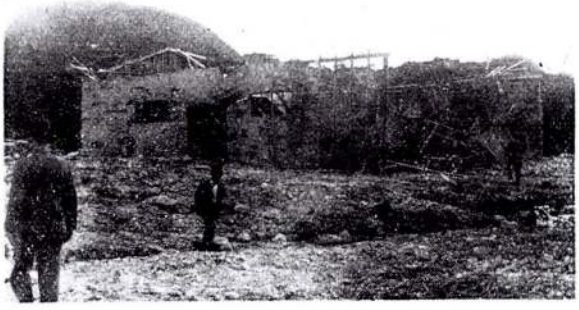
逆瀨川實爆演習

木造家屋調查

擔・・・・・・・當

大阪府建築課

兵庫縣建築課



12. 第 4 號家屋被害狀況

13. 第 4 號 家 屋 全 景

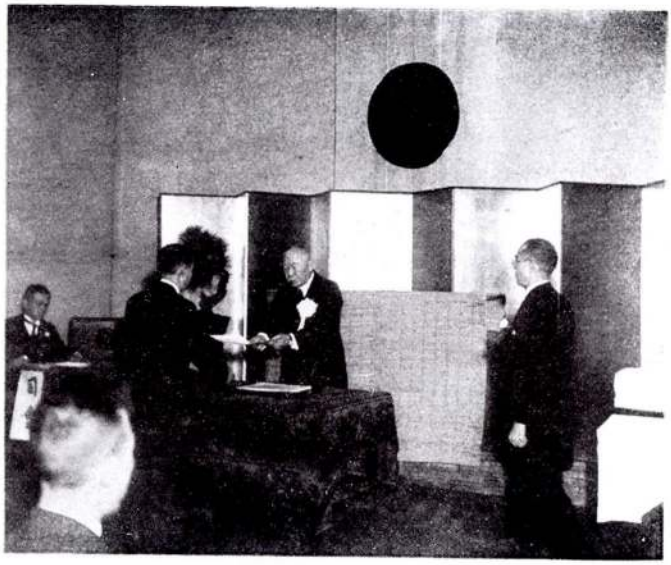




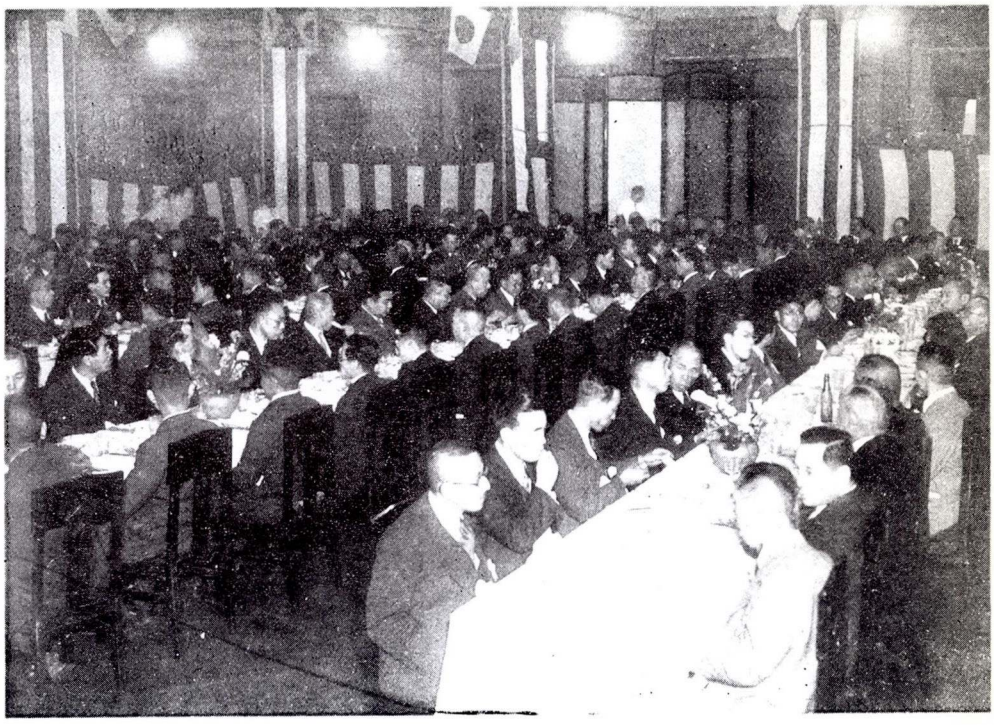
祝賀式・片岡會長の式辭・17年3月30日　於大阪中央公會堂



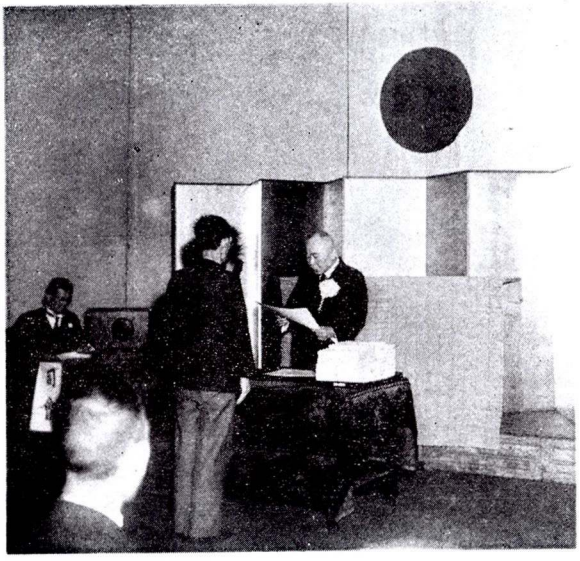
片岡會長に對し感謝狀贈呈



功勞者代表に對し感謝狀贈呈



大宴會場の全景——來賓、會員2[illegible]9名餘



會員功勞者代表に對し表彰狀並に記念品贈呈



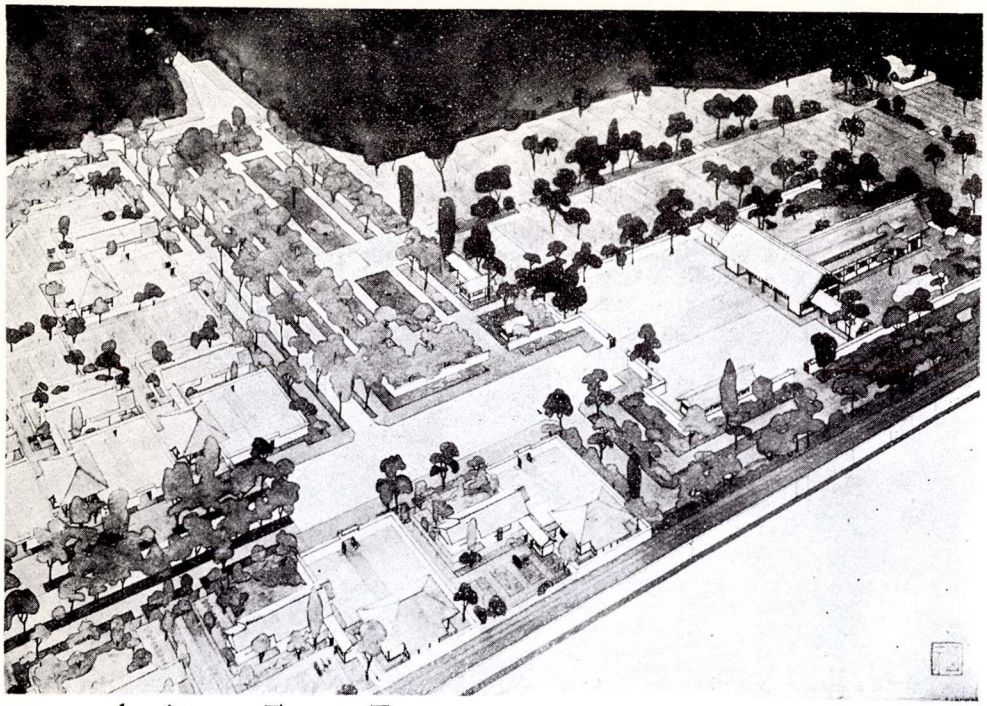
宴會場に於ける片岡會長の挨拶

靜岡市復興靈域計畫圖

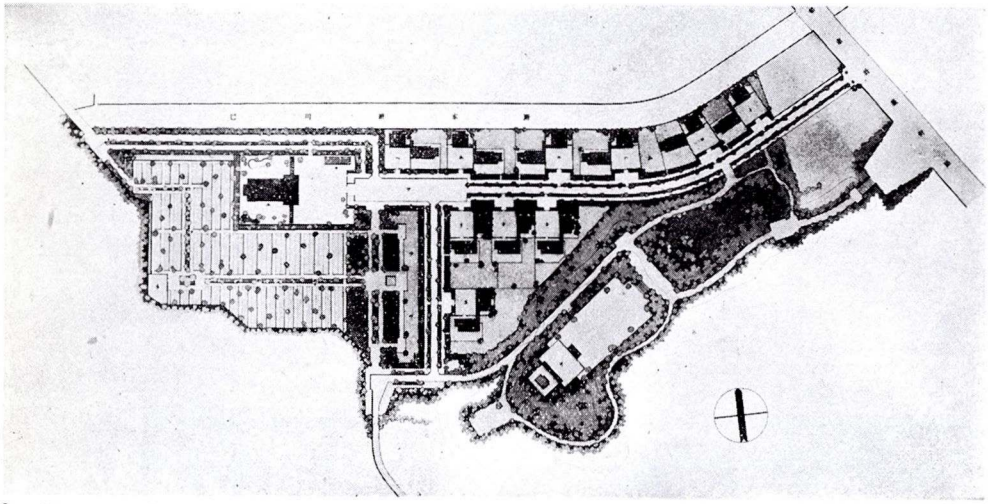
一等當選圖案

小林謙一氏

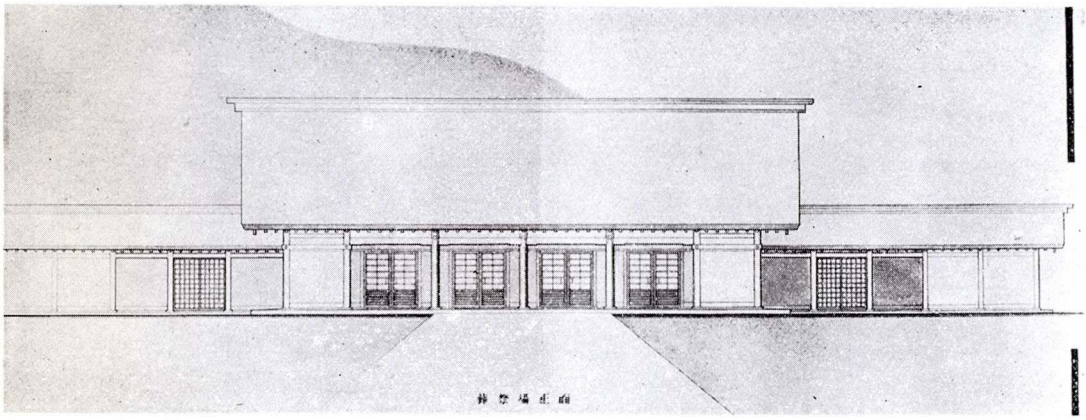
東京市



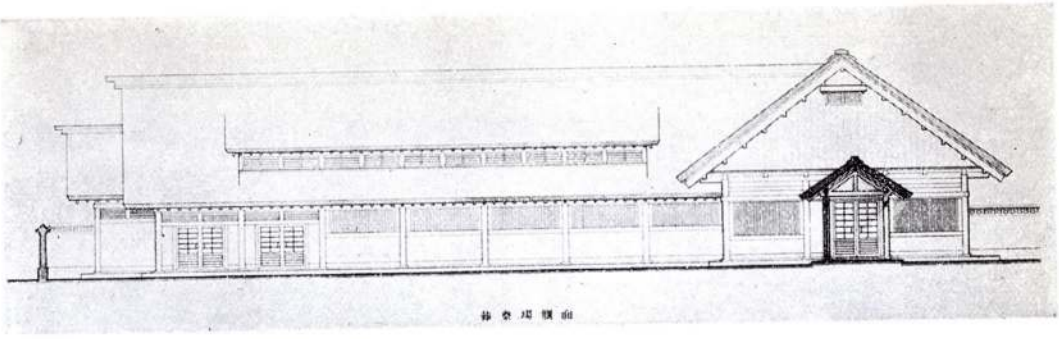
1. 鳥瞰圖

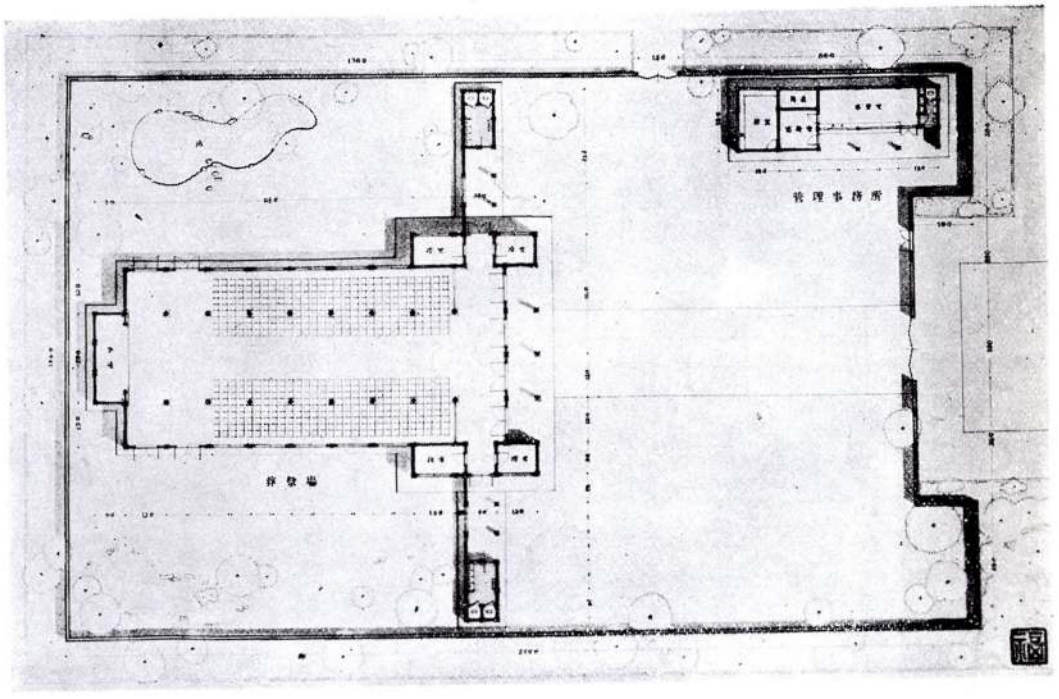


2. 配置圖



3. 葬祭場正面

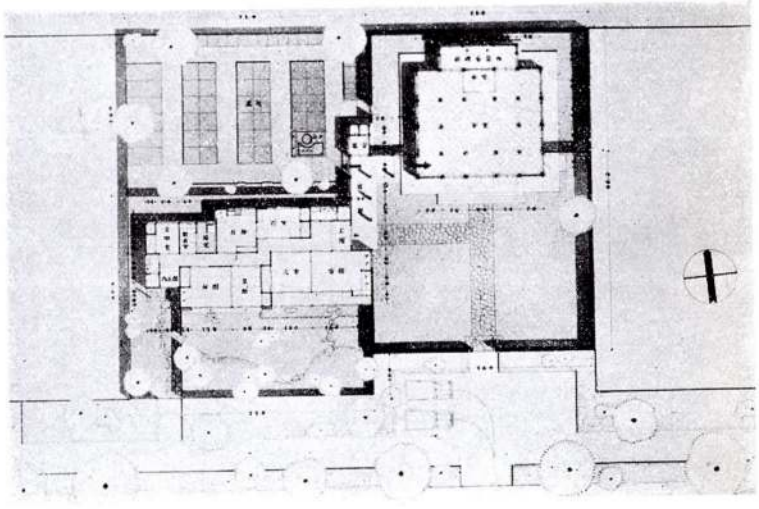




4. 葬祭場側面

5. 同平面圖

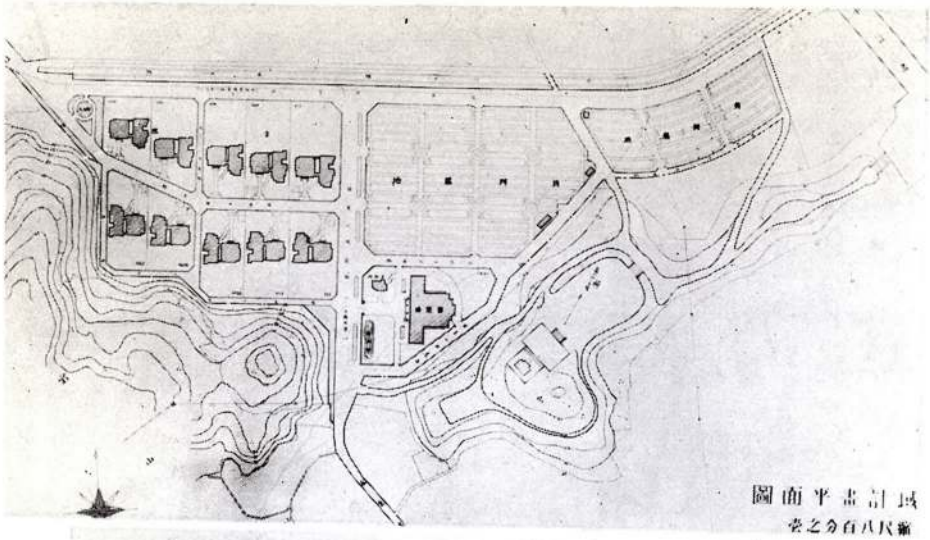
6. 寺院平面圖



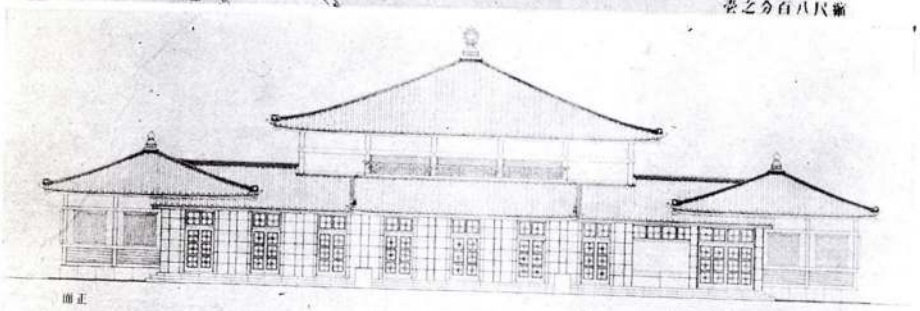
靜岡市
復興靈域計畫圖

二等當選圖案

大阪市建築部第一建築課
設計係
矢代、勝山、岡本
鳥越、西原、村島

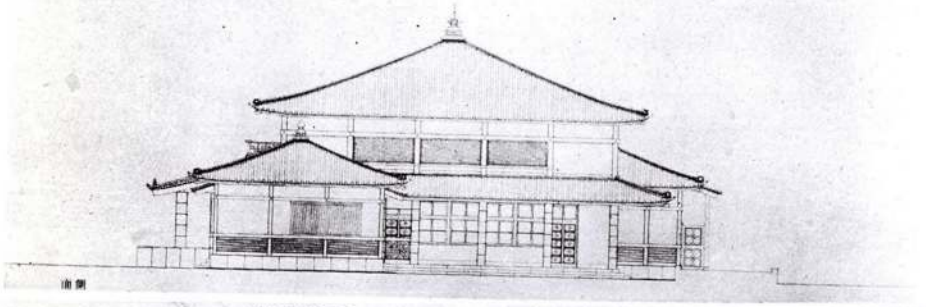


圖面平畫計域



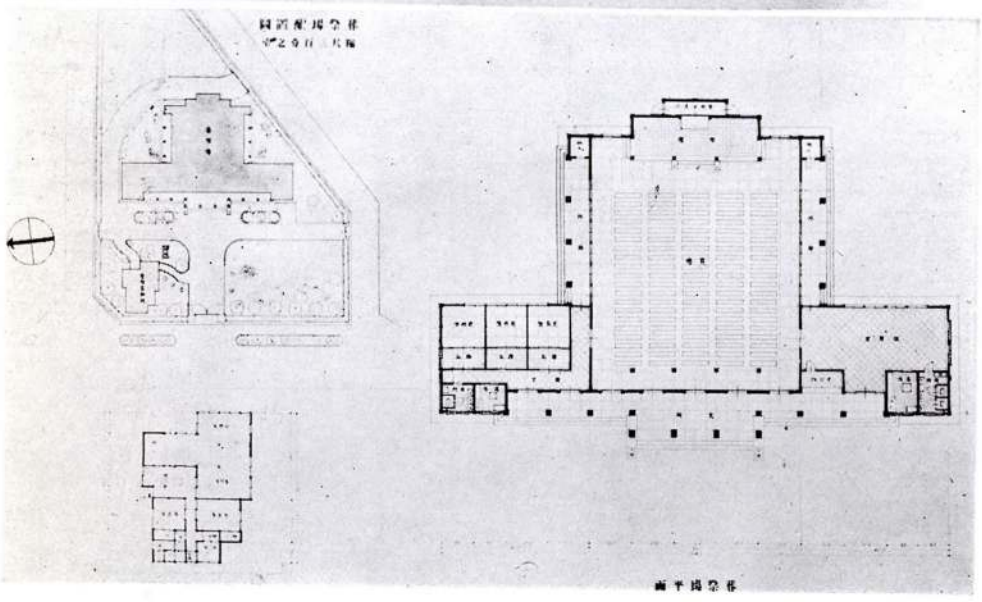
正面

1. 配置圖



側面

2. 葬祭場立面圖



3. 葬祭場平面及配置圖



左より　鈴木一幸氏、谷　民藏氏、永瀬狂三氏、酒井勇三郎氏、今林彦太郎氏、片岡　安氏、池田　實氏、葛野壯一郎氏、池田谷久吉氏、伊藤編輯常務、岡部顯則氏、大下編輯常務、二人おいて錦田編輯常務

出　席　者　氏　名

池田　實氏	今林彦太郎氏	池田谷久吉氏
岡部顯則氏	片岡　安氏	葛野壯一郎氏
谷　民藏氏	永瀬狂三氏	酒井勇三郎氏
鈴本一幸氏		

（五十音順）

編　輯　常　務

伊藤和夫	大下順三郎	錦田直一

伊藤——一寸御挨拶申上げます。大正六年に關西建築協會として日本建築協會の發祥を見ましてから、本年で丁度廿五年になりますので、その創立廿五周年の記念事業をやることになつてをります。また『建築と社會』におきましても、五月號を記念號にしたい豫定をして居るのでありますがなほ廿五周年の記念誌も發行したいと考へてをります。それらにつきまして、廿五年の回顧、ならびに建築界の變遷といふやうな題材で創立當時から會に御關係の深い方々及其の後の變遷について特に御關係の深い方々にお集りを願ひまして、今日の座談會を催し、それを『建築と社會』の記事にしたいと考へてをりますので、今夕お集りを願ひましたやうな次第であります。

昭和7年十五周年記念の際にも、其のころを語る座談會を、當時12人の方にお集りを願つてやつてをるのでありますが、其のうちの武田先生、藤井先生、大林四郎さん、小林さんの四氏が、この10年間に亡くなつてをります。十五周年の時にも創立當時の事情とか、其の當時の世相、あるひは建築界の情勢などに就いていろいろな座談會をして頂いて居りますのが、やはりこの魚岩であつたのであります。其れから思へば早いものですが、今度また魚岩で創立當時からの座談會をやつて頂くにつきましては、また同じやうな話も澤山あることゝは思ひますが、この頃の若い會員連中は、創立當時のいろんな苦心とか、詳しいことが判つてをりませんし、多少重複する處がありましても、お話をして頂けば非常に結構と思ひます。なほ今日お集りの方のほかに竹腰さん、小笠原さん、木子さん、石田さんが御缺席、それから本野さんは御出席の通知は頂いてをりましたが、急に體の具合が悪いと言ふので、共に御缺席になつて居ります。これだけ申上げまして、まづ第一に創立當時の事情、其の頃の情勢について片岡先生から色々お話を願ひたいと存じます。

片岡——其の當時の記憶を辿つて、その時分の建築界の様子、更にもつと廣く技術界の様子を一寸申上げて見たいと思ひます。其の事情がその當時の當地における有力な建築家を奮起させ、今日あらしめた大きな原動力になつてゐるのではないかと思ふのであります。でその點を先づ申し上げます。その當時、又はその以前は技術界は恐ろしい先輩萬能時代であります。先輩といふものは非常な權力を持ち、同時に指導力の中心は全部先輩が持つて居つた。これは一面から言へば、非常に統制がとれた、技術界が一團となつて動いたといふ點においては、形から言へば非常に良いやうであるが、事實は必ずしもさうではなく、ある一例を申しますと、名前を申上げると都合が悪いが、ある内務省の最高級の技術家が、大阪の方面を擔當してをる人であつたが、その人には後に續いてゐる人は全部匍伏せねばならぬ。この人の「あれはいかん」と言ふお聲がかゝつたら、どうにもならない。ライオンに見込まれた兎か、羊であります。これは極端な例ですが、大體さういふ傾向があつた。もつと適當な言葉で言ひ現はすと良いが、さういふ例が多小緩急はあるけれども、實際あり、建築界もやはり技術界の一部でありますから、やはりその傾向があつたのであります。これも例をいふた方が良いと思ひますが、私のある先輩の友人で建築家の一人、多少磊落な人でしたが、それが建築界の大先輩によく思はれてゐなかつた。技術家としてと言ふよりも、唯社會人として小心翼々とやつてをれば間違ひないが、稍磊落な氣分があつた爲に先輩からは何となしに「どうもあれはなかなか——」といふ風に見られた。ところがその人を自分の技術の監督事務所、あらゆる技術家の集る監督事務所に使はうとした時、その建築界の先輩にその經營者が、あの男は君の後進だがどうか、と聞いたら、あらはいかんぜ、と答へた。そこでその建築家なり他の專門の技術家のあらゆるものを綜合してゐる事務所を經營する何とかの主人公は非常に憤慨して、君さう簡單に後進を片づけたのでは、その人間は飯の食ひはぐれではないか、立つ瀬がないではないか、さう簡單にあれはいかんぜといふ風に後進を壓迫し、社會に立てぬ様にするのはひどいじやないかと言ふので、大いに抗議を申込んだといふ逸話です。こんなのが當時の技術界の情態ですが、先輩に續く後進はまア先輩の一顰一笑を窺はねばならなかつたと言ふ程強い指導力を先輩が持つて居つた。これは一面から見れば、機構としては非常に良いやうに見えるが、先輩必ずしも百パーセント立派な

人でない場合が多いんだから、先輩が非常に正直で、人格者であつても、眼界の狭い人であつたり、あるひは設計さへ出來れば、世の中の事はどうでもいゝ。技術家は自分の專門だけ勉强すれば良い、といふやうな幅の狹い人であれば、後進は先輩と同じ型でなければならぬ。先輩が技術家としては立派でも、社會人としては適當でなかつたとすれば、後から來るものは皆適當ならざるものしか出來ないと言ふ事になるのであります。

當時私は非常によくない半面が相當ひどいといふことを見たのです。そこで大正三年ごろと記憶しますが、ある工業の雜誌、當時は工業の雜誌は無かつたのですが、一つだけあつた今はもうありませんが、その雜誌に投書をした。投書といつても、その社から何か記事を書いてくれと言ふので、私が論文を書いた。それは先輩何ものぞと言ふことで、後進——私どもゝ後進中のビリでしたが、後進に對する先輩のやり方が良い場合もあり、悪い場合もある。先輩は多年の經驗苦勞を積んだ人で、技術界は大いに尊敬せねばならぬが、それは程度問題である。後進と言へども專門の學を修め、數年の經驗を經、相當の努力をし、各方面の研究を積んだならば、場合によれば先輩以上の識見をもち、先輩以上の手腕を研き得ないとは限らぬだらう。其れが一度先輩といふものがそこに現はれて、自分が後進となつたら、死ぬまでいつも押へられて先輩以下のものによりなれぬといふことになつたんでは社會國家のために悪い、國家はさういふ意味で、技術家を養成したのではない。少しでも役に立つ人間を養成し、訓練を經てお國のために技術を通じて有益な人になつて欲しいのが目的である。

今のやうな先輩萬能の空氣がどこまでも續く事は國家のために由々しき損害である。後進は伸びることが出來ない——といふやうな意味の事を書いた事を覺えてをります。それが非常にその當時の先輩を刺戟し驚かした。で私の先輩に他の專門の先輩が、お前の弟子には偉いやつが居る。亂暴な事を言ふやつがあると言つたと聞きましたが、然し別に間違つた考へでもなし、さういへばさうかといふことで終つたのでありますが、その當時の技術界といふものは先輩萬能時代であります。いつからいつまでが先輩でいつからいつまでが後進といふ境目があればまだしも明治12、3年頃大學を出た者は明治30年には20年間訓練をしてまだ未來永劫訓練せんとする方がある。さうすれば私は明治30年に大學を出た雛子だから幾ら先輩が威張つてもだ先輩の命に服從して行き指圖を受けてもいゝ時代だつたが、

然し大正三年位になれば、私の方も大學を出て、すでに17.8年、「私共よりもつと先輩の明治24.5年に卒業して、20年くらゐ訓練苦勞を積んだ人も、やはり數年前に出た先輩には一切頭が上らない。これではどこまで變なことが續くか、常識的のみか、數理的にも考へさせられた。そこで奮起せざるを得ない。つまり先輩の長所は學べ、先輩の注意はありがたく聽くべきだが、しかし大學を出て10年內外の經驗を經て來たならば獨立の意見があつてしかるべく、何も先輩を凌ぐとか、反抗するのでなく、先輩の切り開いた道以外の更に廣い道、高い山を開拓するのは國家的義務がある。又それだけの識見が大いにあつて、宜しいと言ふことを考へたのが、大正2.3年と思ひます。

其れから時代がさういふ時代ですから、關西に居る建築家の連中もやはり先輩の命を受け先輩の來た道より幅の廣い道に出ることが出來ぬやうな狀態にあつて「これではいかん」と言ふことを皆んな考へ「もつと社會國家に盡すべき廣い道があるはずだ」といふ考へが恐らくその當時の建築界に身を立てやうとしてゐる有力な人の間に滿ち々々して居つたと思ひます。それでその當時機を飛ばして京阪神にをる建築家の有力者に集つてもらつて「我々の力によつて社會國家に大いにサーヴイスをしようじやないか、先輩の後を傳ふて幅の狹い道を行くだけでは相すまぬ」といふ意味を吐露した所、その趣旨には大贊成、至急やらうじやないかといふことになつた。此れが建築協會の出來た全面の理由ではないが、相當大きな理由であると私は思つてをります。私はそのくらゐにしておきます。

伊藤——十五周年の記念號を見ましても、その當時建坊（ケンボン）會といふやうな會があつたらしゆうございますが、その邊のお話を一つ。

葛野——建坊會といふのはその當時の若手の團

體であつたわけです。それが建築協會創立の側面運動ですかね、始終集つてお互ひ意見の交換をもつとやらうじやないかと言ふことでと、毎週一回道頓堀のライオンに集つて、お互ひに話し合つた事があります。

始はたゞ若い連中が寄つて飲むといふ會であつたが——又箕面のラジユーム溫泉で、ケンボン會の連中が集つた。名前はどうか知らんが、結局若い連中10數人が寄つて、その當時建築學會の支部のことで色々話があつたが、支部よりも特殊の團體が良からうといふやうなことを言つて居た。その時、たまたま片岡先生が京阪神のものを召集された。だからまアこれが一面において側面運動をやつた事になるのでせうね。

片岡——その前に7.8年間も續いて居つた會があります。その時分は有力な建築家は極めて數が少なかつたけれども、お互ひの交通がない。名前は知つて居る。何年卒業した人、何をして居るかは知つて居ても、たまに紹介されても帽子を取る以外交通がない。これはお互ひよくないといふので、京阪神のものが集つて、月に一度か二月に一度懇親會、懇談會をやらうといふので、集つたのがオキナ會です。

大阪、京都、奈良。奈良には關野君が古社寺關係で、京都には武田君——その時分來てをつたかどうか知らんが——京都には技術家が2.3人、大阪に5.6人、あういふ10人位の建築家の懇親會が出來た。それがオキナ會でたゞ雜談の會、飲食の會です。一緒に話をするだけです。大阪、京都、奈良の頭字をとつてオキナ會と言つたのですが、そんな會じや問題にならぬといふのが若い人の考へであつた。

伊藤——其の頃今林さんあたり若い人だつたんですか。

今林——もちろん若い部ですよ。25年引いて下さい（笑聲）建築協會の發生した時分は居りましたが、先程片岡先生がおつしやつたオキナ會といふのは私知りません。

其れから建坊會といふのは、其處におられる葛野さんあたりが中心でしたやうです。道頓堀のライオンと云へば、カフエの草分でせうね。其處で毎週一回集つたものです。協會が生れる少し前と思ひますが、その當時の若い先生方が寄つて、話の內容は古いことで忘れたが、とに角何か團體を作るに就て意見を纏めるといふ樣なことをやつて居つた。お前も出て來いといふことで、僕もそこへ行くと、一等僕が若かつたのでとても小僧みたいに扱はれて、苦々しくて仕方がないが、僕等連中は2.3人しか居らない。2.3人ではどうも物にならぬので、やはりどこかに喰ついてゐないと仕樣がないから、小使ひをやつてゐた。丁度公會堂が出來た時分ですから大正7年ですか、大分殖えたので一つもブロツクをこしらえやうじやないかどうも走り使ひばかりするんではいかんと言ふので、確かその時分公會堂の部屋を借りて、これも毎週一回やる事にしました。晝飯を食ひながら、その時確か佐藤君もちよい〳〵見えたやうですね。

僕等は大正元年以後の人が大正會と號して居つた譯です。ところが良いことには大正會は年々メンバーが增えるが、建坊會に至つては死にこそすれ增える事はない（笑聲）だから相當熱があがつた。さういふわけで、これも何年かやつたものです。先程の佐藤四郎君などは編輯を一手にやつてくれた。世話好きでもあり、文筆も立ち仲々良く熱心にしてくれた。佐藤君が何年に去られたか分からぬがその後大正も15年になればおしまひで、先程死ぬことを言ひましたが、今度はわが身もその通りでどんどん增えるわけでもなく、實際においてうんと減りました。其んなわけでいつやら大正會も無くなつてしまつたのです。その大正會が無くなつた。私もちよいちよい世話係をして居りましたが、その後さういふ部分的なものはやらないで皆一緒にやらうじやないかといふので、全部古いのも新らしいのも聯合したわけであります。その後人數は非常に多くなつたが、一向大した熱もなくなり、又問題も無くなり、無くなりといふのはをかしいが、問題を作らなくなつたわけですが——

池田——今片岡さんがお話になつたのと、葛野さん、今林さんがおつしやつた間の繋ぎを申上げたいと思ひます。

私が大阪に來たのが37年の8月です。何んでも7月ですか、所謂今お話のあつたオキナ會があつ

たらしい。それで亡くなつた籠谷君が奈良に大佛修繕のため來て居つて、オキナ會が非常に面白くつて、もう少し早く來ればよかつたといふ話で、一月ほど遲く來た爲入れらなかつたが、その後入れてもらひました。片岡さんの話では先輩が後輩輩を壓迫するといふ方でしたが、私はその時分一番若輩で、漸やくオキナ會に入れてもらつたが、その時に先輩の方が私どもを非常に引張つて下すつて御馳走して下すつて、何でも若いものは會費も余計出さんで先輩が多く出し、幹事としては先輩の人と極く若いもの選んで始終變るやうにした。私共來た始めには亡くなられた茂庄五郎さんと組まされ、全部茂さんのお世話になつた事があつた様な次第で、その時分オキナ會の先輩有力な方々に非常に御馳走にも預るので、いつも具合のよい方の會でした。

ありがたいものだと思つてゐました。そのうちに今の若い連中が、一つ何か考へやうじやないかといふので、今葛野君の言はれた箕面山莊に籠つて、まづ「瓶子倒る」といふ言葉が出ましたが、その時分論じた問題はこの建築學界の何か會を作らう、それに就いては建築學會の支部にするか、別の建築協會なり、別の會にするかと言ふことについて非常に論議をしたが、まだその時には京都大學も出來てゐないし、學會の支部と言つても余り學者らしいこともむつかしいじやないかといふので、いろいろ理由もあつたが、結局學界の支部にせず協會の様なものを作らうといふことになつた。

其のうちに波江君その他大部いろんな人が居つたが、我々大いに得意になつた所、波江君が片岡さんに話をした處、片岡さんがその考へを持つてをられた處へ、我々が會をやらうじやないかと言ふので、其れは良いから大いにやらうといふので、片岡さんがさつと纏められてしまつた。

其んなもんだから、我々から言へば、我々が大いにやらうと思つて考へて居つたことを片岡さんにすつかり御指導を受けてしまつて、何だか我々が主張してやらうといふことを蔦に油揚を援はれたやうなものだといふ笑ひ話です。

片岡さんがやられたから無論かういふ集りも出來たので、我々ではとても圍棊の背較べでは出來なかつた。全く片岡さんの御努力に依つたものですが、我々若いものゝ考へた所を片岡さんの前からのお考へと一致したといふわけで、早く出來たんでありますが、其のうちに段々オキナ會もなくなつて、ケンボン會といふものが、色々協會の運營をやつて行くについて、何か原動力がなければならぬといふので、そこで道頓堀のカフエの屋根裏がお客が來ないから、いつまで使つてもよいので、若い7.8人のものが、何う言ふ議題にしよう、この建議にしようじやないかと言ふので、これが陰の參謀本部みたいなものになつたのです。それが出て來て表向に協會長にかういふ議題、かういふ問題といつて出す。その案が道頓堀の屋根裏の參謀本部で出來あがるんです。其處では氣焰が大きく盛んなものです。會長の所に行けば、其れほどの氣焰でもなくなるが、陰の氣焰は大したものだ。大體そんなもんでせう繋ぎといへば——。

今林——今日さういふ團體がないといふのは遺憾ですね。

池田——お座なりといふか集つた時ちよつとお座なりの意見を今日はやつてゐるが、當時はこれがちやんと參謀本部になつて練りに練つた問題ですから、會長にもつて行くと、其れじや良からうといふ事になる。原動力に中心があつたやうに感じますね。我々毎週集つて仲々甲論乙駁、口角泡を飛ばしてやつたものですよ。

葛野——私が大阪に來たのが大正2年ですが、その時分、大阪の役所の窓から見て居るので、甚だ暗かつたが、東京に比べると非常に遲れてをつたわけです。市内を見渡しても建築らしい建築は殆ど見當らぬ。私は丁度その時分毎日新聞の學藝部に友人が居つて、新聞が日曜附錄を出してをりますが、それに全面市街の建築を書けと言ふので、書かされたことを覺えてゐますが、殆んど特筆すべき大きなものがなかつた。その後歐洲戰爭が起り、急に世間が景氣づいた。丁度大阪の建築界がそれから非常な勃興時代に這入つたものではないかと思ひます。

從つて若い人が澤山集まられた。大阪の建築界は非常な活氣を呈したわけですね。建築協會の一面にはさういふ氣分が多分に手傳つてゐる。皆が

熱を持つてゐる。世間が一面その域に達して居つた。從つて都市計畫法とか、建築物法とかいろんな問題が起つて來た。建築協會が中心になつて、さういふ問題をやるとか、續いて住宅改造博覽會とか大いに元氣があつたが、結局當時の大阪の建築界が一面からいへば勃興時代であります。博覽會でも色々懇談して15、6萬圓の寄附金が集つたのはやはり好況の餘波ですが、只それでは集らぬわけです。さう言ふ所も與つて力あると思ひます。

伊藤——今のお話によりますと、其の頃中心になつた方が非常に元氣があつたと言ふことですが、この頃の若い者は意氣地がないやうにも聞えるんですが、その當時の建築家の方々の社會的地位が今日とは大分違つてをつたんではないでせうか。

葛野——此の頃は仲々元氣の出る余地がないんだね。

片岡——葛野君の言はれた其の面の大局觀だが建築家といふものはやはり何と言ふか道樂世渡といふか、建築家といふものは自己滿足で、今から考へると實に小さい畑を考へて居つた。だから建築と言つても、まア2萬圓、3萬圓、5萬圓のことに血眼になつて努力して、報酬とか經營力から言つたら實に微弱な小さいものを扱つて居つた。それが日露戰爭後日本の財源が增え、本當に現代文明に乘り出す準備が出來、さうして明治の終りから大正のはじめ頃に、始て建築も建築らしいものになつた。從つてそれを扱つてゐる建築家も急に數が增え、質も良くなり、元氣な人が增えて來た。と言ふのがその實相です。

其れで私の記憶に依れば、清水組とか大林組、竹中などやつて居られる人が急に3倍、5倍と大きくなつたのは大正のはじめ、大正4、5年といふ時で、扱つてゐる分量が急に增えた。これはお調べになれば判りますが、金高で言へば、今まで1年に100萬圓以上は絶對やらぬといつた請負人が、一つの工事が100萬圓、150萬圓といふことになれば吃驚して、やつて良いだらうか、何うだらうかといふことで、私に相談に來た方があります。自分の手持の金はそんなにないが、こんな大きな仕事をやつて良からうか、自分の銀行に持つてゐる金融的信用などから言つても數10倍のものになるから相談に來たといふ譯です。この時私は、君は金儲でやるのか、預金の範圍内でやるなんて蜜柑の小賣みたいなことをいふな、建築は建設事業で積極的な仕事だ、100萬圓の仕事ハイ、200萬圓の仕事ハイとやればよい。1000萬圓になつても幾らでも君らの技術的多年の訓練を延長すれば良いと言ふと吃驚して歸つて行きました。しかしゼネラル・コントラクターも社會の波に乘らねばならぬので、さういふ小さい事を言つてをれず、急に多い大きい潮流に乘つて來たといふのは仕事の話だけれども、反面において建築家の力、建築家の畑も急に1反歩、2反歩が1町歩、2町歩といふ風に擴つて來た。澤山の建築家の活動する時代が社會的情勢に乘つて來た。建築家の建築といふ技術が社會的に本當にすくすく伸びる時が來たんだね。社會的情勢が其處にある。

鈴木——全く先生の仰しやる通りでありまして丁度私は清水組に入社致しましてから27年目になりますが、その當時を回顧致しますと、實にその施行法と言ふものは幼稚なものでありました。

私共入社したその時分に漸く鐵筋コンクリートといふものが始まつたと思ひますが、無論タワーとか、ミキサーとかいふものは殆ど完全なものはありませんでした。確か4寸角を繋ぎ合せて其れを4本建て、それに1挺4寸近いものをボールトで縫つて怪しげなコンクリートのタワーを拵へた。鍋も怪しげなもので、板を張りその中に亞鉛引きの鐵板を張つた。それを今の2段卷、3段卷といふやうな精巧なウインチはありませんから、杭を打つてやるといふやうな極めて簡單なもので引上げたものです。ミキサーもドラム型のものはなく、サイコロ型になつたものでありまして、しかもそれを運轉するといふやうな熟練したものは居りません。

其れで私ども自身で工夫して、ミキサーも運轉し、ウインチも卷上げて、鍋を引つくりかへすといつた裝置も考へながらやつたものです。ルームとか、カウンターウエートとか言ふものは考へも及びません。工事の仕事は必ず上から足場を流して樋段取りといふものをやつたんです。シュートもやはり板割の8寸板に6寸板位のもので樋を作りまして、その中に亞鉛引きの板を張つて、それ

を繋ぎ合せて、その樋を打つところに持つて行つた。それを22、3年前まで續けて居つたのでありますから、今日如何に施行法といふものが僅かの間に飛躍したかといふことで、今先生の御話を伺ひまして、その昔を思ひ出しまして、つくづく感慨に堪へないのであります。

伊藤——京都の方に大學の出來たのは何年でございましたでせうか。

片岡——武田君がこちらの高等工藝の先生をして居つて、其れから名古屋の高等工藝に行つて、名古屋に相當居つて、それから京都大學に建築學科を創設して來たんだからもつとあとだよ。

伊藤——永瀬さんの京都においでになつたのは何時頃ですか。

永瀬——42年です。その時にはとに角電車はありましたけれども、京阪電車などは、まだなかつたので、全部汽車で行つたものです。

片岡——京阪は大正になつてからだよ。

谷——大正の初めの事についてちよつと私思ひ出しましたが、少し毛色の變つた事をお話申上げますと、私は非常にありがたいといふ感じを持つたことがあります。

當時の建築界の情勢を今から顧みますと、あの有名な100萬圓の公會堂の建築です。當時ゼネラルコントラクターと言ふ請負業者の各位の間には相當競爭の激烈な時代でありますが、それで一體此れは安いものにやらすといふ譯には行かない。勿論高いものにやらすといふ譯には行かない。其れでは何を一體これの標準にするかといふので、私共も大分苦心致しまして、堅實な請負業者から色々な見積りが出て居ります。それを虎の子のやうにして集めて、それの平均を睨んで居つた。飛び離れて安いものもいけないが、高いものもいけない。相當眞劍におやりになつてゐるものゝ平均を見て居つたのです。其れに依つて大體でつちあげた私どもの豫算といふものが比較的正しいのではないかといふので、片岡さんはじめその當時大阪の財界の方々に集まつて頂いたのです。そこでその入札を開札するにはやはり持つて來た順に1.2.3.の番號をつけて、私共が當時組んであつた豫算を前へ出して蓋をして置く、そして皆さんのものを讀んで行つて、それを全部寄せて、5人なら5人で割つて見る。其のものと私がこゝに出してをるものを開けて、そして最もそれに接近したもの、そして私共の出したものより幾らか安いもの、高い物ではない。

然し決して最低ではないといふものにしたならば、よい建築が出來るんぢやないかといふ事で、それが標準になつて出來たのであります。ですからその時代は現場の公務を視ると言ふ。非常に愉快であつた。大變重く用ひられた樣な感じがしまして、非常に愉快な生活を續けてをつたのであります。

其れからなほこれは前のことでありますが、今林さんがはじめて大阪においでになつた當時、松田といふ方が大阪に建築事務所をお開きになつて居つた。それで私どもの恩師から君の設計の事務所を見に行つたらどうかとの事です。

此れは可なり新らしい型といふことでありまして、當時鐵筋コンクリート建築は、プランにおいてどのくらゐの割合に節約出來るものか私、調べて見たのであります。明治の晩年、日本銀行の建築は甚だ喧しい建築でありますが、これの1階のプランを見まして、壁の面積を調べて見ました。その當時北濱銀行といひましたが、それは恐ろしく簡單な建築だ。壁が薄い、そこの鐵筋コンクリートの壁の面積を調べて見ました。今迄の建築では大體34パーセントの面積を壁で占めてをりますが鐵筋コンクリートのものは非常に僅かだつたかと思ひます。

此れは當時私の調べた建築についてですから、現在どの程度になつて居るか分りませんが、なるほど鐵筋コンクリートといふものは、この坪何千圓といふやうな價の高い土地において、面積を有用に使へるといふことで、これは一大進歩だといふやうに私感じました。えらく禮讃し色々勸めたことであります。此れがちようど大正4,5年の頃です。

鈴木——鐵筋コンクリートのセメントと言ふものは當時非常に不安でありまして、どうも困らないセメントがあるんですよ。それで私ども施工者はこのセメントに困るんです。その當時は樽でしたが、入つたものを百樽ぐらゐづゝ別棟に積場所を決めて、そして拔きとつたものです。それをち

やんと試驗機にかけて番號を打つて、何時試驗して何日目に折るとか、引つ張るとかしましてね。一棟がみなペケになるといふ場合があるんですねいま考へて見ると、全く夢のやうですよ。

永瀬——京都では割に鐵筋コンクリートが早いんですね。高瀬川の橋が鐵筋だといふので、それを井上秀次さんがやつて居られた。その後私が行つてから、丁度其の頃日比忠彥さんが土木の講義をして居られたので、この先生に設計してもらつて精神科の鐵筋の塀を作つてもらつた。これが始て本式の計算をしてもらつた鐵筋の塀で、先生自身で現場についてもらつた覺えがありますが、それからあとに出來たのは圖書館あたりですか。

伊藤——話は少し違ひますけれ共、建築協會事務所が創立以來、今日の朝日ビルになるまで相當動いてをりますね。私らは大同ビルのおしまひ頃一寸知つてをるくらゐでありますが、此の事務所のことについては隨分初めから面白い話があると思ふのですが……十五周年記念號で見ますと、一番初めは片岡先生の所にあつた樣ですが……

片岡——事務所といふよりはあそこにアドレスがあり、其れから安井君が居つたので自然さうなつたので、あれは自分の事務所で協會の事務所といふ譯ではなかつた。

僕が使つてをる部屋を使つてをるんだから、本當の事務所ぢやない。

池田——それから不動貯金ですね。

伊藤——不動貯金、大江ビルで、それから堂ビル……

池田——堂ビルから江商ビルに來て、江商ビルから今の大同に來たのですよ。

伊藤——さうですね。大同が昭和2年になつて居ますし、朝日ビルが昭和7年です。それで今度紀念誌にも何とか、かういふ寫眞を集めたいと思つてゐるんですけれども、不動なんかの寫眞は、何處かにないものでせうか。

岡部——もう壞してないでせう。

片岡——ビルは壞しても銀行には何か寫眞ぐらゐあるだらう。しかし寫眞をのせる程の價値はないが。

伊藤——然し歷史ですから……

池田——あの頃は大きな廣い部屋にちよんぼりしてをつた。會合も出來れば何でも出來たものですよ。たゞ困つたのは階段が非常に高いんです三階だといふけれども、四階ぐらゐあるんだ。

片岡——あれは要らぬ部屋だから、貸したのだよ。

池田——それは實に素晴しい廣い部屋で、三部屋ぐらゐに分れてゐた。

伊藤——色々25年間の大きな出來然を調べて見たいんですけれども、創立が大正6年で、8年に日本建築協會と改稱されてをるやうですが、このころに都市計畫とか、建築條例なんて言ふものに就いて、協會が盛んに活躍されたやうに聽いてをりますが……

片岡——それは記錄にはつきりしてゐる。それは大正6年、この會が結成されるや否や、其の年の12月に建議を出したのだ。その建議文もちやんと記錄に殘つて居る。其の建議文といふのは實は僕が書いたものだ。東京の建築學會が、既に十數年前から建築條例制定を急いでくれといふ建議を東京市長へ出して居つた。それは都は東京だけだと思つて居る事、もう一つは東京市長と言ふものは絕大な立法權を持つてをるといふ樣な幼稚な考へ方からだね。

其處で東京市長に建築條例を急いでくれと云ふので、建築條例促進實行委員會といふものが出來て、其れがその儘になつてをることを僕は知つてをつた。ところがこの建築條例といふものはさう簡單なものではない。此れは帝國の大法典だから內閣を動かして、そして內閣の原案として立法府へ相談すべきものだ。東京市長などへ持つて行くべき性質のものではない此れを作るにはまづ調査委員會を作つて、その調査委員會で原案を立て、それを練り上げて、然して法制局が法律文に直し政府がそれを公布するといふ順序を經なければならぬものだ。

それがおしまひには都市計畫調査委員會と言ふものを至急に拵へてくれといふ建議案になつたんだが、その始まりは建築法を急いでくれ、その調査會を急いで作つてくれといふ案だつたのです。當然さういふ風に建築學會はやらなければならぬのだつたけれども、かういふ風に建築學會がピントはづれの建前でやつて居るのだから一向に進展

しない。

其處でこれではいかぬと思つたので、關西建築協會の團體力で政府を動かさうといふ事を考へ、學會の同意を得て建議しようといふ事になり、建築學會の方に呼びかけた「關西建築協會では建築法の調査會を至急拵らへてくれといふことを建議するが、學會の方も一緒に來るかどうか」丁度その時分には建築士會といふものも出來てをりまして、この建築士會の方にもそれを申し送つた。そして、もし君等がついて來なければ、こつちだけでやると云つてやつたら、兩會とも無論ついて行く。ついて行きたいけれども、かういふ簡單な文書ではよく分らないから、私に一度出て來てくれといふのです。それが大正6年の12月末か翌年の1月だつたか、建築協會で總會といふか例會を開いて、會員が寄つて全會一致で建議を出さうとした。その翌月だつたかと思ふ。だからはつきりしないが、とに角直ぐ來てくれといふので私行つた。行つて建築學會の法制定の實行委員に相談した所が、それは學會としても全幅的に賛成だから早速打合せようといふので、私が書いた案を出した、さうすると、君の書いた建築協會のその通りだ。筆を入れる餘地はない。至急にそれでやらうではないかといふ事になり、丁度内務大臣が後藤さんだつたので、早速後藤さんに掛け合つた。掛合ひに行つたのは建築協會を代表して私、學會を代表して塚本君、それから建築士會から永野君其の他にもう一つ異分子があつた。ちようど都市協會といふものが東京にあつて、藤原君がその世話をしてをつたので藤原君、この四つの團體が署名して、それを後藤さんに手渡して説明した。

さうしたら後藤さんは技術家を馬鹿にして居つて、技術家といふものは窮屈なことをいふものだ。君らのいふことは筋は通つてゐるかも知れぬが、それは机上論であつて、世の中はそんなに筋書通りに行くものぢやないよといつて、妙に政治家を氣取つて、中々受付けようとしない。その時通俗的な言葉でいへば、我々は捨科白を殘して歸つたのだ。我々は書生ぢやありません。我々は建築の大きな團體を背負つて20年、30年の經驗を積んで來てゐるのだ。今日の日本の亂脈になつてゐる建築界といふものに愛想をつかしてゐるので、一刻も早くこれをやつて欲しいと言つたのだ。書生論にも非ず、技術家の幅の狹いものにも非ず、よく部下の方にも相談して欲しい。さういつて歸つた。さうすると、あとで後藤さんが部下に相談したらしい。

所が丁度内務省では都市計畫といふことで建築法の必要なことを痛切に感じてをり、都市計畫課といふものが出來てをつた。死んだ池田宏君がその第一回の都市計畫課長になつてゐた。都市計畫といふ問題は、西洋ではもう法律も出來てをるし、あらゆる將來のプランをやつてをるといふニュースを始終聞いてゐる。そこへ後藤さんが我々の建議を見せたのだから、これは閣下大變なものです。内務省はこれからこの問題を中心にスタートしようとしてゐる。大きな問題だ。これは書生論とか、技術論といふものではない。あゝさうか、どうしたらよいか、これは至急にこの建議通り實行なさつた方がよからうといふ事になつた。

此れは打合せたものでも何でもない。建築協會といふものが生れ、その機運が熟し切つてゐる時に、其れが政治的の働をしないので釀醸して居つた。それが部下を通じて漸く分つた。内務省でもどうしようかといふ時であつたから、その發火點に火がついたのです。僅か一週間もたゝないうちに後藤さんから至急に會ひたいといふ事で、越えて2月の始に日を約束して、又お目にかゝつた。今度は後藤さん態度を一變して正直にいはれた。「君この建議を部下に相談した所が、是非此れはやつてもらいたいといふことであるが、就いては君らは本當に協力してやるか」「勿論大いに協力します。これは我々建築界の最高至大の使命だ、これが出來ないといふのは國としても誠に恥しいことだ。建築界としてもこんな有樣を默つて見てはをられない。第一回の調査會を一刻も早く開いて建築法立案をされることを希望する。誰もこれに不賛成のものはない、みんな協力します」と言つた所が、よし、それぢやゝらうといふことになつたわけです。その時出した案といふものは隨分餘計なお節介の案までくつゝいてゐて、建議案の中には調査會を一刻も早く作つてくれ、その調査會のメンバーはこれこれの人だといふ所まであつ

た。そのメンバーといふのは各省の代表者、それから建築技術界の代表者、それから衛生、工學、土木行政のエキスパート、東京市長、東京府知事などずつと書いてある。其處でその通りやるから君たち建築代表者も大いにやつてくれなければ困るぞと逆襲して來た。

當然やりますと言ふので、我々は背景の數千の同僚を代表して出て行つた。其れから後藤さんは直ぐに、今の金にしたら僅かなものですが、2萬か3萬といるものを追加豫算で取つた。その年は不思議な事にそのころ既に豫算が通過してゐる。それで追加豫算を出すといふことになつた。それから各委員を任命することになつたが、各委員は何でかういふことになつたか分らぬ。宮内省と司法省と陸海軍省は出なかつたけれども、他の次官は殆ど出た。文部省からは田所義治氏が出た。内務省からは局長が出た。土木、工學、衛生工學、衛生生理の方もみんな出た。建築界の方からは私と佐野君と塚本君が出た。皆な我々のいふ通り出た。建議の方も3日には通過した。2月出て、4月になつて後藤さんが外務大臣に代つてしまつた。困つたことだと思つたが、新野次官が内務大臣になつたので、後藤さんが、新野やれやれといふことになつて、新野さんの名前で召集した。

内務大臣官舍が今の帝國ホテルで、委員となるべき人を指名して出てもらつた。ところが後藤さんがこれの說明をするといふのです。外務大臣が說明するのはおかしいではないか、いや俺が内務大臣をしてをつた時、皆と協力しようといつたのは俺だから新野君、俺が說明するといふのである。その說明の中に、この調査會は早急にやりたい。ついては何れ諸君に委員をお願ひしたいから協力を願ひたい。其れは實は負うた子にものを教へられた……といふ言葉を使つた……どうだつたかな忘れたが、何でもそんなやうな意味のことを言はれて、建築界から言はれたが、これは是非やらなければならない問題だから、至急に調査をやつてほしい。一刻も早く原案を作つて欲しい。よろしくお願ひするといふことを挨拶された。

其してその年5月から12月の初め迄委員が數回にわたつて寄つて原案を作り、法制局で立派なものに作つてくれて、翌年の3月の10日ごろ衆議院に出た。さうしてこれが4日か5日で衆議院、貴衆族院を一緒に通過し、附則に大正9年から六大都市にこれを施行するといふことで、それから急いで勅令、省令を作らなければならぬ。勅令、省令を作るといふので、僕等は屢々引張り出された。だからこれは誰が何といつても、日本の建築法といふものは、關西建築協會の原動力が、百パーセントといはぬが、うち九十パーセントまでは働いてをつた。このメリツトに對しては學會も一言も出ない。

池田——東京市建築條例といふのは、東京から頼まれて建築學會が作つたものですが、その當時は今のやうな規則とか法とか言はないで條例といつた。あの時分學校で習ふのにも建築條例と言つたものです。外國が市でやつてゐるから、東京市でもそれを眞似してやらうといふことを考へて、實は今の建築學會に頼んで來たものです。そして委員を作つて「東京市建築條例」といふ案までちやんと出來たんです。これを市長が見て、これは大變いゝものが出來たから、早速やらうと言ふことになり、これをやるには一遍警視總監に相談して見ようといふことで相談した。

所が警視總監はそんなものは俺の方でやるべきことだ、お前要らぬお節介をするといふので、ぼんと刎ねられた。折角出來た東京市の條例といふものは無駄になつてしまひ、學會で骨折つたのも無駄になつてしまつた。それから今のお話の都市計畫調査委員會といふのは、後藤さんのそれが出來たのと同時に、都市計畫課といふものが出來たのでせう。此れは前からあつたといふやうな先程のお話でしたが、其のあとの事でせう。それを扱ふ所がなくちやいかぬといふので、都市計畫委員會と同時に追加豫算をもらつて都市計畫課といふものが出來たのでせう。

酒井——東京市の建築條例を作る時、實は建築學會から前田先生が高等工業に歐米各都市に建築條令を持つて來られて、私共二、三人づつ調査したことがあります。建築學會がそれを取纏めて、そして東京市の建築條例といふものが出來たのです。これが翌41年ごろだつたと思ひます。それから42年に私は學校を出て田舍の方に參りまして、大阪に歸りましたのが大正3年でありますが、當

時大阪に來て借家住居をした時に、その空地の狹い事、建物の構造がひどくて裸のうちは砂地の上の建物みたいで、とてもかういふうちに入つて生活が出來るものかといふやうな不安を感じてをりました。從つて建築條例といふやうなものが一日も早く都市に行はれなければ困るなあといふことを感じ、かう言ふ條例を調べた關係からか知りませんが、一層深く感じてをつた。その後大正6年にこの協會が出來て、早速この大運動にかゝり、その緒に着いたといふことは非常に時宜に適したものだと私ども思つてをります。又この仕事がこの協會の一番最初の發足であると同時に、また最大な事業であつたと今更感じてをる次第であります。ちようど條例の話が出ましたので、その當時携はつた一昔前のことをちよつと……

片岡——其れはかう言ふことなんですよ。當時は何としても西洋の模倣時代であつた。それで西洋のベルリンとか、ベニスとか、パリーの建築衞生取締規則、さういふものを鵜呑みにしてやつて行けると思つて居つた。所が日本はさういふ法律で制裁の出來る都市ではない。又さういふ過去の歷史もない。さういふ點は立派な法治國であります。

ある意味においては最も正確な意味の建築法で行くべき國であるにも拘らず、西洋の眞似としようとした、だから東京市だけでそれが出來ると思ひ、東京市建築條例といふものを編上げてゐるのだ。それは我々もコツピーをもらつた。關西建築協會初期の雜誌にもそれをすつとのせた。それから建築學會でもこれに關聯した寫眞とか、ベルリンとか、ロンドンの建築條例を譯したものを雜誌にすつとのせてゐた。その時の條例といふものは東京市建築局總裁といふものがあつて、この建築局總裁が絶大な權力を持つてゐる。

あゝいふ建築を作つては困る。かうやれ、あゝやれと命令すると言ふのである。

日本の建築界が如何に世間の事情に暗いかといふ事がはつきりするんだ。こんなものは斷然駄目だ。こんなもので行くはずがない。東京府でも警察權がないのだ。これは警察權よりもつと强い法律をバツクとした警察權を持つたもの。警視廳だつて出來ない。もう一つ上のもので行かなければならぬものだ。

此れはピントをはづれてゐる內閣の力で行かなければならぬ、と言ふことであつた。それが協會の初陳であつて、また不朽の功績ですよ。然しそれは先刻も申したやうに、如何にも必要に迫られて居つて、協會か何かが出來て誰かが大聲叱呼して、その實現を圖らねばならぬといふチヤンスであつたことだけは確かである。

其れが大正6年でありますが、それを15年、16年前に言つても中々人はついて來ない。如何にも必要に迫つたそのどん底に行つて呼んだものから人もついて來るし、政府も無論無條件にその調査會の立案を鵜呑みにし、法制局で法文化して直ぐ議會に出した。議會もこの大法をたつた5日ぐらゐですらすら通過させるはずはない。これが出來たといふのは、もうその必要の時期に迫られて居たからである。

池田——其の前大正5年に工場法が出來てゐるが、これなんかも一番はじめにやりかけてから殆ど14,5年かゝつて居るでせうね。それにこちらの市街地建築物法、都市計畫法は直ぐ通つたんです「此れだけのものが、こんなに早く通るのは奇蹟だ」といはれたのもです。必要に迫つてゐたといふか、また熱があつたといふか、それから比べると今日、大正8年の事なんだから、協會が出來て25年といへば丁度23年經つわけだが、その割合に何だかどうもその後の速力が鈍つてゐると言ふか、防火地區なんか全部鐵筋になつてゐさうなものだが、それが依然たるものである。それがあの時の勢ひで完全に出來てをれば、空襲なんていつた所が、平氣の平左でをればいゝのだと思はれるのだが——。

片岡——防火地區が出來て、どのくらゐになるかね。

池田——地區の指定は1年くらゐ遲れたかも知れない。

片岡——まア9年か10年だ。

池田——それから言つても20年經つてゐる。

片岡——防火地區に防火建築を命令することを得るといふ、さういふ權能を內務大臣が與へられてゐるのだが、その權能を發揮しないのだ。僕は

賴母木さんに對して、少くともこれは東京、大阪にはやらなければならぬといふことを話したが、それは政黨華やかなりし時代で、そんなことを言ふと、どうも民間の經濟界なんかがうるさいからまあまあといつた調子、今のやうに軍の指導力があれば直ぐ行けるんだが……

一昨年東條さんが陸軍大臣になつた時分に色々な訓示を出したが、その訓示の一項に日本の都市は一刻も早く燃えないやうなものにしなければいかんといふことがあつた。それを協會で捉へて武裝委員會で決議して其れを僕にもつて行けといふのでもつて行つたことがあるが、陸軍の言ふのは正論である。正論だけれども議論だけでどうにもならない。實現する上に推進力を發揮しなければいかんではないかといふので當局に迫つたが、仲々實際のところが分らない。ついて居つて喧ましくいはなければ「御尤もだ」といつて、翌日は忘れてゐる。洵に困つたものだ。どうしても、もう一つ肚に入らないのだ。大體防空々々と言ふけれども、爆彈に中つて死ぬものは餘程運が悪いのでそんなことよりも火事にならぬ樣にしなければならぬのだ。

だから少くとも中心地だけは燒夷彈が中つても少しは焦げるにしても燃えない。近所にも燃え移らないだけの建物にしなればいけない。騒ぐな騒ぐなといつて、火事になれば騒ぐだらう。

池田谷——建築協會の第1回都市問題會議が公會堂であつた時、防火建築が提唱され、私と波江さんと、中央公會堂でその贊成演說をやつたことを記憶してをります。それから防火建築の宣傳を大阪府と建築協會が協力して冬の寒い日に池田先生と自動車に乘つて廻つたり、私がポスターや廣告を刷らしたり商工課の人も協力して防火建築を市の中に宣傳した事がありました、あれが大正12,3年頃だつたと思ひます。

片岡——初めは都市計畫も非常に根本問題に觸れて居たが、近來は行政上の問題が主になつて、都市計畫の神髓を知らない都市行政のエキスパートが出て來たりして——。

池田谷——當時は綠化運動などもやつたものです。

片岡——私は非常に國家的義務を感じて、チヤンスがあれば、さういふ都市の防火地區、防火都市にしなければならぬといふ信念をもつて、セメント同業會と共同して、大阪毎日の記者と二人で北陸へ講演に行つたことがあるが、新潟ではまるでこの趣旨が徹してゐなくつて憤慨させられたものだ。會場の方へ行つて見ると、セメント同業會の書記がゐて、段取はしてありますといふ。なる程立札は立てゝあるが、不便な所だから人は一向來てゐない。さうしてフイルムを持つて來るといふので、七、八歳の子供が一杯をるが、大人がゐない。人を馬鹿にしてゐる。これでは駄目だといふので、次の富山へは市長や知事に急親展で市のインテリ層を集めてくれといつてやつたので、富山はやゝ徹底した。金澤の方は更に市長が私の友人だつたから、急親展でインテリを集める樣手配したので、この方は聽かすべき人は全部集つた。まあさういふ馬鹿を見た事もある。其れから都市計畫運動には後藤さんと一緒に出かけた事もある。後藤さんは政府を辭めても都市計畫は徹底する樣にやらねばならぬといふ事で行つたことがありますが、私一人で出張した序でに鹿兒島、福岡その他二、三都市へ行つたこともある。これは皆條例の通過する前後のことです。建築協會が建議した前後です。然しその後は熱があがらぬね。君の言ふ樣に。

池田——あの大正12年の關東の震火災、あの時分にもつとやらなければならなかつた。しかし大分あれを機會にあちこちで講演會などやつたものですが。

池田谷——あれを調査して東京から歸つて直ぐ僕が大江のビルの講堂か何かで報告演說をしたのを覺えてゐる。

片岡——あゝいふことがあるからだ。あれあることを豫想して防火地區の指定があるのだ。もしこれが實現してをつたなら、損害はあるひは5,6億で濟んでをるかも知れないのだ。そこでさういふ現實の例を引いて、その後も確か隨分やつたよ。今でも遲くはない。地震より防空といふ點から見ても、メーンストリートなどは燃えない街にしておくことは必要だね。これあれば何も狼狽することはない。

池田——岡山へも行つたことがあるね。

葛野——僕は覺えてゐない。

伊藤——建築界25年の間で、劃期的な仕事といへば、櫻ケ丘の住宅展覽會、これは大正11年でありますが、私ども學生時代で拜見に行つた。そして非常に立派なので驚いたものですが、その住宅展、それから昭和7年の15周年を記念して綠ケ丘上野芝などの住宅展を非常に大規模にやつて居られますね。其れから昭和9年には都市武裝運動を盛んにやつてをられまして、映畵を作つたり何かして、色々やつてをられます。其れから昭和9年に陳列場が開設されてをりますし、昭和7年にはクラブが出來てをりますね。さういふやうな問題についても、色々お話があるのぢやないかと思つてをりますが、如何でせう。

片岡——都市防空といふ點からは更に改善といふか、改造といふか、武裝といふか、それを急がねばならぬ時であるといふことは明かなことで、丁度今は軍の方でも社會の方でも、空襲を控へつてこの防空といふことについては非常に熱の起た時であるから、この際是非これを何とか早急にやらなければならぬ。そこで都市武裝委員會といふものが出來てゐる。政府の方にもその熱があり、民間にもその熱のある時だから、從來は中々言つて見たところで耳には入らぬが、この際一押しだと言ふので、この委員會が出來てゐるのはまことに結構であるが、委員會の活動捗しからずといふことをいひたい。うんと熱を上げてこの際やらねばならぬ時なのに、創立その後この會の若かりし時の熱がなくなつて來て、何といふか、老木花少しの憾みなき能はず、今の若い人は老衰せるかなといふ感じがする。

此れは最もよいチヤンスが來てをる時なのであつて、この際是非熱を持つてやらなければならぬと思ふ。形だけ、枠だけは出來てゐても、中味は冷たい。死んでゐるといふ感じがする。僕がいふと何だか惡口のやうになるが……。

池田——それは會全體の行き方がさうなんですと言ふのは近頃は若い、所謂學究の方が多くなつた所爲でせうが、例へば都市武裝にしても、都市武裝といふことを普及し、宣傳することが主であるのですけれども、其れよりもこれをどうしたらよいか、さういふ具體的方法といふか、學術的研究といふか、その內容をどうしたらよいか、どうしたら餘計その効果が上るかといふ學術的研究の方にばかり頭が置かれ、社會を指導しようとか、教へようとか、どう引つ張つて行かうかといふことはお留守になつてゐる。所謂學究型になつてゐるからですよ。

片岡——第一の根本を忘れてゐる。

池田——さういふ風に私どもは感じてをる。若い方はやはり學究的な方が主であると思ひますが其處の所が一寸考へが違つてゐる樣に思ふ。

片岡——これは建築學會の惡口に聞えてはまづいけれども、建築學會の若い人は役人だつたり、プロフエツサーだつたりするから、自分の職域に向つて政治家を指導して行くといふやうな大それたことは出來ない。

だから政治家のやつてゐる小手先を多少でもよく指導したいといふ微意から枝葉の修繕でやる。耐火塗料でも塗つたら一時間で燃えるものはせめて三時間は保つだらう。かういふやうな枝葉の修繕に走るやうなことをやつて、これが實際的ではないかといふのである。此れは大局から見れば枝葉の修繕である。枝葉の切り盛りも必要だが、もう一つ大事なことは、その根本の問題だ。根元が折れたら枝葉が滅びてしまう。

其の根元を丈夫に培へといふのだ。其れは政治力である。政治力を出すやうに政治家に教へる專門家の最高義務はそこにあると思ふ。西洋のことをいふやうだけれども、西洋では專門的の事で、國家の大事なことは專門委員會の案を作れば政治家はその通りやつて行く、だから專門家は自ら責任を感じてやる。

我々も大局を誤らぬやうにしようと言ふので、その根本を研究して小手先のことはあとに廻す。所が日本の學會と名のつくもの、或は專門家の委員といふやうなものは、政治家が泣言をいつて、そんな金はない、今さういふ事を急にやつては困る。何とか應急手段を考へてくれと云はれると、はいはいと言つてやつてゐるやうに見える。

政治家といふものは何としても政治家だから、業界專門家のことは分らない、政治家といふものはかうやるべし、よしやらう、ある意味において

政治家といふものは太つ腹だから、さてといへばいふ通りにやる。さういふ意味においてこの協會も、もつと積極的に動かなければならぬ。やはりどうもその眞ん中ぐらゐだな、殘念だけれども、都市武裝委員會が出來たあとを見ると、もう一つどうかと思ふね。

伊藤——どうも非常に結構なお話を聞かして頂きまして有難うございました。

創立當時の燃ゆがごとき皆さんの意氣を承りまして、我々若いものは非常に恐縮いたしてをるやうな次第であります。

此れからも御指導のもとに出來るだけ頑張つて見たいと思ひます。どうぞよろしく、時間も迫つて參りましたので、此のくらゐにいたしておきます。どうもありがとうございました。

（以上）

防火改修展覽會開催懸賞募集

本會創立廿五周年記念事業の一として現下の緊急事業たる防火改修事業の促進を計り、改修の完備を期して展覽會を開催致す事となり、其の詳細に就いては先月號本誌上にて通知通りであるが、締切日を延期して多くの應募を願ふ爲內容の一部を揭載して、廣く應募を願ふ次第である。

1. **應募要件**……（過日送付致せし通り）
2. **考案圖及實物見本說明**……（同　上）
3. **入賞者の人數及賞金**

入賞	五名	賞狀及賞金五拾圓宛
佳作	五名	賞狀及賞金貳拾圓宛

4. **締切期日**

昭和十七年五月五日（火）

5. **發表**

審査の結果は本人に通知をなすと共に「建築と社會」6月號及左官業組合會報に發表す。

五月一日

社團法人　日本建築協會



左より　石川純一郎氏、松本儀八氏、中西六郎氏、瀧澤眞弓氏、安井武雄氏、藪中一良氏、堀口甚吉氏、玉置豐次郎氏、篠原太郎氏、錦田編輯常務、小林編輯幹事長、二人おいて大下編輯常務

出　席　者　氏　名

石川純一郎氏	堀口甚吉氏	瀧澤眞弓氏
玉置豐次郎氏	中西六郎氏	安井武雄氏
藪中一良氏	松本儀八氏	篠原太郎氏

（五十音順）

編輯幹事長	編輯常務	
小林　清	大下順三郎	錦田直一

小林——ちよつと御挨拶を申上げます。本日は皆さんは御忙しいところを、かくも賑やかに御出席下さいまして、ありがたう御座ゐました。すでに御承知のごとく、わが建築協會も創立以來本年は25年に相當致しまして、いろいろ紀念事業が計畫せられてをりますが、つきましては我が「建築と社會」におきましても、この5月號を紀念事業特輯號と計畫致してをります。つきましては座談會を二つほど開く豫定で、その一つは先日、協會創立當時の回顧ならびにその後25年間の建築界の變遷を語るといふやうなテーマで、片岡會長はじめ長老の方々に出席して頂きまして座談會を催しました。それで今回はその過去に對しまして將來といふ意味で、本日皆さんにお集りを願ひまして建築界の將來を語るといふテーマでお話を願ひたいと思つてをります。

所が將來を語るといふことは、なかなか漠然とした問題でありまして、實はこれを計畫致しました編輯の方におきましてもいゝ考へが浮びませんので、何かいゝ考へでもございましたなら、お智惠を拜借いたしてお助けを願ひたいと思ふのでございます。この前の座談會は主として創立當時の回顧、それに25年間の業績でありましたが、幸ひかういふ風な紀念事業に關聯してをりますし、協會の過去の業績といふものを、また見方をかへて回顧してもよろしいし、あるひは今後の建築協會の進むべき方向、あるひは建築家の取るべき態度といふやうなことについて、お話を願つたらいゝのぢやないかと思ひます。

幸ひ先ほど瀧澤先生から明治時代の建築の事について資料をお持ちだと聞いてをりますのでそれをきつかけにしてお話をして頂いたらと思ひます

瀧澤——いま司會者から承はると、すでに過去を語るといふ會があつたといふことでありましてこの席では未來を語るといふことであるさうでありますが、その過去と未來をちようど連絡するといつたらおかしいですけれども、唯今司會者から御紹介がありましたやうに、明治20年にこゝにお目にかけるやうな書物が出てをります。

表題は「內地雜居東京未來繁昌記」といふ本でこれに書かれてをることは、明治20年において東京の未來はかくあるべしといふことを書いたものであります。著者は末廣鐵腸といふ方で、この方は明治初年の名士として有名な方であります。

今の京都大學の末廣博士のお父さんに當る人でありまして、當時のジヤーナリストとしては第一人者が東京の未來はかうあるべしとして語つたのでありまして、その最初に國會のことが書いてあります。その當時としては、4年後には帝國議會が開設されるといふことを豫想してをりまして、その帝國議會に對する期待といふものは非常に大きかつたと思はれます。それで最初未來の帝國議會はかうあるべしといふことを書いてをるのであります。ところが私どもこゝで見逃し難いことはその議會の最初の議題として議員が最初に發言したものに、かういふことが書いてあるのであります。

それをちよつとかい摘んで申し上げますと、とに角將來の日本が文明國たるためには日本の建物を立派にしなければならぬといふことをまづ最初にいつてをるのであります。

其の理由は今まで木造では火災炎上の恐れがある。それから不體裁である。文明國の建築法に適してゐないから、特に東京のごときはこれをやらなければならぬ。所がこれは未來のことを書いてをるのでありますから、幸に十九世紀の時代においては市區改整……市區改正といふことが當時あつたわけでありますが……市區改整をやつて改築を行つたから東京府下いたるところ煉瓦もしくは石造となつた。これは當時の政府の手段がよろしきを得たからであるが、なほこれを全國に推し弘めなければいかぬそこで本員は政府の嚴命を以て全國の家屋を煉瓦もしくは石造に改造することが最も策を得たるところと思ひます。

ところが、これには贊成もあり、反對もあり、議場が騷然となつた。かういふことをいつてをるのでありまして、私はこの本に特に興味を感じたのであります。それからいろいろのことをいふてをりますが、要するにこゝで問題になりますのはその當時の人々にとつては、煉瓦造とか石造とかいふものは、絕對的なものであつて、煉瓦造りか石造になれば、もう文明國だといふことなんですね。

今日から見ると、まことに今昔の感に堪へない

次第でありますが、こゝで面白いのは田舎の方へもなほ此れを強制せよといふことであります。

此處にかういふ文句があります。わが固有の萱家は是非ともこれを廢し、野蠻の看板は急にこれを取のけたく思ひます。この會堂に列席せられる諸君は、みな經驗に富む方故、御承知のごとく都會の人のみ外國人の輕侮を免れ、僻陋の人のみこれを免れ能はず、これは家屋構造の如何に關するかといふも誣妄の言ではありますまい。これによつて本員、は例へ1億圓、2億圓の補助金を要するも、全國の家屋を改築することは最も贊成といたします。これは贊成議員の話ですが、さういふことなどがあつて、とうとう時間が來て議事が終つてをるのであります。それからさきのことは書いてありません。

そこで私はこの問題を考へて見ますと、二つの內容があると思ふのです。それは如何に未來を語つて居つても、その當時の現實といふか現實に立脚したそれ以上は出てゐない。やはり明治初年には鐵骨も鐵筋も考へられないのですから、日本を改造するには石造によるか、煉瓦造にするか、さういふ現實に立脚する。それ以外にはない。これが後世から見ると、隨分時代遲れの考へ方と思はれるのです。その反面において非常に行過ぎてをる點がある。行過きてをるといふのは、田舎でも何でも建築は全部石造か、煉瓦造にせよといふのです。今日統制といふことは全國みな一緒にやつてをりますけれども、かういふこともひよつとすると、明治20年の未來を語るといふ本にあるやうに、この未來の帝國議會において語られたといふことが、或は將來顧みられて面白いことがあるかも知れない。時には時代遲れのことがあり、又一面には行過ぎのことがあると思ふのです。それで現實に立脚して未來を語るといふことが如何にも難しいために、この資料を持つて來たのであります。これには未來の東京の建物の圖も出てをります。

今日から見ると、まことにおかしなものでありますけれども、その當時から見たら非常にハイカラなものであつたかと思ひます。お廻しゝますからどうぞ御覽を願ひます。まあこんなことが私の最初に申上げる一つの資料なんです。

小林——明20治年ごろの、今で云へば防火改修の樣なお話が出ましたが、玉置さん、何かそれについて當時の防火改修と云つたことについてお話がございませんか。

瀧澤——最初はやはり火事を恐れてゐるんですね。江戸は火事が名物だといふので、丁度明治二十年は鹿鳴館時代で、國家主義がそのころ盛んに興つて來てゐるらしいんですね。

玉置——將來を語るといふことがないので、過去になつてしまつたやうですが、ちようど明治20年頃まではさういふ思想の頂上ではなかつたかと思ひますね。それで明治五年に銀座の大火災があつた時に、政府はその當時の日本の國力としては勉强し過ぎるくらゐに金を出し、銀座の大改造をやつて居るのです。それは今まで木造であつたのを、銀座の街を全部煉瓦造りにしてしまつた。あれは實によくやつたものだと思ひます。それで此の頃でしたら銀ブラをするといふんですが、その時分はあすこの建物を全部煉瓦造りにして、あの道路を全部煉瓦で舖裝したものですから、今の銀ブラの代りに、その時分のハイカラな小說なんかを見ますと、煉瓦に行く、煉瓦に行くと書いてある。銀ブラするといふことを煉瓦に行くと言つて居ります。

籔中——今でも俗に煉瓦路に行くといへば、銀ブラのことですね。

玉置——其の當時の文獻には、この煉瓦造りのことが澤山殘つて居るのです。けれども何の程度煉瓦でやつたか、實は私は疑問を持つてをつたのです。ところが、關東の大震災で、東京は燒野原になつたやつたでせう。ところが銀座のあの通りだけは、煉瓦だつたので、すつと殘つたのです。今上天皇が當時攝政宮であられましたが、この煉瓦の廢墟の中をすつとお通りになる御寫眞がありましたが、あれを見ても、明治5年ごろの文獻に殘つてをりますことが事實それに間違ひなかつたといふことが明瞭になつたと思ひます。それが日本の都市改造の最初だつたんですね。その本はその理想を以て一擧に進まうとしたですね。

所がそれからの東京は度々火事になつてをります。そこで同じ筆法でやらうとしたんですけれども、もう今度は財政關係などで堪へられなくなつ

てしまつて、到頭挫折してしまつた。それがすつと續いてもつてくればよかつたのですが、途中で挫折してしまつた。それきり明治政府を忘れてしまつた。それで結局日本の國がはじまつて以來、明治時代が最も建築政策の拙劣な時代なのです。

そして大正の始めから政府は建築政策を考へるやうになつたんです。だからほかのいろいろな文化を見るといふと、明治時代といふものは非常に華かな時代でありまけれども、建築時代としては一番暗黑時代です。

それで建築學會などが築建協會と協調して運動をせられて都市計畫法とか、市街地建築物法とかが出來るやうになり、漸く日本の市街地建築の足が地につくやうになつた。それからまた出發し直す譯ですね。

其れで結局これから將來の話になるんですけれども、皆さんいろいろ御意見はあるだらうと思ひますが、私は今の日本の建築の將來といふものはいま瀧澤さんのお話しになつたその二つに盡きると思ひます。日本の建築の體裁を考へること、火事のことを考へる。この二つに盡きると思ひますね。今の東亞共榮圈各地の建築を見て、飜つて日本の街の建築を見たら恥づかしくて仕方がない。占領したシンガポールの街にしても、香港の街にさも、日本の街よりすつといゝんですからね。征服された土地が征服したものゝ住んでゐる土地より立派な街ですから、これはどうかと思ひますねだからこれからの日本の建築は、あゝいふ征服したところよりも立派にしなければいかぬ。それでなければ體面が保つて行けない。あれを見ると日本の街はもう見すぼらしくつてね。

それと今の火事の問題ですね。今は日本が勝つてをるから良いですけれども、それは必ず將來報復されることはあるといふことを覺悟しなければなりませんね。先づ次の時代にやられる時がくるかも知れぬ。その準備といへば、火事に備へるよりほかないんですね。だから明治20年と今日と、我々が同じことをいふてをらねばならぬといふことは實に心細いことでありますけれもど、少くともこの二つが完成されない以上は滿足は出來ない。それ以外に日本の建築界の進むべき道はないと思ひますね。

小林——明治時代の銀座通りは、建物をすべて煉瓦造にすべしといふことが出たのでありますが將來の都市の建築は總て耐火構造にすべしといふ風に出來ないものでせうかね。

玉置——明治5年には政府が命令を出して民間にやらしたといふのではなくして、政府自身がやつたんですね。その政府のやつた建物を民間の人が買ふたというか、借りたといふか……。

藪中——あれは年賦です。拂下げを受けるものがなくて困つたといふことです。

瀧澤——それは塚本先生の明治初期の建築についての學位論文の中にもあるんです。

堀口——あのことは西洋家造型といふ日本建築で、明治文化全集の自然科學篇にも載つてをりますね。大阪でも時々即賣會に出てゐます。私も持つてをりますが、5冊ありまして、その本を見て見ますと、建物の實例は大體英國あたりの田舍の住宅なんかゞモデルになつてをるやうです。それから關西にはないですが、やつぱり鐵骨の柱は、梁には鐵骨のことが書いてありますね。

これは建築の最初の本としては可なり注目すべき本と思ひます。文化全集に載つてをるのは早稻田の佐藤さんが自分で持つてゐられる分を、あすこにお出しになつたやうに聞いてゐますが、あれにも鐵骨の事が出てをります。

瀧澤——どうも皮切りに明治の古いことを出したので、何だか說解を受けたやうですが、私はかう思つて出したんです。つまり今日未來のことを語るといふが、これは將來のことを心配してをるのは今日の人だけとらふのは思ひ上つてゐる。過去のわれわれの祖先が、如何に過去の都會の建物をよくしようかと言ふことで努力をして居る。そんな過去のことについて、我々が將來を語る上に隨分教へを受けるところがあると思ふ。かういふ趣旨です。我々祖先が努力してをつたといふことを顧みて、さらに我々が努力する。かういふ建前だつたんです。

今玉置さんのお話がありましたが、歷史の資料を拾ふと、多くあると思ひます。大體商人といふやうなものが出來て、そして浪速の都とか、江戶の都とかいふやうなものが出來たのでせうが、昔は都會といふやうなものはなかつた。田舍見たい

なものであつて、少くとも火事の心配はなかつたでせうけれども、やはり國際的な品位を保つ爲に日本の建物をよくするといふやうなことで、日本の歴史の資料で建築に關する注目すべきものが續日本紀に殘つてをります。それは奈良の都の建物を如何によくするかと言ふ事に就いて、聖武天皇の時代に、位五位以上のもので、財政の堪へ有る者は屋根は瓦葺にし、柱は朱塗にし、壁は白塗りにする。つまり大陸風のものを建てるといふことが出てをります。これは主として國際的の體面を保つためでせうが、日本の建築史上からは注目すべきことであると思ひます。

其れから此れは大變ベダンチツクになりますけれども、ギリシヤのアテネの街のことですが、ギリシヤが對ペルシヤ戰爭で、あの通りの大勝を博した。そしてアテネの首都を「ララストー」の近郊アクロポリスに移し、例のペリクレスが實は閨といつては悪いですけれども、財政を横暴に使つてしまつた。どういふ風に使つたかといへば「アテネ」の街をよくするために使つたのです。此れがため、のちにペリクレスの失脚する原因になつたかと思つてをります。このアテネの街を如何に堂々たるものにするかといふことが、ギリシヤ史の大きな一つの問題であつたといふやうにそれらのことは我々が將來を語る上にも、一應頭に入れておかなればならぬことゝ思ひます。

それで今の明治時代の建築は防火の關係とはこれは立場が違ふ。私はちよつと考へが違つて居るのです。現に銀座のそれがあれほど徹底した改造をしたといふことは非常に注目すべきことではないかと思ひます。

其れからなほこのさきは問題にすべきことではないのですが、御參考迄に申上げたいのは、銀座の煉瓦造りをやつた人は、大阪の造幣局や泉布觀を作つたウオータースといふ人です。かういふことも一寸、言ひ譯がましいですけれども、つけ加へておきたいと思ひます。

玉置——あれは最初に大陸と交通をはじめた時の日本の體面といふものを考へた時、それから永い鎖國を打切つて、世界と交通をはじめた時の日本體面といふものを考へた時、それから今度の東亞共榮圈を確立しようといふんですからね。

今度の時期は前の奈良期、明治維新の時期と非常によく似てゐるんですよ。さういふ意味で、この機會に日本の建築の體面といふことを考へるのに私は非常によい時期ではないかと思ふんです。

瀧澤——全く同感ですね。

小林——こゝで東亞共榮圈の話が出ましたが、此れについて安井先生、大東亞建設にあたつて、我々建築家の進んで行くべき方向ですね。さう言つた事について何かお話を願へませんか。

安井——私は實はまだ深い考へもなく、また考へられないものですから、そのまゝにしてをりますけれども、我々が建築專門家として考へなければならぬことは、日本の將來の建物がどうなるかといふこと、第二にどうすべきかといふこと、つまりオルレンとゾルレンですが、かういふ風になしたいといふ事と、さうしなくちやいかぬといふことを考へなければならぬと思ひます。

これはやはり私個人の考へですけれども、現在割合では日本の建物といふものが、御承知のごとく、非常に國際的な傾きを充分に帶びて來てをりますけれども、私自身としてはこの際もう少し立戻つて、やつぱり日本としての獨自性を持たせるといふことに努力するといふ事が、我々の務めではないかと思ひます。出來るか出來ないかは分りせんけれども、さういふ風な方向に進むのが建築家としての義務ぢやなからうか、又同時に私はさういふことを個人としては望んでをるのです。

やはり國家といふものが存立して行く以上は、總ての點において國家的な獨自性といふものがなくちやならぬ。その獨自性を單的に表はすといふことは象形、つまり形のあるもので表はすといふことが、一番近道ではないかと思ひます。さういふ點において、住宅だとか、色々な建築だとかいふやうなものは、最も近い、最も適當な表現の方法ぢやないかと思ひます。

理窟の上からの日本精神に還れとか、理論的の概念的のことは、皆さん御承知の通り世間で喧しくいはれてをりますけれども、やはり議論でいふよりは、我々具體的に表はす方面に携はつて居るものにとつては、これが非常によい機會であると思ひますから、もう少し獨自性といふものを認識

して行く。この際甚だ狭い考へ方かも知れませんけれども、餘り國際性を走らずに、もう少し獨自性の方向に進んだらどうかと思ひます。大體私個人の考へとしては、そんなやうな考へを持つてをります。

小林——松本さん、何かお考へはございませんか。

松本——私は皆さんの建築界の將來を語る。かういふことのお話を伺ひまして、自分のちよつと氣附いたところをお話させて頂きたいと思ひますそれで將來といふことを豫想するといふのやうなことは、さきほど來、仲々困難なことだと言ふお話が出ましたが、私も全く同感であります。しかし將來にも色々ありまして、あすも將來なら10年先も將來、50年先も將來なら100年先も將來でありますが、私は近き將來、今日のすぐ先の將來といふやうなことについては、どうしても今日の延長で、以て行くべき筋合ぢやないかと思ふのであります。

それは御承知のやうに、今日總て國防國家の目的完遂といふやうなことが、建築のみならず、總ての問題の理念でありまして、其れが即ち國家の企圖であるのであります。それで、どうしても國家の企圖によつて一つの目的に進まなければならぬ。此れは獨り建築ばかりではなくして、總ての制度がさうなると思ひます。

さう致しますと、今日の國家企圖といひますのは、やはり第一にこの國防的色彩、つまり防空、防火、そういつた性格を充分に盛つた建築といふものが、どうしてもこれからの近き將來においては段々と強化されて來る。これは當然のことであると思ひます。また都市のごときも今日までのごとく都市集中といふやうなことが、恐らく分散式……今日の新らしい言葉で言はれてゐる疎開式と言ふやうなことになつて參るのでありませう。さういつたやうな事で、この建築界といふものゝ近き將來は當然進んで行く。構造にいたしましても様式にいたしましても、材料にいたしましても、施工にいたしましも、それで進んで行く。

殊にこの構造におきましては、資材がない。また重點主義といはれる今日、僅かの資材をもつてどう此れを構造に移して行くか。あるひは様式に致しましても、今は慌てゝ迷彩塗料を塗つたり、白い建物などを適當な色で、カバーしたりするといふやうなことをやつてをりますが、これから出來る建物は全部當然さういふ特色を盛つた、さういふ性格を盛つたものにならなければならぬと思ひます。

また材料のごときもさうでありまして、やはり今日でも入れ得る色々な材料、あるひは今日まで使つてをつたものが入れられなければ、これに代る材料を考案するか、あるひは工事管理の施工におきましては勞力の關係など、そのほか近き將來はいま申しましたやうな方途によつて進んで行くのだといふことが、私は當然なのでないかと思ひます。

なほ進んでこれがもう一寸將來の向ふ先に行きますと、先ほど來お話の出てをりました東亞共榮圈内における恥づかしくない所の建築化と言つたやうなところにまで運んで行かなければならぬと思ひます。これは一寸見透しが出來さうにして、なかなか出來難い。簡單にもつと日月を要する問題ではないかと思ひます。

然しこの將來もやはり東亞共榮圈内におけるところの、日本の建築はどういふ風に進むかといふやうなことになつて行くんぢやないか。それからずつと向ふ先は、これは恐らく想像すること、そのことがもう無理だ、困難だと思ひます。私は今申しあげましたやうに、概論的にさういふことが想像し得るだけぢやなくて、當然建築界の將來はさういふことになるのではないかと思つて居ります。

なほその間におきまして、資材を得るのにも、つまり材料といふものを用意し、入手するのにも今日および將來は重點主義になるのだといふやうなことを先ほど申上げましたが、まづ軍方面の建築資材、その次には生産擴充方面といふやうなものゝ資材、またはそれに伴ふ建築そのもの、それから公共團體であるとか、住宅營團であるとかいふやうなものゝ建築、その次に一般民需建築といふやうな風な順序に、重點主義が行はれてをりますので、これは如何に理想を持ちましても、今日までのごとく、どういふ建物が欲しいから、それを建てようといふことは、恐らく近い將來におい

ては困難なことであるといふことは言へます。

實際においてはこんな現狀であり、この現狀がこゝ暫くは延長されるといふことは當然である。私はこんなやうな考へをもつてをります。

小林——次に石川さんにお伺ひしたいと思ふんでが、今後建築技術者として主力を盡すべき、分野といひますか、我々はどういふ方面に向つて邁進しなければならぬか、さういふやうなことでお話を願ひたいと思ひますが……。

石川——建築界の將來といふやうなことでありますが、此れは非常に難しい問題でありまして、私などは實はかういふことを考へることが好きなんです。これは我々の夢といふことでありまして……。

將來の建築を考へるといふことは、結局夢である譯でありますが、今の若い人たちは、この夢が好きでありまして、私ども若い人たちにこの夢を描くことを盛んに勸めてゐる譯であります。たゞこれは非常に好題目ではありますが、非常に脫線し易い問題でありまして、痴人夢を說くやうなことになる恐れがあるのであります。

其處でこういふ遠い將來をお話する譯にも行かず、いま司會者の御注文では、そんな先をいつて居られるのではなしに、可なり近い將來を目標にしてをられるやうに私はとつたのであります。さきほど瀧澤さんの紹介された明治以來繁昌記も、さう大した將來のことではなく、またその中味を拜見すると、遠い未來のことではなく、明治20年代の現實のことが書いてある。それで私もこの現實に立つて、ちよつと背伸びをすれば見えるくらゐの將來といふことを考へてお話したいと思ひます。

大體建築界の將來、建築界はどういふ風に動いて行くか、それに對して建築界はどう對抗して行かなければならないか、或は建築家の態度はどうあるべきかといふやうなことを考へます時にまづそれを考へる基礎條件といふものが要ると思ふのであります。それは建築界といふものが勝手に動いて行く譯にはいかないのでありまして、それを動かして行く原動力がある。

それははつきり今日でいへば、國家の向ふ方向即ち國策に關聯して來ます。またその國策といふものが世界の情勢にやつぱり即應して來る。さうすると將來の建築界の動向、あるひはそれに對應する建築家の態度といふものを見究めようとする時には、世界の情勢とか、あるひはその中における日本のあらゆる方面の國家活動の動きといふものを見究めなければならぬのであります。それは建築の座談會といふばかりではなしに、ほかの分野にも入つて行くことになるのですが、其れを見究めないと、この建築界の將來といふものは見究められないことになるのであります。

然し此のことは既に皆さん御承知のことゝしてこゝでは觸れないことにいたしますが、それでは今日本の國策といふものは、どういふ風になつてゐるかといへば、これはどうしても戰爭を完遂しなければならぬ。戰爭といふことが、その中心になつて、政治も、理論も、科學も、產業も、あるひは教育も、文化も、あらゆる日本の國家活動といふものが全部戰爭にリードされてゐると言ふことが言へると思ふのであります。

ですから建築界といふものも、自ら戰爭にリードされるといふことは、今松本さんの言はれたことゝ同感でありまして、それは最初から分つてをることであります。さうすると、それではこの戰爭といふものゝ見究めでありますか、それは私門外漢でありまして、そこでこれはつまり斷定を下すわけには行かぬのでありますけれ共、これは新聞など色々のものから判斷いたしますと極めて容易ならぬことだといふ感じがするのであります。

今日、日本は緒戰から非常な戰果を擧げまして非常に優勢な立場に立つてをるので居りますけれども、これが今はよいが、あとはどうなるといふ事になりますと、かなり面到な問題が澤山あると思ふのです。

今日の戰爭といふものも、此の頃の合言葉の「最後のとゞめさす日まで」あるひは「何がなんでもやりぬくぞ」といつたやうに、最後迄積極的にやる事をモツトーとしてをりますが、これを最後までやらないで、一步手前で止めておくだらうか、さういふ場合は日本の狀態如何にもよりますけれども、如何にも慘めなことになるのではないか、日露戰爭の時代とは時代が違ひますけれども

日本は最後迄やらなければならぬといふことは考へるのであります。

又英米が最後迄いかないで、戰鬪狀態が停止されて平和になるといふやうな狀態に持ち來すやうになるだらうかといふことは、とても考へられないのであります。日本の一般には、英米はすぐ崩壞するといふやうに考へられ、またルーズベルトが天文學的數字を擧げて軍擴を叫んでも、結局ストライキや色々な事情のために思ふやうにはいかないといふやうな樂觀論などがありますけれどもこの間の第一次歐洲大戰の時を見ましても、やはり米國は增產力にいたしましても、平時の增產力よりも元來違つた擴張が出來てゐる。また英國もやつてゐるのでありまして、兎に角向ふも力を持つてをるのです。ですからこの戰爭といふものは相當將來まで續くといふことが考へられるさうすると、やはりこの戰爭が日本の諸文化をリードして行くといふやうなことはある時期まで續きはしないかと考へられるのであります。其うすると、建築界もやはりこの戰爭にリードされて行く。この戰爭を中心として動いて行く。此れはいへるんじやないかと思ふんですね。

さうすると、この戰爭と言ふものを中心に建築界といふものを考へると、どうしても建築界の主役を占めるものは、戰爭を中心とした生產の建築であり、これはこゝ暫くある將來まではさういふ狀態が續くと言ふやうに考へられるのであります

勿論その生產に關しては、人の問題もあるから住宅とかさういふ風な附屬的なものも勿論ありますけれども、飽くまでも戰爭を中心とした生產建築といふものが、この中心になつて動いて來る。そしてその種類としては生產建築ですが、其れがどういふ形で表はれて來るかといふ事になりますと、第一に資材の問題なのです。この資材といふものが、今日南方で色々資材が自分の懷ろに入つて來たやうに考へられますけれども、それが直ちに日本內地へ持つて來られるかといふと、近い將來においては仲々出來ないのではないか。

此れは主として船の問題に關聯して來るのであります。これはいろいろな方面で、日常痛感することですが、政府としても造船の方に大いに力を入れてどんどん造るでせうけれども、鐵だとか、石炭だとか言ふやうなものを持つて來るやうな船を造る前に、まづ石油を送るタンカーを造ることが第一であります。これは極く近い將來を考へると、さう考へられるのであります。

これら油槽船をさきに造らなければならぬ。それで建築資材を運ぶといふやうな船は、その次に廻つて來る。それにかういふ戰爭狀態が續くといふことでは、船があつたゞけでは駄目でありまして、これを護送して持つて來なければならぬ。非常な經費と日數がかゝる。一方では生產關係の建築が相當膨脹しなければならない。ところが資材を得るにむづかしい。またかうした生產關係の建築といふものを民間の資本でやるといふことは、中々思ふやうに擴張出來ないといふやうな狀態にある。

そこで政府がこれを作つて、機械も設備も全部して、そして民間のものに經營させるといふことになれば、少ない資材で多量の生產建築をやれと言ふことで、そもそもに何を要求するかといひますと、ある材料でそれを作らなければならないといふ一つの大きな問題であります。これは單に材料の經濟的使用といふことではなしに、手に入り易い材料、これは今まで知られてゐる材料ばかりでなしに、今まで建築材料として考へられて居なかつた材料をも含む。あらゆる建築材料になり得る可能性を持つたものに導く。そして深い檢討を加へて行くと言ふことにならなければならぬ。これは材料だけの問題ではなしに、人的の問題でもさうでありまして、この事は勿論その道のお方の事ですから痛感されてゐることゝ思ひますけれども、人的に非常に困難とされてゐる。あるひは技術の上にも、例へば大工にしても、大工の技術といふものか非常に低下してゐるのであります。今度の25周年記念でも徒弟養成などや學校をやるといふやうなことを擧げてをられるやうですが……

中西——いや講習會をやるといふのです。

石川——さういふ計畫があるといふことは非常に良い事だと思ひます。此れはどうしても低下せざるを得ないのであります。其れでそれに適應するには、やつぱり低い程度のもつと大工がやり得る構造法、工作法といふことが考へられて來なければならない。さうするとこれは私のいつも言ふ

建築文化論とは大分考へ方が違ふやうに思はれるかも知れないのでありますけれども、つまり戰爭を中心にして日本の文化が動いて行くといふ以上今までの藝術といふやうな觀念を變へて行かなければならないのぢやないか。ですから今いつたやうな考へ方で、建築されるものゝ中に藝術性が認められるやうになつて來るのではないか。さういふ點で私のいつた所と矛盾しないで考へられるといふやうな風に私考へてをります。

安井——私は一寸誤解したやうです。今石川さんや、松本さんのお話を伺つてをりますと、如何にもかういふ難局に際して、我々はどういふ風にしなければならぬか、どういふ風に處して行かなければならぬかといふやうなお話でありますが、私はさういふ意味を誤解してをりまして、ただ日本の建築の將來について考へたのでありましてかういふ時局に對してどういふ風に處置するといふつもりで、先程申上げたんではないのであります。その點一つ誤解してゐたかも知れませんから——。

瀧澤——兩方の立場からのお話で、それでいゝではないですか。

安井——さういふ話だと思つて意味を取違へて居つたやうです。

小林——皆樣から色々伺ひましたが、こんどは衣食住の「住」に就いてその將來を語つて頂かうと思ひます。差當り南方へ澤山人が出て行きますが、さういふ人達にどんな住居を與へるか生活樣式はどうするかといふ事が問題になると思ひます。今更日本の疊を向ふへ持つて行くべきでない。椅子式にすべしとか、向ふで疊に相當するやうなものを作れと、色々な說があります。これらの住居なり、生活樣式に就いて中西さん、先程お話が出てをりましたが、御意見をお聽かせ願ひたいと思ひます。

中西——先程からお話を伺つてをりまして「將來の建築を語る」といふ問題なんですが、その「將來」を私もまた松本さんのお話のやうに「近き將來」といふことで限定をさせて頂きたいと思ひます。と同時に玉置さん、瀧澤さんの古い書物の御引用は都市を防火的にするといふやうな主眼であつたやうに伺つて居りますが、その防火的にする事とは外國の例から見ましても、元々木造で來た町が爲政者の力といひますか、努力といふもので次第に變つて來た。さうして今日のヨーロツパに見るやうな都市が出來たといふ事を敎へられて居ります。

其の點に就いて一寸瀧澤さんが最初にお示になりましたが、東京のまづ正面玄關及それに相當すべきものを煉瓦造及石造にせよといふやうな主張であつた樣に承知しますし、今まで行つて居ります耐火的の事の進み方を見ましても公的生活をする部分についてはある程度まで在來の物よりも强いものに變りつゝあるのでありますが、問題になるのは今お話がありました樣に「住」の問題に關する事で、これが仲々むつかしい事で、一朝一夕に行かぬのは日本人としての生活樣式および長い間に培はれて來たいろいろなものが、一朝にして變らないといふ所に根源があると思ひます。

公的の方は命令をもつて定められると、いやでもそれに當てはめて行くといふ進み方が來てをりますが、人間が本當に住んで行かうといふ「住」に對しては、これは命令ばかりで定めても、それに服しなければそれまでのことです。永い間かゝつて居つても效果のあがらぬのはそこに原因があると思ふのであります。

今日國民々々といふ言葉が、何もかも冠せられて食事に就ても國民食、衣服に就ても國民服住宅についても國民住宅といふ風にこの事變以來進められつゝあるやうに思はれますが、國民服にしても、これは各人が自由に工夫出來るためになかなか國民服が徹底して行かない。やはり自分の好きなものを作るといふ風になる。それから推して行けば、住の問題も解決し憎いといふ事になると思ひます。國民服が多少とも西洋の在來の式を加味して、產業的な事から進んで來てゐるがそれを住に當てはめやうとするところに、色々と錯誤するところが出來るのではないかと思ひます。

かういつたら叱られるが、今後の人はとに角我々までの年配となれば、色々のバラエテイがある。種類があることが慰安になつて居る。食にしても日本食も食へば、洋食も食べるといふ事が樂しみであり、衣服も和服も洋服も取捨出來るといふ事が慰安になる。住にしても腰掛式疊式、それ

を色々取交ぜたら愉快な生活が出來るといふ事になつて居つたのであるが、今日ではこれは餘りに煩雜過ぎてなんとか、昭和維新に際じて將來これを統一しようといふ事になつて來るのではないかと思ふのであります。

然し疊といふものは、いろいろの缺點ももちろんありますが、日本人には色々捨て難い點も見出して居るといふ點で、なかなか捨て難いのでありまして、在來も滿洲、支那、遠く今日の南洋方面に出てゐる日本人の樣式を見ましても、表面は西洋のものでも、內部は日本の在來のものを捨て難く執着をもつてゐるといふ事になつてゐる。

これをば命令でもつて一律に出來ないところにさういふ事が起るのでありませうから、日本人はやはり惡いところは捨てゝもよいところは日本人である事を示すためには別段これをば頭から排斥する必要はなからうと思ひます。

幸ひ南方へ進出するに、案外住といふ方面から見れば、窮屈なことでないのではないかと思ひます。私はあちらの事は存じませんが、そこへ直接飛込んで行つたら、今までいけないと言はれて居たことが案外長所を發揮して良いことになつて將來の住といふことに對しては儲けものをして來るやうなことがあるのではないかと私は想像だけですが、さういふ氣がします。今司會者が將來の住宅はどういふ具合になるだらうかといふ事でありましたので、案外南に進出して儲けものをするのではないか、今日は昔と違つて突込んで研究することの態度が廣く培はれてゐるから、それぞれの人が拾つて來てくれはせぬかと自分は心易いやうなことを考へてをるのであります。あとは皆樣から色々お話を承つて、自分の頭の糧にしたいと思つてをります。

松本——今の話で私のところで軍の住宅をやつてをりますが、大分向ふの住宅といふものを認識させられたのであります。

赤道直下、もしくはあゝいつた熱いところですから、壁面とかあゝいつたところに餘り考慮を要せない。だから丁度コンクリートをうつ時のせき板式にして、無論持運ぶ關係もありますけれども內地の建築と違うところは壁なんかに考慮が非常にされてゐるが、それをもつて行つてすつと積みさへすれば、立派な壁になる。濕氣のあるところもありませうが、私のところの此〇〇坪の建物は濕氣の少いところで、少しパネルが厚味で背を高くして、さうしてそれを並べると床になるトラスとか軸部は頗る簡單なものですが、熱いところだから、割合にさういつた構えといふものが非常に簡單です。アンペラを布くゝらゐなところで足るらしいのです。それ以上は適當にやるのでせうが今やつてゐるところは必ずしも兵隊さんが泊るといふのではないらしいが、無論天井なんかはアンペラぐらゐ使ふんではないかと思はれ、トラスなんかそのまゝにしてをりますが、こちらで考へてゐる住宅よりも、餘程一般住宅としては尤も相當な方の住まれる家といふのは別問題でせうが。

內地における普通住宅といふやうなものは、頗る簡單に行けるやうです。さうして今中西さん、お話のこちらから行くものが疊を使用する事が一つの特徵ではないかといふ事でありましたが正しくそれに代るものはアンペラを布くので、疊はなくても宜しい。それで疊にも使ひ、また椅子式の部屋にも使ふといふことになると思ひます。

中西——伊東忠太先生のお話に床に對して西洋人と日本人の考へ方が違ふ。日本の室內の床は床ではあるが、西洋人の考へてゐる床とは全然考へ方もまた使用法も違つてゐるといふ事を承つてをりますが、そこをなかなか日本人としては捨て難いのではないかと思ひます。

瀧澤——伊東先生だつたですね。西洋人は土足で二階にあがる。日本人は履物を脫いであがるといふその氣持が尊いといふやうな事をいはれてをりますが、私は同感です。

大變外れるけれども、日本の床といふのは神社などで神聖なもの、床々といつて不淨を忌む意味があるさうですね。變つたことを床しいといつたり、奥床しいとかいはれてをります。西洋人は椅子に腰を掛けるが、日本人は床に腰もおろせば、寢そべりもするといふ。かういふ生活樣式は積極的に認めて行きたいと思ひます。

ペタンケイツクのやうだが、日本書記に彦火火尊が下の床で足を拭はれたといふ足を清潔にして行くといふところがあつたと思ひます。

松本——御趣旨はなかなか結構ですが、滿洲の新京あたりでは外觀は洋館になつてゐるが、內部は疊を敷いてをります。內地と違つて、石炭が足るとか足らんとかいひながらも、向ふでは皆暖房をやつてゐますが、疊が弱いので一年でゴミが出てぼろぼろになる「こんなに放つて置かんで、二三年目くらゐに取替へたらどうか」と私がいつたところ「馬鹿なことといふな、年々取替へてかうなるんだ」といはれたのですが、在來の日本の藁を編合せたやうなのが必ずしも理想的でなく、これに代るいくらか彈力性のあるものが考慮されなければならんといふ事を滿洲においてはつぐつぐ感ぜられましたが、さういつた點に餘程考慮する餘地がありさうです。

其れから同時に暖房するところでは疊を敷くよりもどうも板敷にベツトの方が良いといふ事を國技院の人なんか盛んにいつて居ります。一體どういふ理由かといへば、部屋を暖房で溫めても疊の上に子供を寢せておくとどうも寒むがつてしやうがないが、ベツトの上においては安らかに眠るどういふわけかと可なり突込んで研究して見たが簡單なことで、疊の上よりもベツトは高さが若干高い爲に溫度が疊の上よりもベツトの上の方が非常に僅かな違ひだけれども、溫度の違ひがあつて直かに寢せるよりもベツトの上の方が溫かなる爲によく眠る。これは單り子供ばかりでなく、疊の部屋にするためには、どうしてもさういふ氣持を酌んで床を高くするといふやうな事にして考へるとまた別問題でありますが、悲しいかな滿洲、新京方面ではさういふところまで考へてをらない。

石炭が足らぬ今日、ベツトに寢せるのと、疊の上と一寸でも上にある關係上、覿面に溫度が違ふといふ事をいつて居るのであります。

安井——私は永く滿洲にをりまして、そのことは十分體驗を持つてをりまう。極端な話ですが、ペチカでもつて起立すると、首の邊は八十度から八十五度くらゐに上りますが、下の疊の上は五十度くらゐで廿度くらゐ違ひます。非常に違ふ事を永い間經驗しました。

瀧澤——さうすれば少し訂正しなければならぬが、先程の日本の大陸發展といふ事も、此の大陸と南洋方面とは全く考へを變へなければならないが、これも歷史が大事と思ひます先。程もどなたか日本民族は南から來たといふお話もあつたが考古學の古いところで新石器時代のいはゆる繩紋式土器時代にはまだ米を食ふことを知らなかつたらしいが、彌生式土器時代に至つてはじめて米を栽培して作るといふことが解つたといふ事が考古學上いはれて居ります。

日本のいはゆる日向系文化も彌生式土器時代になるにしたがつて、米を作る文化が入つて來たもので、それ以前は大陸的な稗粟を食つてをつたのであります。日本のやうな小さい島でも日本文化といふものが、北方的系統と南方的系統と二つある。帝大の關野助教授などもこれをいつて居りますが、古いところではアイヌの竪穴式といふ樣な時代があり、其のうちに神社の建築とか、校倉造とか日本書記にあるやうな南方的な文化の時代になつて、床を作り、一足あがるといふ樣な、日本文化が南から來たのでありますが、さういふ點で我々は北へ延びるか、南へ延びるかといふことを考へる時、我々が何れから來たかといふことを裏返へして考へればよい。日本の文化には二つの系統が調和されてゐるが、それを南を北へ押つけ、北を南へ押つけると矛盾が起つて來ると思ふ。私の前にいつた事にこの南北混亂して居るところがあれば訂正します。

杉本——慣習的ですね。新京方面では床を改造しなければ疊としては効果的でない。溫度の關係燃料の關係で直ぐボロボロになる。さういふところに疊は良いと知りながらも考慮の餘地があるといふのです。

藪中——さういふ缺陷がありながら因はれてゐるのは何か理由があるんでせうね。

小林——篠原さん、何か今のに關聯してお話をお願ひします。

篠原——本質を離れてゐるかも知れませんが、「建築界の將來」といへば建築技術家として內地の建築よりも今戰つてをります大東亞共榮圈確立つまり共榮圈內の國々の建築を日本の技術家が、こなして行かなければならぬといふことを考へます。

從がつて何としてもこれからは、先程石川さんがおつしやつた生産建築にしても、中西さんの仕

の建築にしても量の建築がまづ考へられなければならぬと思ふのであります。大量の建築を消化して行くといふ事の爲には、どうしても我々技術家が非常に澤山要るのではないかといふことから自分の商賣柄技術家養成に着目しなければならぬと思ひます。

どうも政府のやつてゐるのを見ると、軍需工業が必要であるからといふのでありませうが、學校では工業學校機械科を作る。商工省では機械工場を作るといつた様に、技術家をどんどん養成してをるが、建築科の方は出遲れとなつてゐるやうです。

戰爭は御承知のやうに北中南支の支那大陸は申すに及ばず、南方諸國においても展開され、これによつて破壞された建築物は非常に多いのでありまして、これをどう復興するかといふ事が、我々建築家に課せられた大きな將來の問題だと思つてをります。從つてその様式をどうするか、國際的にするか、國體的にするかといふことは、それぞれ其の道の方に考へて頂きまして、とも角何れにしても急務としては生産的の建築の非常な量を消化しなければならぬといふことを考へます。

從がつて建築請負となれば、業者の方も考慮して頂きたいし、其れから政府の方も協力指導して頂いて本當の建築家の養成といふ事を、まづ今から準備しなければならぬのではないかと思ひます。

殊に南方諸國の未開の人間に見せるのは象形的なもので意を示すより外ないことにならうと思ひます。從つて內地における建築もゝちろん藝術的な素質を持つたものも作らなければなりませんが量的にも非常大きな物を作るといふことが必要であらうと考へます。よく支那人なんか連れて來ますが、大阪城を見せても決してあの人達は驚いてゐないだらうと思ひます。

大阪城に料倍する紫金城なんか見たものが驚くはずがない。質を考へると同時に量の建築といふことを考へなければならず、また海外の建築の量といふものをこなすといふことも着眼しなければならぬと思ひます。

又構造材料についても、それほど大量の建築を消化するに內地の自然的材料、工業的材料といふ様なものを運んでをつては恐らく間に合はないのではないかといふ様な漠然たる考へを持つてをります。要するに我々技術者が多數養成せられて、さうしてどしどし大陸現地に行つて、材料の研究同時にその土地と物の應用、建築様式構造などを考へる事が、今のところ急務だらうと漠然と考へてをります。要するに建築の高級技術者はもちろん徒弟大工といふ様なものゝ養成といふ事に着目して將來の大東亞共榮圈の建築を消化する準備をやらなければならぬといふ様なことを考へてをります。本質を外れたかも知れませんが。

小林——同じ意味から建築技術者の指導といふことに就て、堀口さんどうぞ。

堀口——構造方面の建築技術者の養成指導といふ意味から自分の考へた事を申しますと、先程も意味のないやうな明治6年に出ました日本の本に鐵骨のハリの圖面が出てゐるといふことを申しましたが、大體西洋の構造の技術、殊に鐵筋コンクリート、鐵骨構造といふやうな最近發達した學問の「發達の年表」を作つて見ようと思つて、鐵骨構造の分だけ自分で作つて見たのでありますが、その場合日本において一番早く紹介されたものといふので、先程の本のことを申したのでありますが、大體西洋の構造法と申しますか、西洋の近代の學問の最も發達したのは19世紀の後半から20世紀の極めて初めにかけてあらゆるものがすでに發達したのではないかと考へてをります。

エンサイクロピデイア・ブリタニカの11版といふのが1913年ころに出てをります。その後大戰爭後14版が出ましたが、結局これは11の續きであつて、あの大英百科全書の11版ころが西洋の文明の頂點ではないかと思ひます。さういふ意味からいつて、その技術文明を受けついでゐる日本の建築技術にしても、近き將來においては鐵骨構造、鐵筋コンクリート構造に代るやうな非常に新らしい立派な構造といふものは生れないのではないかと私達は考へてをります。それでこの外國において發達しました鐵骨、鐵筋コンクリート構造を如何に日本化し、また生かして行くかといふことが、我々の將來にかゝつた技術者養成の大きな題目ではないかと考へます。

鐵筋コンクリート、鐵骨構造に關聯しまして、

それの力學としての應用、彈性學の應用が工業的方面にされる様になりました結果、最近は木造建築においてもその理論を用ゐて非常に大きなものを作る様になりましたが、將來我々建築技術者を養成する上において最も注意すべきものは現在もあり、また多くの特許等もある様ですが、木造を全然燃えないところの物に造ることの研究、及びこの木材を用ゐて鐵筋、鐵骨に代るやうな耐火的な木造を作るところの方法、小さい部材をもつて非常に大きな物を作る力學といふか、その手法の發達、これらが我々建築關係者の將來に向つて注意すべき事ではないかと思ふのであります。

其れに就ては澤山の技術者が出來た場合に、その技術者が余り數學等の勉强をしなくつても直ぐ判るボケツトブツクといふか。さういふ方面の非常に範圍の廣い、また容易に應用出來る様なものが日本に出來なければならぬのではないかと思ひます。最近木造の方を作りました。これらの方面においても大體軍隊關係の若い技術者が南洋とかあるひは中支、南支さういふ方面に參つてゐて、多く使用して居る様ですが、その人々が手紙を寄越したのによつて考へますと、まだまだいろんな特別な場合を入れた。一冊で十分總ての場合の設計が出來るものを作つてくれといつて來てをります。

さういふ意味から、簡單に總てを規格化したところの本を作り、さうして其れ一冊を完全に讀み得ればとに角、總ての建物が大陸的なものがこなし得る。かういふ様な教育の方法を全然從來のものと變へた方法でもつて、新らしい技術者を作つて行かなければならぬのではないかと、まア建築界の將來に對して極めて部分的なことを申しましたが、さういふ様な感じを私はもつてをります。

小林——昨年から建築界の新體制が盛んに問題に取あげられてゐる様ですが、その後大東亞戰爭が勃發しましたし、今日のやうな赫々たる戰果をあげましてからはもつと雄大な構想の下にさういふ問題を考へなければならぬと思ひますが、この事に就て、藪中さん一つお願ひします。

藪中——御注文を外れるやうですが、その前に私の感想を少し申上げます。今堀口君からお話があつた最後の分ですが、我々學校を出てから色々の構造をやつて來たが、その參考にしてゐるものは外國のものが主で、日本の書物がない時代でしたが、その惰性か知らんが、最近でも日本で出來た書物の內容、あるひはデータとかいふやうな種類の物が殆ど外國の直譯が多い。日本人でそれに努力したのは田中博士の表があるくらゐで、こんなことは全く緣の下の力持で、興味のないことであります。

實際の仕事を設計する各個において研究する方が痛快なことに違ひないが、一面からいへば同じやうな技術的なことを何回となく繰返へして行くといふ事は可なり時間もかゝることであるから、さういふやうな緣の下の力持をやつて頂く人が現はれることによつて、斯界を利するところが大きいのではないかと思ひます。さういふ意味において堀口君の著書の如きさらにますます手を入れられて純日本人の作り上げたものをもつと滿載して頂けば好都合と思ひます。どうも毛唐さんのお余りを頂戴してゐる感じが大きいですね。

其れから今司會者のいはれた問題ですが、なかなか大きな問題でしてね。結局將來といふことは先程から話があつた様にむつかしい問題で、結局自分が今歩いてゐる現實のところは外し得ないしといつてじつとしてゐると、横を向いてゐるといはれる様なことになるし、建築界の去年からの動き方からいつて見ても、やはりさういふ感じがするのではないかと思ひます。

夏頃から例の新體制の問題に就て何回か我々會合して、色々相談したんですが、そのひまに技術院が出來る。技術院が出來れば、どうせ技術家の建築家も含まれる。其のときは相當心構えが要るだらう天降り式はどうの、かうのでいかんから、我々の方だけでも整備して行かうじやないかといふのが出發點で、色々研究したか、何しろ關係が廣いものですから、むしろ日暮れて道遠しといふところで、結局夜が明けかゝつてしまつた様なことになつて「夜が明けてから」といふことになつてしまつたらしいですがね……。

其れに技術院なんかも當初我々豫想してゐた時の考へとは違つて、新聞なんかを見れば、結局飛行機のスピードを早めるのが第一で、それに基い

ていろんなことをやつて行かう。其れからだんだんいろんな技術をやつて行かうといふ事になれば今の建築界の新體制は技術院に關する限り、いつの間にかポイントを外れたやうになつてしまつた様な形です。

今のやうな問題はこれからも何回となく起り得る問題と思ふが、もつと強い言葉でいへば、建築技術家が果してどういふ道を歩まなければならぬといふことは他人様からいはれるまでもなく、自分から考へて行かなければならぬ問題だから、今我々簡單な目先だけの結論を急ぐよりも、一つの宿題として殘して、明日か明後日の建築界を荷ふ方々に考へて頂く方がよからうとか思ふのであります。

小林——　時間があるやうですが、瀧澤先生何か建築家の將來と云つたことについてお話下さい——。

瀧澤——考へてはをるがむつかしい問題でね。私は皆さんと同じく建築設計の業務に、學校教師になるまですつと携つてをつたもので、かういふ職業は將來どうなるか、どうならなければならぬかといふ事は、理屈の上では實にかういふ職業は尊重すべきですけれども、日本の歷史、國情でどうなるかといふことで、實は考へあぐんでゐるのです。

玉置——どうですか、文字に行くと國勢調査の色々な職業表がある中に「自由業」いふのがあります。辨理士とか、お醫者さんとか、建築設計屋が自由業に入つてゐるんです。そんなことはどうです。

安井——ドイツでは現在自由設計監督は認められてゐますね。むしろ日本の方が先に行つてゐるんですね。

藪中——なにせ日本では明治以來、大正、昭和と今日に至るまで建築家に對して民衆として回答を與へてくれんのです。甚だ芳しくないことだが——はつきり渡してあるが、お前の方が判らぬのぢやないかといふ様な氣がしますね。建築家を認めるかどうかといふ事は、將來はどうかといふことよりまだ認められてをらぬぢやないかといふ氣もしますね。

中西——官には建築課、設計をし監督をする人はあるが、民のは認めぬといふのはどういふわけか、これを認めるといふ事にならなければ。——

安井——ドイツでは自由業は認めてゐるのですね

中西——役所の人は自由業ではない。官吏ですからね。

瀧澤——これは小さな單に職業的な建築家だけの問題でなく、非常に大きな問題だと思ふね。

藪中——考へ方ではそれが中心問題ですよ。

瀧澤——私は學校教師で自由な立場にをるつもりですが、生徒にどう說明してよいかといふことで困つてゐる。過渡期で何ともいひ切れぬといふほかなく、全く說明しかねてゐる。

安井——私も常陸で實は學校でそれに類したやうな講義を受もつてをりますが、甚だどういふ風に說明してよいか困つてゐます。

瀧澤——今の請負入札制度なども可なり自由主義の立場にあるが、其れよりも私をして勝手なことをいはせると、けふは歷史などを引張出して甚だ皆様に拘束を與へた感があつて恐縮ですが、先程石川さん、松本さんのお話がありましたが、兎に角將來を語るには現實に立脚しなければならぬ現實の日本は戰爭中だといふことは同感で、戰爭を離れて日本の將來は語れないと思ふが、石川さんの生産的建物の一方においてはこけおどしといへばこけおどしですが、南方共榮圈の人にも日本建築技術乃至藝術といふものを見えるもので示したい。

さうしなければ英米のやつた仕事に對して引ケ目を感じやしないかといふ様なお話があつたがそれについて歷史上かういふことを考へます。大きな文化がある段階まで行つて沒落とまで行かぬでも行詰つて新らしい文化が起る。さうすれば今までの文化はそのまゝ新らしい文化を建設するときは、建築でもさういふ建設の時代、建設文化の時代においては建物は後から見ると殘つてをらないらしいですね。さうしてある文化が落着を示して平和の時代が來て、初めて殘つて行く。西洋の言葉でいへば、モニユーメント、我々記念物と譯してをりますが、さういふことはギリシヤの建築史を見るとよく現はれてゐる。

ギリシヤの建物は石で出來てゐるが、その様式は木造から來てゐるのであります。さうすればそ

の木造時代はどうであつたかといへば、紀元前5世紀の立派な古典建築が現はれるまでの間に資料のない時代があり、しかもギリシヤの文化と科學はその間に生れて來てゐるのであります。その間とは何かといへば、丁度ギリシヤ民族が周圍に對し激刺なる威力を示して盛んに戰爭をしてをつた時で、其の頃の木造の建物の遺物としては殘つてゐないのであります。

丁度今日本にさういふ時代が來つゝあるのではないかと思ひます。丁度ミケナイの文化ですか、安井先生の東京の滿鐵ビルとか、第一生命ビルといふものが、一種の日本ミケナイ文化ですが、日本の本當の古典文化が建つ間に今は戰爭中であつて、さういふモニユメント的なものを作らうといふ野心を棄て、國威を盛んにするといふ時代であります。

かういふ時代の建物は將來に殘らぬものではないかと思ひます。古いものは廢棄されて新らしいもの前進するといふさういふところに日本の國の有難いところがあるのかも知れないのであります。もしも日本が石造やなんかの藤原時代、福原時代の狹いところに長くをつたならば、眞の發展は出來ないと思ふ。一面からいへば、建築協會が今防火建築だなんだと鉦太鼓でやつてをるといろと矛盾するところがありますが、其れはまた別の點において解決出來ると思ふのであります。

安井——私は奈良へ行つて昔の法隆寺なんか良いものが殘つてゐるが、將來明治、大正時代および現在の建物が將來に殘るかどうかといふ話が出ましたが、私はないだらう。なくなつてしまふだらうと答へました。

瀧澤——さういふ意味で日本人の非常な特色が現はれてゐるのは伊勢神宮式年制です。20年毎に改めるが、樣式は古いのを用ゐる。

あそこに日本の特色があると思ふ。ところがヨーロツパの方を考へると、モニユメントはサブスタンスとして殘つてゐる。サブスタンスは亡びても構はぬが、形式は尊重されるといふ。かういふ問題も將來日本建築の特色を考へ、大きな問題ではないかと思ふ。西洋流のモニユメントの考へを日本に强ひることはどうかと思ふ。

松本——今のお話は洵に結構なんですが、これから近き將來は木造家屋といふものは建てることが出來ないことになつてをります。今までは出來たが——といふのは6月1日以後の木材配給は急がない建物には國家として配給しないことになつてゐる。

それは繰返していふやうですが、第1は軍的なもの、第2は生產擴充的、第3は官および公共團體といふやうなもの、其れから第4が一般のものといふのですが、さういふ條件を羅列されると造りたいと思つても、木材そのものが得られない。それで私は大阪の木材會社に關係を一寸もつてをりますが、6月1日から統制せられる下準備の會合をこの間からやり私もそれに臨んでをりますが大阪で今まで土木建築、その他いろんな方面に使用されてをつた量は約600萬石を超過してをつたが、6月以後は1ケ年の配給量が今の重點主義で行つて一切合財の建築用材が僅かに約280萬石、その他を合せて500萬石といふのですから（大阪で扱ふものが）殆ど在來の2分の1以下しか木材は使へぬわけです。これは大阪の側ですが、皆地方でこの率で行きますから、將來木造だからといつて建てやうといふ事は近き將來は出來ぬことになつて居ります。

殆どこの延長で行けば生產擴充工場、軍需工場だけより出來ぬことになります。これが一般建築が木造で出來るといふ樣な見透しが1日も早くつくといふことにならなければなりませんが、其れには先程船腹のお話がありましたが、南洋材をこちらへ輸入する木材會社としての見透しですが最も早く南洋材を輸入するといふ見透しが、まづ2年後といふのです。

然し2年では困難と思ひま營業科目なんかに新らしく出來る半官半民の會社の見透しは3年としてをります。3年後でなければ、南洋材の輸入が出來ぬが、その後は幾らか調整されて絕望視されてゐるものが、建築出來るやうになるのではないかと思はれます。心細い話ですが、これは濫伐したものを農林省方面では木材は40年間經たねば1人前の木材にならぬといふのに從來それを25年、30年で盛んに濫伐したのを調節するといふのですから纏つた寺院とかさういつたものが出來るのは我々生きとる時代は困難と思ひます。

瀧澤——軍需工業關係、いはゆる大東亞戰爭時代を象徴する様なものは形では殘らぬと思ひますね。餘裕が出來て落着いたときでなければ、將來に殘らぬと思ひます。

玉置——殘つてゐるものは非生産的なもので、生産的なものは始終改造とかなんかされて消耗される。寺とか神社とかは消耗しないので殘つたんでせう。今だから殘らないといふさういふ質のものでなく、工場なんか消耗品だから殘らぬのではないですか——要するに、殘るのは贅物建築ですね。それから杉本さんのお話は2年、3年後やつと南洋材が入つて來て、あるひは潤ふかも判らぬといふ事でしたが、私は2年、3年經つてもだめではないかと思ひます。其れは我々が南洋材を期待するのと、南洋に行つた日本の建築家が內地材を期待するのと、どつちが量が多いかといふことです。今日本の建築家が滿洲へ行つて建築しても支那へ行つて建築しても、臺灣は昔から日本ですが、臺灣で建築しても皆內地の杉に依頼してゐる。

恐らくマレー半島、ボルネオ、ジヤバ、スマトラなどへ行つても皆內地の杉に依存しやしないかと思ひます。臺灣へ行つて驚いたんですが、臺灣は木材を産出するところだから、向ふの建築は勿論臺灣材だらうと思つたところ、豈圖らんや全部內地材です。臺灣の檜は高くついて出來ないから安い日本杉を要求するわけです。

瀧澤——內地材の方が安くつくんですか。

玉置——さうです。今でも陸軍、海軍が準備してゐるのは皆こつちの材木でせう。だから將來の建築はその土地の材料によつてもらはねばならぬといふ風にせねばならんと思ひますね。（笑聲）タイへ行くとタイの人はチークで住宅を作つてゐるさうですね。それで日本の大工さんが行つたらチークでやるかといへば、そんなことしたら手間が高くついて仕方がない。船で日本の杉をもつて行つた方が安くつく——この考へ方は斷然排除せんならんわけですね。

藪中——大工道具も間に合はぬといふぢやないですか、日本式に合ふやうな道具をもつて行つてチークなんかにぶつかつてやらうといふのだからだめだ。

玉置——とまれ大共榮圈內の建築で一番大きな問題は、その土地のものでやるといふ事に極めてしまふといふ事ですね。これが一番大きな問題と思ふ。

藪中——即ち現地調辨が。

玉置——さうです。そのとき南洋に材料がなかつたらはじめて日本に期待することが出來ることが出來るやうにしなければ向ふから來るよりこつちから行く量が結局多いと思ひます。それを一つ向ふの建築家にうんと期待するんですね。それからもう一つ思ふことは　メートル法であります。

今の東亞共榮圈內の度量衡は、滿洲、支那、マレー、ジヤバと非常に複雜で、今までこの中でメートル法を採用してゐるところは一つもない。樞軸國は日本を除いたものは皆メートル法ですからこの際大東亞圈內は全部メートル法にして行かねばならぬと思ひます。

一つ建築協會の仕事として、僕は第一線を退却したんですから僕は責任がないが、協會の25周年に際し日本建築協會が指導者になつて技術者を皆これで引張り廻すといふ様なつもりで、現職幹部にお願したいんですね。これは大きな問題だと思ひます。

中西——それは政府に罪がある。力ある者がそれで進んで行つたら仕方がないかも知れない。

玉置——こんどは話が判らうと思ひます。前は早過きて判らなかつたけれども、樞軸の方は日本を除いて皆メートル法であり、共榮圈內でメートル法を使つてゐる者は一つもない。だから樞軸國のため東亞のためメートル法をやるといへば、今度はものになると思ひます。

安井——滿洲が一番早いですね。私はこつちへ歸つて來て、まだ尺を使つてゐるのかと驚いたんですよ。

篠原——今の新體制は自然にかへれといふことで、衣食住共にさうだらうと思ひます。その土地に出來るものを食ひ、その土地に出來るものを着その土地に出來るものをもつて住を作り、それで幸抱し、發達するやう指導するのが大東亞共榮圈の盟主たる我々の責務と思ふ。即ちその土地で出來るものを材料として使つてやるといふことが我々に課せられた大きな問題と思ひます。

玉置——私はいつもさう想ふのですが、日本料理と比べると、支那料理が美味い。しかも向ふへ行つたものが、刺身を食ひたがる。そんなさもしい考へでは大東亜共榮圏の指導は出來ない。

松本——木材はどうしても足らんですから、昭和13年は4分の1は米材ラワン、アピトンなどを向ふからもつて來たさうです。日本内地の木材必要量に對し、どうしても足らないものですから、であゝいふ話は私の意見でなく、政府の意見らしいです。

何故3年かゝるかと追及すれば、船舶の足らぬことは常識的なものだけれども、向ふには腐るほどあるらしいですから、困れば一部でも持つて來たいが、それを處理する勞働者をさういふものに使ふよりも、もう少し急な用事がある。だからその職をなくするのでなく、今しばらく轉業させるのだ。重要な方に使ふて、折があつたらそれを木材に廻して内地に持つて來るから2.3年辛抱せよといふ事になつてゐる様です。向ふから來るものを内地の半官半民の會社も唯一のものとしてあてにしてゐるが、これが來るやうになれば、今日以上に建築も出來る事になり、萬事都合よくやれると思ひます。

小林——色々とお話は盡きないやうですが、これで閉會させて頂きます。有難たう御座ゐました。

（以　上）

1. 建築界の事業についての回顧。2. 將來の建築界について。 八回ガキ答

茲に春秋、廿五年、人にすれば將に壯年期に入り、愈々活躍の時代であります。協會も大東亞戰下、國家大進展の時にあたり、時期に適した種々の事業が計畫されて今や實行に進みつゝあります。本會の既往の歷史を回顧し、將來の進路に就いて御意見を求めるも亦意義のあるところで、下記の題意により會員各位に回答を求めました處、掲載の通り御意見を預きました。

1. 建築協會の事業についての回顧　　2. 將來の建築界について

住宅營團東京支所工務第二課長　　新名種夫

1. 夙くより我國都市建築防火の必要を唱へ、都市防火に關する一般の認識を今日の程度まで深め得たことは協會の事業の中最も大なるものと思ふ。
2. 材料の規格化、計畫の統制、施工機關の再組織等が考へられる。

×

東邦輸送機株式會社　社長　　谷民藏

1. 人生れて25年すれば、先づ體格は完備する。孔子の教へに人、30にして立つと云ふ。我日本建築協會も創設正に25年を閲す。先師先輩各位の努力は斯界に存在を有意義にした。喜ぶべし、祝すべし、感謝すべし、大東亞共榮圈も正に確立せんとするの時、過去の功績のみを回顧して現在に歎息する勿れ。
2. 先輩各位は今一段と指導的精神を發揮して青壯年者に呼びかけよ、必ず先輩を凌駕する建築家のあるを確信する。地上、地下建築家の奮起を望む處蓋し尠からず。

就中、武裝的商工都市の防空、防火、耐震、建築の表現に全力を傾注され、來るべき機會の爲め準備怠る勿れ、而して指導に殉ずる決意を望む

×

住宅營團研究部　　西山卯三

1. とにもかくにも、都市計畫、建築行政方面を中心とする建築家の對社會的活動を指導した貢獻は偉大である。

   しかし時代の變化は重點の轉換を必要とする。
2. 當面の重點は建築文化と建築生産の二點に要約される。

   建築文化——建築は生活文化の最も基底的な物質的基礎である。

   大東亞の政治的、經濟的、文化的建設は質高き建築文化の開花なくしては果し得ない。之に對する建築家の信念と修練がほしい。

建築生産——建築材料生産、建築勞働力の組織的統合を通じて建築生産を高度化する機會を今つかむ事。住宅生産はその一の主軸となるものであるから、その擔當者の奮起がのぞまれる。

×

大阪市立都島工業學校　教諭　　篠原太郎

1. 今から20年前、大正11年箕面櫻丘に住宅博覽會を開催した時、參考出品を荷車で運んだ事を想起す。從來の建築展住宅博と云へば、家屋の模型、部分的設備の實物大模型位が關の山、然るに11年の我協會の博覽會には、そのまゝ住める實物小中住宅20數戸が出品されたのだから豪勢なものである、總裁の內務大臣後藤新平氏を引張り出して開會式をやつたのも宜なる哉だ。實物住宅出品は其年の平和博の上野公園に 2.3 戸出品されたが、それ以來各電鐵等で營業政策上此種住宅博が催される樣になつた。云はゞ住宅博の先をつけたのだ。20年前入會して我協會の實行力に驚いたものだ。大阪と云ふ土地の實行力に！
2. 建築の黃金時代來らん。樣式は大東亞共榮式とでも云はうか、この建築の大量を消化し得るだけの技術家養成を急務とす。

×

堺市役所計畫課長　　加藤善吉

1. 私が本會に入會したのは多分大正11年と思ふ、以來委員、評議員、常務、編輯幹事として事業に關係したことを回顧すれば、昭和になつてからの住宅博覽會である。即ち住宅發展と住宅の改善のために伊丹綠ケ丘、大美野、堺旭ケ丘、其他で行はれ、當時の建築界に將又一般民衆に與へた効果が大であつた。又各デパートで開催した建築に關する展覽會殊に昭和9年4月に、近畿防空演習を機として之に先き立ち、本會は都市武裝促進委員會が設置せられ、池田實副會長のもとに各種の大事業が行はれた。其の中で吾々は展覽會部を擔當し、三越に展展會を開催し、大に都市防護の緊要性を宣傳したのであつた。元來片岡會長は日本に於ける都市計畫の生みの親として後藤伯を說かれ、都市の整備に市街地建築物法の公布に大正中期既に建築の耐震、耐火、防空を大に力說せられたのである。本會も常に建築の問題以外、都市計畫問題に相當の力を致したのであつた。昭和8年8月都市構築の中心をなすべき大阪驛附近整理の實施に當つて、大阪のシビツクセンター計畫理想案の懸賞募集を發表し、松室重光氏を委員長として之れが審査に當り、當時の都市計畫建築界に大なる刺擊を與へたものであつた。其他は大したことに參加しなかつた。
2. 先づ人を得ることである。ヒツトラーの如き建築家出身の統裁者を得ることである。片岡會長の如き大人物の多數出ることである。各般の大衆建築家も大に視界を廣め、斯して建築界の改新と體制の整備をなすを要するものと思ふ。

×

株式會社大林組囑託　　小川安一郎

1. 私が大正2年から6年迄東京日本橋の住友銀行支店の建築工事の爲出張して居りました頃、關西建築協會の名稱のもとは本會が生れた事と聞きました。其の折入會を勸められて入會致しました。然し其の時分の雜誌の口繪の寫眞に低級なる建物云々との題にて上本町二丁目の市電車庫（今は改築）其の他2.3、續て出た事があるので、この協會は既設建築物の惡口を書く雜誌を出す會の樣に思はれて、實にいやな感がして居つた事を思ひ出して……其の後日本建築協會と改稱せられて「建築と社會」と云ふ雜誌になり、大に社會的に働きかけ、夙ケ丘に住宅展等が開催せられ、大に社會に住宅思想を吹込んだ事は、其の當時としては破天荒の事業であつた事を回顧します。何にせよ私共も元氣一パイの時なりし爲め、何かの委員を仰付けられ、

非常に働いた事を思ひ起します。又當時の雜誌の表紙に嵌込の水彩繪のカツトを約1ケ年位畫かされたものだ其後香里や伊丹上ノ芝、其の他で住宅展を擧行せられ、夫れ々々相當の成績を擧げられ、又其の度毎に住宅懸賞募集ありし爲め、若き建築家、建築の學生連中の住宅に對する向上發展と又社會人に刺戟を與へた事は大したことなりしと思意せられます。

最近は防空に關しての實驗、實演等時局向きの行事が行れつゝあるので、大に社會に貢獻されて居る。實に今年が創立25年とは夢の様だ、人間にすれば、今が青年期旺盛の時期、軍人であれば只今戰の眞最中出征せられて今海に陸に世界をアツト云はせつゝある勇士達である、何卒其時期の協會なれば、理事者諸彦の御奮起を御願ひ申し、どしどし有益の事業を起し、實現せられん事を希望致します。

2. 協會は會員建築界の爲め此の際會館の建設をせられ、建築關係者の集會所を設けられ、是等業者の指導機關たらしめ、又其の會館内に教室を設けて業界子弟又一般人に建築教育を施し、實用的立派なる養生者を卒業させる機關を設けられては如何と希望致して居ります。

×

合資會社勝呂組　大阪支店長　　小笠原祥光

1. 日本建築協會創立25周年記念式を擧行せらるゝに際し、自分の記憶を喚起するものは、何としても大正11年秋箕面櫻ケ丘に開催せられたる住宅博覽會であります。日本建築協會が社會へ呼び掛けたる最初の大催物と思つて居ります。片岡會長指導の許に葛野氏、波江氏と小生とが主に事業に當りましたが、初めての計畫で堂々たる建材陳列館を造り、其觀覽通路と陳列場とのプロポーションや一時に多人數入場する場合、其交通量に對する通路幅などに就て相當苦心したものでした。一方に實物住宅を造り一般の觀覽に供し、所謂文化住宅の椅子式の室を取入れたる點などは尤も目立つものでした。東京より建築學會、建築士會會員を招待して觀覽をなさしめたり等、思出深きものがあります。

2. 將來の建築界に就て大改制を要するは言を待たず、目下各方面に於て合同統制といろいろに研究中の様ですが、自分は目下の自分の立場上考へますには建築の請負なる事が全然時代と一致せぬ事と思ひますので、一日も早く請負工事清負人など云ふ言語をかなぐり捨てゝ見積合せなどの形式は全廢して事業主は施工者を信じ、一般の請負業者は自今は工事の施工受托者として總て實施請負人に依り其實施工事のマネージメントに對する地所を受ける事に即刻改めて頂き度き事を主張します。

×

住宅營團東京支所工務第二課設計係長　　龜井幸次郎

1. 建築協會は、所謂關西建築協會時代の創立當時の會長の燃ゆるが如き都市改造又は都市構築熱によつてその發足をみたと申しましても敢えて過言ではなく、我國都市の建築統制史を記するには、どうしても除外することの出來ぬ重要な役割を演じた事は、25年の昔を顧み、今又その思ひ出を新にする者であります。片岡會長に配するに當時既に建築規則の創案者たる池田實氏を以つてしたのであり、且つ又一方に都市計畫の理解者直木倫太郎氏などが嚴然とひかへておりましたので、關東は關西のかゝる燃ゆるが如き都市建設熱に引きづられたといふ形であつたことは決して過言ではなかつたと私は思つてをります。

2. 營繕機構的の弱體なる建築家的性格を止揚しより綜合的な總括性を持つ即ち建築總監の如き行政力を持ち得るまでの公益性を持つ建築界たらん事を。

×

三越大阪支店技師　　角尾篤彦

1. 櫻ケ丘、上野芝等の住宅展や。最初の防空展「大空への護」（三越）に荒木大將や、南大將な

どを迎へた思ひ出は中々なつかしく存じます。

2. 大東亞の指導者としての權威ある日本の建築を樹立させる爲には、今から準備をしなければ遲いのではないかと思ひますが、目先きの色々の制限や統制のことに追はれて、明日の計畫を立てる暇のないことを殘念に思ひます。

×

島田建築事務所長　島田良馨

1. 本會は片岡會長の指導の基に國家的使命に邁進して大衆に呼び掛け、都市計畫、住宅計畫、或は防火計畫等に盡したる幾多の事業我國文化に貢獻せる事甚大なるも、更に進んで積極的實方面に關し努力願ひたいと思ひます。
2. 我國建築界は將來英、米、佛、ソ、が弱小國家となるも、今後益々戰時に對し强化を計り、何時如何なる國に對しても國防上遺憾なきを期さねばならぬと思ひます。一例を述べれば住宅に對しては町會を單位として必要なる計畫を定め、更に隣組住宅に對しては國防的に「プラン」を定め生活體制の刷新を主としたる計畫に依り、新住宅を作りたいと思ひます。

×

株式會社須賀商會社長　須賀藤五郎

1. 學者とプラクチカルエンヂニヤー、特に設備建材部門の業者とタイアツプして組織して居る我協會は純然たる學會と異り、隨分社會に貢獻をして來た。過去25年間の足跡は頗る大なり。小柄と雖ども今日我國の建築が質的に世界の水準に達した事に我協會の功績を看過してはならぬ。
2. 高度國防國家の要求にピツタリ合致した生々したる建築をする事。それにはあらゆる科學工學の粋を集めた綜合技術による能率高き建築でなければならぬ、設備をオミツトしては建築は成立たぬ。建築の內臟機關の建設を承る我々設備部門の業者は益々その全智全能を發揮せねばならぬ。將來の建築界でモツトモツト活躍せねばならぬ者は設備並建材部門の業者達である。我々の責任の彌々重大なるを痛感する。

×

大阪府立今宮工業學校　教諭　中島喜平

1. 眞善美聖なる要素を持つ會は發展する。本協會は創立當初より今日に至るまで此の精神により一貫されてゐる。從つて今後の發展も期待される。
2. 建築資材は統制され、勞務者の聯合組合も强化されつゝある今日、高度國防國家の建設を計らるゝ爲めには建築營團が設置さるべきではないかと思はれる。

×

中西六郎建築事務所勤務　星廣文

1. 昭和10年「都市武裝促進委員會」の事業として當時軍當局に協力防空演習に參加し、國土防空の緊要なることの宣傳に盡力された當時の委員諸氏に改て敬意を表します。
7年後のこの時局下、その感慨を新にするのであります。

2. 共れは大東亞建設の一語に盡るゝと思ひます。そしてこの光榮ある大理想を遂行する義務と負擔とを我々は自覺しなければなりません。武力行動と共に建設工作を同時に遂行しなければならない點も亦覺悟しなければなりません。我々は今こそ、此の文化行動に裸身となつて挺身しなければなりません。それが爲には今新しい變革に即應して再編成をなしつゝあるあらゆる面の制度機構を急激にその體制が整へられるべきでありましよう。

木造家屋實驗報告

擔當　大阪府建築課
兵庫縣建築課

第1節　目　　的

各種の爆彈を飛行機より投下し、それにより生ずる爆風又は彈片により蒙る木造建物の被害程度を知り、我國一般の木造建物に對する防空對策上の一資料たらしめんとするものなり。

第2節　供試家屋

a. 配　　置

爆撃目標を中心として、之れより種々の間隔に5戸の建物を配置し、その中2戸の瓦葺建物をそれぞれ第1號及び第2號とし、殘部3戸のバラックを第3號乃至第5號とす。（第1圖　木造家屋配置圖參照）

b. 構　　造

イ、　第1號家屋（第2圖參照）

土臺は河床を均らし、約10cm玉石敷詰め据置き軸組立てをなし、主要柱は短枘入れとし、其の他は4寸釘打ち程度なり、軒桁は突付け又は相欠ぎに4寸釘打ち止め、筋違ひは大櫃を用ひ、4寸釘にて打ち、建物內數ケ所には燧材を用ひ釘にて打つ。小屋組は和小屋にして要所は、2分丸又は巾8分の平鎹を使用せり。材種は主として杉材3寸5分押角を用ひ、小屋梁の一部に末口5寸位の松丸太を、母屋は末口3寸位の杉丸太を使用せり。

本屋と下屋との取り合せは下屋の棰掛として大割を柱に4寸釘にて打付く。壁體は眞壁造とし、小舞掻きの上に荒壁塗り裏返し程度にて止め、外部腰板は巾4.5寸、厚4分杉板5分重ね、下見板張り付け、屋根は野地板張りの上に平瓦葺とせり

ロ、　第2號家屋（第3圖、第4圖參照）

主要構造は第1號家屋と略々同樣なるも、その相違點に付き下に列記す。

i）圖示の通り間柱杉1寸3分角を8尺間に入る。

ii）外壁は眞壁造とせず、外部より杉下見板張りとす。

ハ、　第3號家屋（第5圖、第6圖參照）

軸組、小屋組其の他の用材は總て杉末口3寸乃至3寸5分丸太を使用、堀立てとし上部は短枘入れ又は大釘打ちとし、所々に控柱取設け、壁體及び屋根は外部より杮葺張りとす。

ニ、　第4號家屋（第7圖、第8圖參照）

柱、梁、小屋組は總て末口3寸乃至3寸5分丸太とし、間柱は松大3寸、足固めは杉3寸丸太二つ割釘止め、要所は筋違ひ釘止めとす。

屋根は杉大櫃張立てのまゝとす。

壁體は下地杮張り、木摺を外部より抑へ厚4分の土塗り仕上げなり。

ホ、　第5號家屋（第5圖、第6圖參照）

構造は第3號家屋と同樣なり、但し小屋は釘打付けの上要所に鎹を使用せり。

c. 室內施設

イ、　窓防護施設

窓枠は市販品を使用し、窓硝子は普通平硝子及び鋼入硝子の2種とし、平硝子はセロハン紙張及び日本紙張及び生地のまゝのものと3種とし、適當の個所に內側より板戸、建具、疊等を以て窓全面を覆ひ、爆風、爆彈片等の防護施設とす。

ロ、　室內待避施設（第1號及第2號家屋のみ）

供試家屋內部の一隅を利用し、菓物箱、疊等を以て組立て、簡易なる待避の施設たらしむ。

第3節　調査方法

本件調査は大阪府、兵庫縣の協同にて行ひ、爆撃遂行直後、爆撃に依り蒙りたる爆風又は爆彈破片による被害を筆記又は寫眞等に依り、收錄せんとするものにして、其の分擔並に人員配置は下表の如し。

建物	班名	班長	係員	寫眞係員
第一號	屋根調査班	小原	後出	寺田
	軸組〃	川勝	森川	
	壁體〃	岡田	越田島田	
	窓〃	菅（兵）	板野（兵）渡邊（兵）	
	室内〃	板倉（兵）	長澤（兵）	
第二號	屋根調査班	松森	板垣	中村（兵）
	軸組〃	平野	景山	
	壁體〃	恒岡	長尾寺岡	
	窓〃	生田	飯塚（兵）藤井（兵）	
	室内〃	岡本	濱田（兵）	
第三號		横見	畔上	駒
第四號		澤部	菊地	
第五號		秋山	淺野	

表中（兵）とあるは兵庫縣よりの出張員、他は大阪府よりの出張員。

第4節　各號家屋被害狀況

1.　第1號家屋被害狀況

a.　屋根被害狀況

第1號家屋の屋根は一部屋根瓦及野地板を破損せる外は殆んど被害なし、破損の大要を列記すれば次の如し。

北側屋根

西側より4列目にして棟より5枚目の個所に於て瓦約4枚飛散し、其の下面の野地板も破損し、破片が屋根面に散在して居る（第9圖參照）其の他棟瓦の浮上つたもの三枚は角が缺け飛散せり。他に輕微なる損傷を受けしもの數個所あり。

第9圖Ⓐ個所の直下の室には第10圖に見る様に2.3の彈片及瓦が散在し、之に依つて推察する附近に落下したる爆彈の破片が屋根を突き破つて侵入したものと認められ、亦其の爆彈はその彈痕及方向、距離等より見て西方約50mの河中に落下した彈に依るものと推察さる。

但し被害個所直下の室内に殘れる彈片の大いさより見てⒶの如き穴を開けるには、大いさ不充分の様に思はれ、或は爆風に依り吹き飛ばされた石片に依り破壞されたものではないかとも推察さる

南側及東側下屋

此の部分の屋根は瓦2枚の角が缺けて飛び、所々に瓦片が散在してゐる程度で、其の他見るべきものなし。

b.　軸組被害狀況

調査するに何等の異狀を認めず（彈片痕跡もなし）

c.　壁體被害狀況

彈片は非常に細かくなつて四散し、その殆んどが壁體を貫通して居る。各面の壁體共相當數の被害を受けて居り、その數及狀況は次表並に第11圖に示す如くである。

壁面	彈片貫通個所			彈片痕個所			總計	最大貫通痕	
	木部	眞壁部	計	木部	眞壁部	計		木部	眞壁部
東面	25	21	46	2	5	7	53	寸寸 3.5×0.7	寸寸 5×5
南面	10	6	16	1	0	1	17	3.5×0.5	6×4.5
西面	4	13	17	3	0	3	20	1.0×0.8	4×8
北面	0	9	9	0	0	0	0	ナシ	4×4

上表の通り被害個所は東面に多く、北面に少きは彈痕表示圖に依つて明らかにして、東側の投下彈が建物に最も近く、且建物より2—3米低き爲と思はる南側は、投下彈數最も多きも、東側に比し距離の遠き爲、南面の被害が東面より少なかりしものと思へらる。南面に比較して西面が投下彈との距離更に遠く、且少きに被害の同程度なりしは彈の大なりし故と思はる。詳細に之を比較するに彈片の當りし個所が南側は下部に多く、西面は上部に多し、之は投下彈の位置が南側は2—3米低く西側は反對に2—3米高き爲と思料せられ、北側の被害少く、且木部の貫通痕なきは、その正面に投下彈のなき故、當然の事と認めらる。

之を要するに彈片飛散狀況は豫想よりも低角度なるを認む、亦大小無數の石塊散亂せる河原に爆彈投下をせられたるものなるを以て彈片に依る被害の外に爆發の際に飛散せる石塊に依る被害も相當あるものと考へらるゝも、壁體に於ては確實にそれを認め得るものなく、下見板部分は勿論、直壁部分の被害狀況を見るも、小舞は銳利なる刃物にて切斷されたる形狀を示し、その周りの壁土の落下せるは粗雜なる施工の爲と思料するも或は彈

片痕の中幾許は石塊痕なりと考へらる。

爆風に依る被害

爆風に依る被害と認めらるゝは東面に少しの壁面龜裂を認めたるのみなり、間柱なく眞壁の軸組に對する密着悪く粗雑なる構造の爲、却つて爆風の被害を免がれ得たるものとも考へらる。若し工事期間相當あり、施工入念ならば小なる龜裂迄充分記錄し得、被害も更に詳細に判明せらるゝ事と思はる。

d. 窓被害狀況

開口部の實例

實驗の前後に於ける開口部の狀態は實例の結果別添圖面の通りにして說明省略す。（第12—第14圖參照）

破　碎　率

實測結果に依り硝子の被害を下記の3種類に分ち、其の中破碎は人命に危害を加ふべき危險性最も大なりと認め、破碎率を算出せり。

龜裂　龜裂を生じたる儘原位置に殘存せるもの（一少部分の破碎は龜裂に包含す）

落下　硝子が落下後原形を保ち居たるもの及び、建具全體と共に落下したるもの。

破碎　硝子の一部又は全部が破碎飛散したるもの

硝子被害調査表

硝子種別	内側ノ防護ノ有無	無被害	龜裂	落下	破碎	破碎率%
普通硝子	有	13	2		7	32.5
	無	1	2	2	5	50.0
セロハン張	有	3	1		1	20.0
	無	1	2	4	14	66.7
日本紙張	有		3	9	4	25.2
	無					
網入硝子	有		4			0.0
	無					
合　計	有	16	10	9	14	28.6
	無	2	4	6	19	61.3

註　數字は硝子を各格間に依り數へたる枚數
　　破碎率は全數に對する破碎の比（%）

上記中セロハン、日本紙を硝子の兩面に貼りたるものと、片面に貼りたるものを用ひたるも、本實驗に於ては、其の差は顯著ならず、尙格間の大小（即ち桟組子の間隔の大小）に依る影響及開口部の方向に依る爆風の强弱の差は稍著しきものが認められたるも、上記の表は之を無視して平等の取扱をなせり。

普通硝子の破碎率の比較的小なるは、之に依るものと思料す。

其の他の概況

開口部の室內裏側に設けたる防護施設は破碎率にも表はれたる如く、硝子の破碎防止の爲にも効果著しく、更に破片の室內飛散防止を兼ね極めて有効なる手段たる事を實證せり、開口部の方向に依り爆風の强弱ありたるものゝ如きも、本實驗に於ては雨戸は3枚の中2枚室內へ吹き倒され、襖は2枚の中1枚は彈片に依る穴あり、疊（1枚）のみは完全に原狀維持せり、硝子破片の飛散狀況は現場の地面の狀態に依り發見困難なる微少破片を度外視すれば、概ね原位置より約1米內外の間に集中され、且內側防護施設のなきものは建物の兩側に略平均して飛散せり。日本紙貼の硝子は破片比較的大にして落下後も連結せるは特に注目さる。セロハン貼と普通硝子との差は顯著ならず、硝子の支持方法に組子に嵌込したるもの「パテ」にて止めたるもの、釘にて止めたるものゝ3種ありたるも「パテ」は施行後日淺き爲柔軟性に富み却つて硝子の破碎を防止したる如く推測さるゝは興味あり、今後研究の余地あるものと認めらる、釘止は硝子が釘の所にて缺き飛びたる形跡あり、硝子の破碎を容易ならしめたる傾向が認めらる。

e. 室內被害狀況

供　試　體

1號家屋の北東の隅に外壁を利用し、梨箱10個疊5枚を第15圖の如く配置して屋內の待避所を設けたり。

梨箱　市販のもの　36cm×25cm×50cm
　　10cm～15cm徑位の石塊を充す
　　重量　凡80kg～90kg

疊　普通古疊、內1枚は特に濕りたるもの

床　土間（河原）の儘

外壁　眞壁の上に下見板張り（眞壁は稍々濕氣を帶ぶ）

實驗結果

東側外より外壁に彈片痕2個所を有す。1個所は外壁下見板に突きさゝりたる儘內部に入らず、1個所は壁を貫きて內部に入る。內部に入りたる彈片も對側の箱に當りたる形跡なく、疊上に窓硝子破片、壁土、塵等散亂せり、以上の外箱疊等の位置の移動も認めず。

之の實驗より見るに、避難の爲に木造建物の外壁を利用する事は危險なる結果を招くものと思はる。

2. 第二號家屋被害狀況

a. 屋根被害狀況

本供試家屋の壁體は眞壁なき下見板張りにして筋違、方杖等も貧弱なりしに依り爆風壓に對し、壁體抵抗し得ず、屋根全體諸に倒潰せるもゝ如し。

其の結果倒潰後の瓦の配列は別圖の如く比較的整然として葺上り形狀を存し居れり（第16圖、第17圖參照）尙倒潰方につきては壁體の抵抗少き梁行方向を取れるものと思料せらる。

b. 軸組被害狀況

第18圖に示せる通り、西南西の方向に向つて家屋全體を押し倒したる如き有樣となりて倒壞し、柱、桁、梁等何れも其の方向に有り、爆破前の位置より東及び北に存するものなし、屋根は本屋2面（東及西）と下家2面（東及北）計4面に大離し、其の土臺は圖示の通り一部屈折して移動せるも、其の屈折は繼手の位置なり。

破片に依る被害

本號家屋の四方に落下したる爆彈に依り、各面に外側より貫通したる彈痕有るも、北東の方向より來たる彈痕最大にして、其の中以下（第18圖參照）

（M1）　柱は下部より1.5m1個所にて切斷

（E6）　柱は下部より1.2m1個所にて切斷

（A10）　柱は下部より2m1個所にて切斷

（A6）　A8柱上部の桁にも貫通の彈痕有り

以上の何れも其の切斷面より視て北東の方向よりのものと見受けらる。

倒壞の原因（推定）

前記施工法に於て記したる如く、仕口其の他に於て構造的に余りに脆弱なりし爲、爆風壓に對し倒壞を早めたものと思料せらる。

爆風壓で倒壞したものと想定し、その爆彈は北東の位置に落下したるものと推定せらる、理由は各部の彈痕の貫通及び切斷方向より推定せらる、建物が北東らかの方向に倒れずして、西南西の方向に倒れしは、小屋組の構造關係に依るものなるべし、又中柱（E6）柱は別紙圖面に示せる通り本建物にては重要な柱にして、且つ該柱上部に於て梁に四方に繼手をなしたるものにして、此の中柱の切斷は倒壞の大なる原因の一つと考へらる。

倒壞の狀況の推定

爆風壓にて建物は幾分浮上り、柱の枘が拔け、柱は壁體と共に倒壞したる後、屋根が落ちたるものと想像される、其の理由は下記の如し。

1. 柱の枘が1本も折れて居ない事
2. 東面、北面は柱の倒壞した頭部の位置より桁の位置が手近に在つた事

以上の2理由を推定の根據とせり。

c. 壁體被害狀況

家屋は西方、稍南寄りに全倒潰せり。

壁體は軸組の倒潰に依り四周共完全に倒潰せり而して下見板の局部的には彈片に依る被害を無數に殘せるも、爆風に依る被害は認められず。

東側外壁

此の側の爆彈破片に依る被害は、實に大小無數にして、大部分下部に北東より西南方へ外壁下見板を斜に完全に打拔き、尙余勢を以て南側外壁を貫通せるもの相當あり。

南側外壁

此の側も無數の彈片に依る貫通被害を認め得るも、その貫通部を調査するに室內より外部に向ひ貫徹せり、從つて此の側の彈片は東側又は北側を貫通し來れるものなるべし。

西側外壁

此の側は他の3面に比して彈片に依る被害少きも、貫通孔を視るに內外兩面より貫通せる形跡あり。

北側外壁

此の側は何れも外部より內部へ貫通せり。

要　約

①爆彈は無數の破片となりて飛散せり。

②飛散せる角度は地平面に對して極めて小なり。

③此の程度の下見板を以てしては相當小なる彈片と雖も大部分貫通するものと思はる。

④彈片貫通に依る火災及焦痕等なし。

⑤爆風に依る被害は認められず。

d. 窓被害狀況

準備、窓建具は全部普通品にして、木製引違、既製中古品を改造し、何れも並1分厚素硝子を嵌む、窓の配置は第19圖に、建具の構造は第20圖に示す、建具取付後は全部戸締りをせず閉鎖せり。

防護方法

窓W6及出入口を除き他は全部次表の如き防護方法をとる、窓防護材は何れも室内より窓に蓋をする如く取付け、周圍要所を大釘を以て打止め固定す。（但し襖はその枠堅固ならざる爲、大部分取付不完全なり。）

窓破壞狀況

爆彈に依り家屋は南西方向に倒壞し、硝子は一部分を除く外、全部破壞飛散す。その破片散亂の分布狀態は第19圖の如し、又各窓の破壞狀況は次の如し。

W1 窓建具は壁面と共に室内側に倒壞すれども窓防護の疊は窓に固定の儘にして、窓建具も破壞されず、原形の儘壞面に取付く、硝子は大8枚、小4枚の中、大1枚、小2枚無瑕の狀態で完全に殘存す、破片は何れも小にして屋外の比較的近距離（4尺以内）に散亂し、内部には入らず。

W2 窓建具は家屋倒壞の爲變形大破し、防護用の襖も破損す、硝子は何れも大體放射狀に粉碎すれど、兩面に貼れる厚手障子紙の爲破片は飛散せず、紙に附着せる儘原形の大さ又は½乃至¼位の大さに破れて散亂す。

W3 家屋倒壞の爲建具は變形大破す又防護用の襖も折り重なる壁材屋根材等、爲大破す、硝子厚手にして障子紙を外側貼とせしもの内側貼とせしもの何れも小さく碎けども、W2と同樣に紙に附着せる儘原形の½乃至¼位の大きさに破れて外側12尺位の所迄散亂す、但し紙面より剝離されたる破片も可成多く飛散され居たり。

W4 W5 何れも壁、屋根折り重なりて倒壞せる爲、窓建具防護用の襖も大破す、又硝子破片小さく外側に散亂せる如し。

W6 唯一の素硝子無防護の窓なり、窓建具壁面に固着倒壞大半破損す、硝子破片は遠距離に飛散し從つて形も小さく、且つ極めて

窓番號		W1	W2	W3	W4	W5	W6	W7	W8	出入口
大キサ	高	九二・〇糎	九一・〇〃	九一・〇〃	九〇・五〃	九一・五〃	七四・五〃	七四・五〃	九一・〇〃	一六二・〇〃
	中	一七一・〇糎	一七三・〇〃	一七一・〇〃	一七三・〇〃	一四〇・五〃	一五九・〇〃	一七三・〇〃	一七一・〇〃	一七〇・〇〃
防護方法	硝子	素硝子ノ儘	厚手障子紙兩面ベタ貼	厚手障子紙片面ベタ貼（外側ニハル半分ハ内側ニ半分ハ）	素硝子ノ儘	同　左	同　左	同　左	同　左	
	窓全體	ニ取付ク室内側ヨリ疊ヲ一枚横	〃　襖ヲ一枚　〃	〃　〃　〃	〃　〃　〃	〃　〃　〃	防護ヲ施サズ	横ニ取付室内側ヨリ雨戸ヲ一枚	同　右	
備考		窓全體ヲ完全ニ覆フ	襖ノ巾小ナル爲上下十糎位隙ク	同　左	同　左	同　左		窓全體ヲ完全ニ覆フ	同　左	普通雨戸引違

鋭く鏃の如し、大體窓より 4m 位迄飛散し、外側には殆どなし。

㋐㋑窓建具防護用の雨戸何れも大半壁面と共に倒壊破損す、硝子は何れも外側に比較的近距離に散亂せり。

出　入　口

壁面と共に倒壊すれど破損甚しからず、大體原形を留む。

要　約

イ　窓㋒を除く外の窓は内側より疊襖雨戸等で防護せし爲、硝子破片は室内に入らず、何れも建物外側に飛散す、其の分布狀態は奥行方向に小にして間口方向に大なり。

ロ　窓㋓の硝子は壁體諸共倒壊せるも、完全に原形を留むるもの3枚あり。

ハ　窓㋒は唯一の無防護窓なるが、破片は極めて小さく、且殆ど内側に可成遠距離迄飛散せり

以上は唯窓の破壊狀況の結果のみであるが、之等のみを基礎にして推考するに、家屋破壊の致命彈の方向は間口方向のものと認められる。

一部の意見では此の家屋の倒壊の原因は、家屋に小さき爆彈が屋根に當りて瞬發せしものならんと言ふ。若し然りとすれば他の地上（砂交り小石層）に落下せる際の漏斗孔が深さ約20糎乃至40糎位も生ぜし點より考へ、比較的丈夫なる屋根（並4分板の上に日本瓦を直かに葺きしもの）に當りて直ちに瞬發せるものとは考へられず、屋根に命中せるものとすれば、屋内に侵入せし瞬間か、或は屋内床に達して後爆發せるものと考ふべきで、若し然りとすれば、窓㋒の破片が室内方向に飛散せる事に矛盾を生じ、依つて家屋に命中せるものと思はれず。

窓方向の差違に依る硝子の破損狀況の相違

近距離に於ける爆彈の爆發に依り、彈正面の窓硝子が破壊されるは當然であるが、正反對即ち彈に對して裏側の窓硝子も同様に破壊されてゐる。之は家屋の倒壊の際に於ける破壊力も手傳つてゐると考へられ、破片が細かく粉碎されてゐる點から考へると、爆壓に依り破壊されてあると推察され、投下爆彈の位置より約25米の點の爆壓も相當の威力がある事が想像出來る。破片は何れも外側に3尺乃至12尺の範圍に窓防護材に反射されて飛散せり。然し窓硝子面が投下彈の方向に向つてゐる場合（本實驗では北東面の窓硝子は投下彈と大體5度以内の傾斜をなす）は爆壓に依る影響は非常に減ずるもので完全に殘り得るものさへある。

疊、襖、雨戸等に依る簡易窓防護の効果

本實驗の窓防護は普通住家に有り合せの疊、襖雨戸を外づして窓面を覆ひ、内側より防護したものである。此の際疊や雨戸は完全に窓を覆ひ得たるも襖は巾が狹く窓の上下に3寸位の隙間が生じ然も工事を急ぎし爲、周圍の枠不堅固にして取付け後も完全に固定されて居らず、然し爆破された硝子の破片は一部建物の倒壊により入りしも其外殆ど室内に入らず、大部分は此等の防護材に反撥され、外側に向けて飛散し、破片防止として非常な効果を得たり、但し防護材としては疊を使用するのが他の建具より優れてゐる如く觀察されたり。

硝子の破壊狀況

イ、　素硝子の場合

素硝子にありては龜裂は大體放射狀に生ずるものゝ如く、其の散亂せる破片の形狀は長さ約 2cm 乃至 4 cm、巾 5 mm 乃至 1. 5cm 鉾型、三角形、扭れ四角形等あれど鉾型のもの多數あり、その先端は極めて鋭利にして人體への傷害も甚大なるを感ぜしむ。

ロ、　障子紙を貼りたる場合

片面貼りのもの、兩面貼りのもの何れも厚手障子紙を硝子面に「ベタ」に糊にて貼りたるものなるが、龜裂狀況は素硝子の場合に大體類似してゐる、即ち大體放射狀に粉碎されるが、素硝子の場合と異りて破片は一個々々散亂せず、紙片に附着せる儘纏つて散る、此の點片面貼り兩面貼りとも同様である、片面貼りのものは糊が悪いと紙面より剝離して散る恐れがある、兩面貼りのものは用紙さへ丈夫であれば、破片は容易に飛散せず、故に空襲時は硝子窓は成る可外づして定全な場合に收納する方が良い、然し止むを得ざる場合は障子紙かセロハンの如きもので丈夫なものを用ひ、兩面を「ベタ」貼りに貼る事が望ましい、硝子の破壊は方向に依つては可成遠方迄被害を及ぼすので

家屋は無被害でも硝子のみ破壊されると云ふ場合が極めて多い、依つて豫め防備して置く事は硝子破片に依る傷害防止の點から云つて大切である。

窓枠の破壊狀況

本實驗に於ける窓枠は前述の如く中古品を改造せるものであり、建付も不充分なりしが、爆彈に依る被害は硝子の破壊に比較して輕少にして本實驗に於ては大部分倒壊に依り破損せるものにして爆風で歪められたり、破壊されたものは無い樣である、依つて特別窓枠自體を防護する必要は感ぜられないが、建付が不充分であると吹き飛ばされる恐があるので、建付を充分にする必要がある。

以上の事を綜合して考察するに、我が國の如き木造家造が空襲された場合、最も問題となるのは疊の延燒であり、纖弱なる窓を通じての延燒であるが、若し之れを剝がして窓の防護に使用すれば床の上に落下した燒夷彈は消火に容易となり、又窓にあてた疊に水を充分注いで置けば延燒防となり、然して硝子の破片の飛散に對しても可成の抵抗力を有するので、破片に依つて危害を蒙る危險も無くなり、壁體が倒れても共の柔軟性によつて破壊を輕減させる、その上更に厚手の障子紙かセロハン等で確實に兩面より「ベタ」貼りをしてをけば相當堅固な窓防護となり得る。

襖や雨戸も手近かに得られるが取付に不便多く疊程の抵抗力は無く、又毒瓦斯の防止の點から云つても疊程密着させるには困難を伴ふものと認む

室內被害狀況

準備（第21圖參照）

イ、 建具は圖示甲を襖とし、乙を硝子入障子となし。

ロ、 疊を窓の防護用並に室內の簡易防護用として一部使用せり。

ハ、 室內防護室は床下に設け、使用材料に疊及び石塊入樽柑箱を以てせり。

調　査

イ、 建具は圖示（第21圖）の位置に倒れ、現形を止めぬ迄大破せるものあり、硝子は何れも木ツ葉微塵となり、障子紙は建物倒潰にて損傷せる爲め爆風壓に依る影響を判する能はざれど倒壊狀態の一枚は當初より建て合せ不充分のものなれば爆風壓を得たす、倒壊せるものならん。

ロ、 疊は建物倒潰にて床傾斜すれば、最初敷込みの位置と些の相違するも、自然の儘にて殊更の影響なし。

ハ、 室內防護室の內部仕切用の疊、入口防護用箱は建物倒潰床と落下の爲破壊されたり。

要　約

建物倒潰にて室內施設の充分なる調査をなし得ざりしも、本實驗結果の大要次の如し。

イ　內部建具は外部と合樣爆風壓に抗し得す。

ロ　疊は相當爆壓に耐え得。

ハ　室內防護室の床下に設くるものに在りては防護室內の動物の狀況に依り見て比較的簡單なる構造のものにても有効なり。

建物倒潰せるも逃壁せらるゝ樣地下部分は出來得るだけ高く設け、出入口は一方とならざる樣施工する要あり。

3. 第3號家屋被害狀況

建物は配置圖に見らるゝ如く、爆彈落下位置は極めて建物に接近し居るも、その被害は極めて僅少なり、その被害は概ね爆風によるものと認められ、爆彈落下位置に接近せる外壁貳垂の一部約2m² 位を吹き飛ばされたる程度にして、建物の主體構造としては僅かに破片による被害をうけたる程度にして、大なる被害を認めす。（第22圖參照）

斯く被害の著しく僅少なるは建物構造の粗雜にして、就中外壁材の貧張程度の輕構造なりしに起因するもの大なりと想像する、尙その他に爆彈の性能にもよることの勿論なれ共之處には省略す。

4. 第4號家屋被害狀況

本建物の被害も主として爆風によるものと認められ、外部土塗は全部剝落し、柱は堀立のため一部は抜け出し、屋根は全面建物內側に落下せり、以下その主なる被害狀況を摘記すれば次の如し。

小屋組被害（第23圖參照）

イ、　陸梁、小屋組共に二つに折れ、合掌を北側にして略々直下に落下し、西半分は細破せり。

ロ、　合掌は眞東より外れ、合掌を南側にして西半分は完全に落下し、東半は陸梁尾端を入口楣に乘せかけた形をなせり。

壁體被害

前述の如く小屋組は建物內側眞下部に落下したるため、壁體は上部に於て外部に張り出したる形態となれり、然し之の外壁の外部へ張り出したるは建物內部へ爆彈の落下したるため、先づ外壁が四方に開き、屋根は眞上へ稍々浮き上り、然る後建物內側へ落下したるものとも想像さるゝも、その何れなるや確認することを得ず。

5. 第5號家屋被害狀況

建物構造としては被害なく、主として彈片による壁面の被害なり、例へば北側外壁に於ては爆彈の落下位置を中心として放射狀に30cm乃至1m 間隔に彈片による大小無數の穴を生ぜり、其の大さは大部分徑2cm 內外のものなれ共、西北隅より2m 高30cm の位置には巾4cm、長28cm にして銳利なる刃物を以て切斷されたるものあり。

筒管を貫きて樞に貫入せるものあり、出入口上部に於ては徑約15cm 位の石が飛來し、殘れるものあり、其の他徑1.5 cm 乃至2 cm 位の小石の飛來せるもの數ケ所に認められたり。

窓硝子は左側窓の一部を殘し、他は總べて破損し、屋內、屋外に散在す。

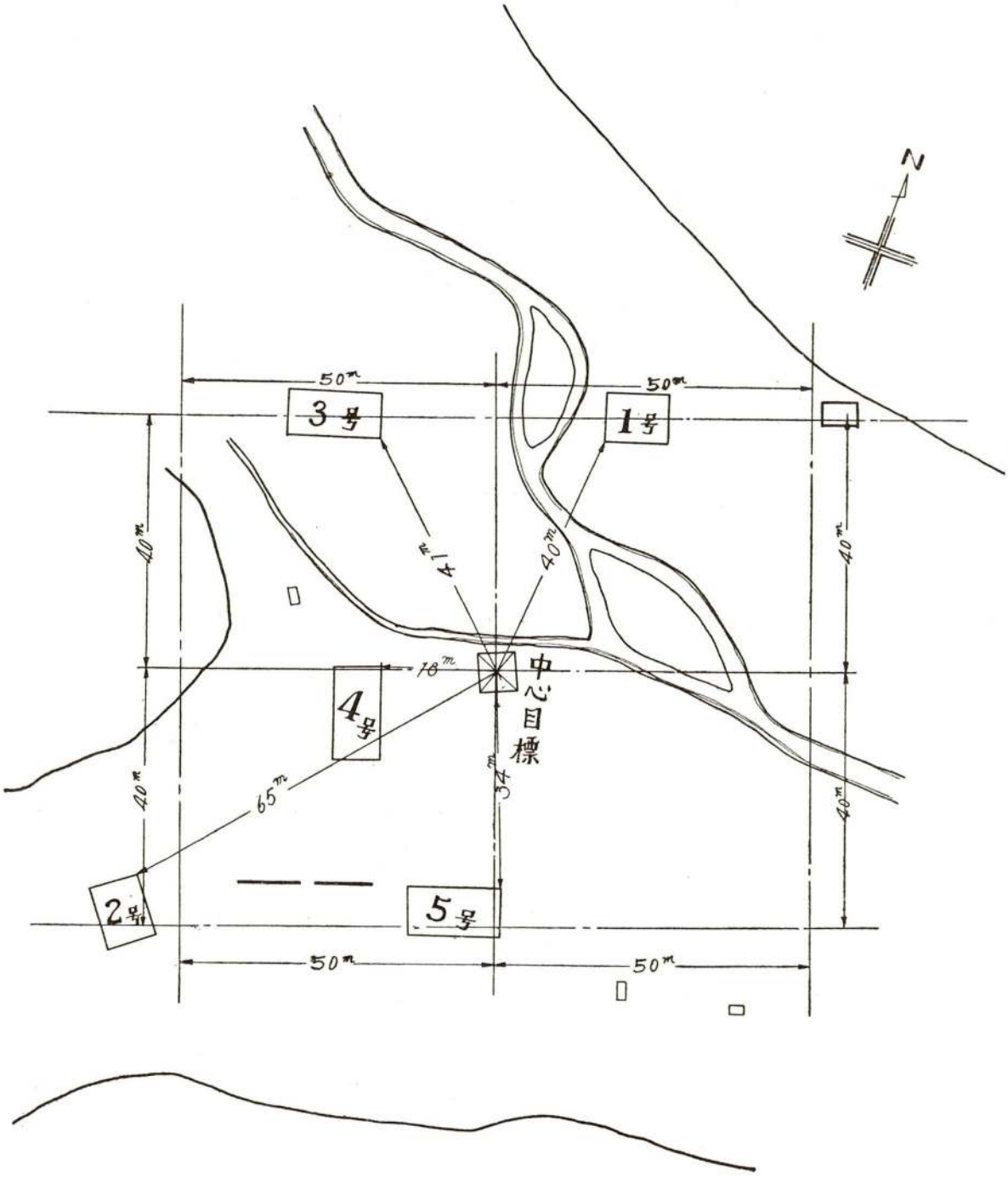
他側外壁に於ける被害の狀況も前記せるものと殆ど同樣なり。

屋根は西側妻の部分、その他彈片によりても徑15 cm 程度に破損せる個所數ケ所、徑2乃至3 cm の破損ケ所30數ケ所ありて、何れも內部より破片の飛散せるものと認めらる。（第24圖參照）

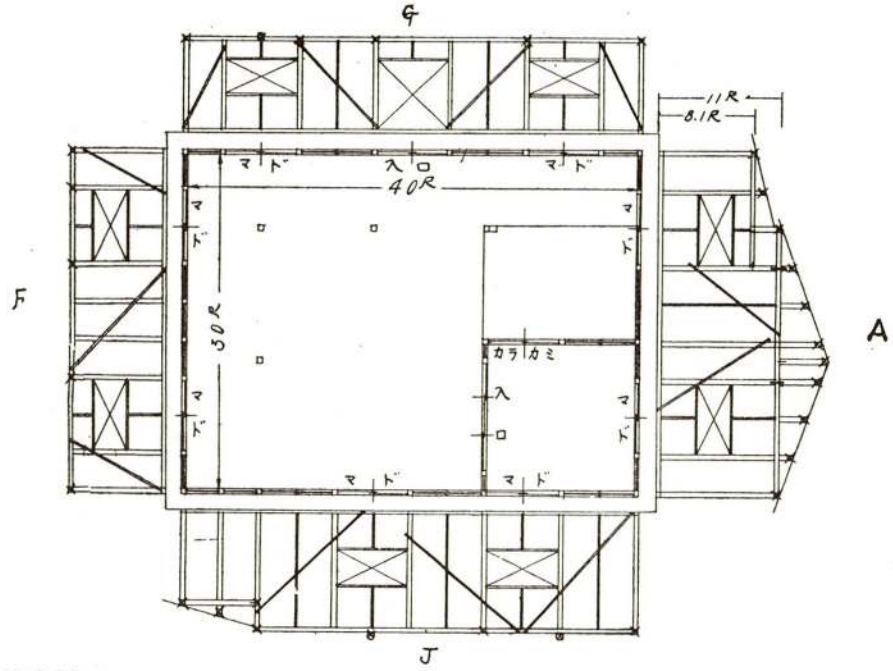
（擔當　大阪府建築課、兵庫縣建築課）

逆瀨川實爆演習・木造家屋調査

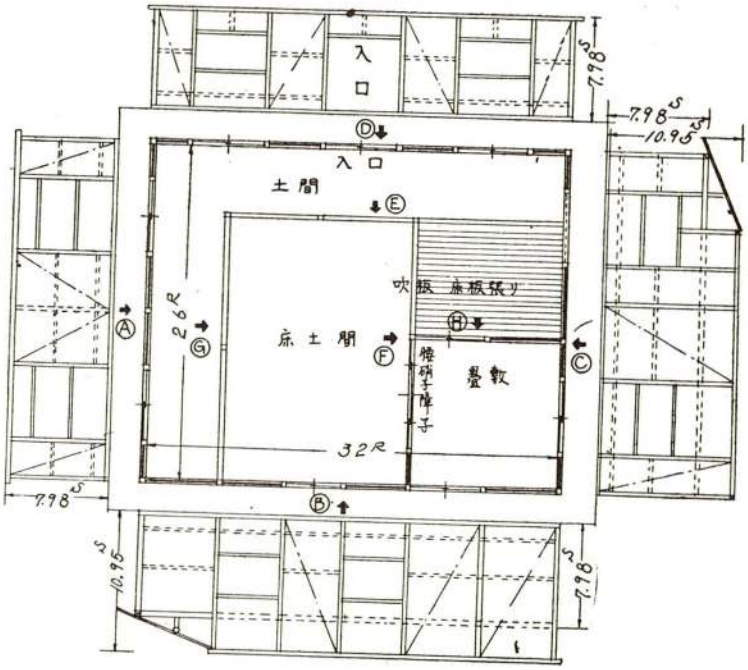
擔當　大阪府建築課
兵庫縣建築課



第1圖　木造家屋配置圖

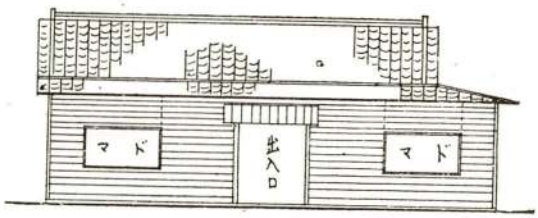


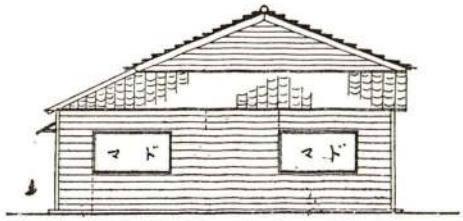
第 2 圖
第一號家屋平面圖及展開圖



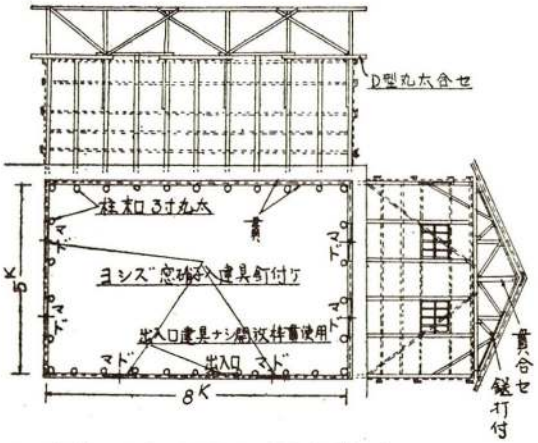
第 3 圖
第二號家屋平面圖及展開圖

第 4 圖
第二號家屋姿圖
左（北面）右（西面）

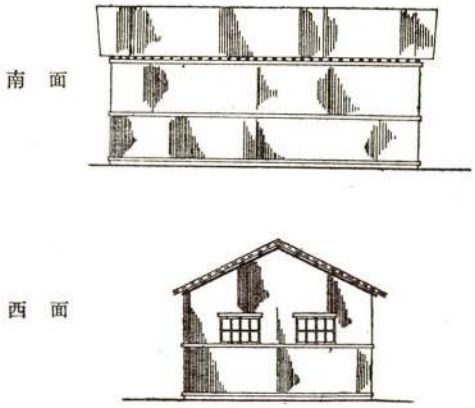




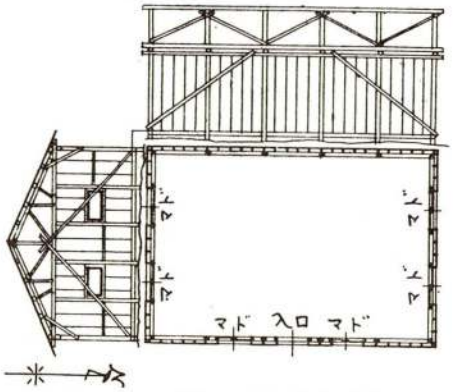
逆瀨川實爆演習・木造家屋調查……擔當　大阪府建築課、兵庫縣建築課



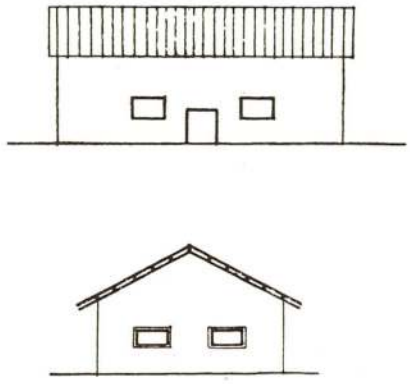
第 5 圖　第 三 號 及 第 五 號 家 屋



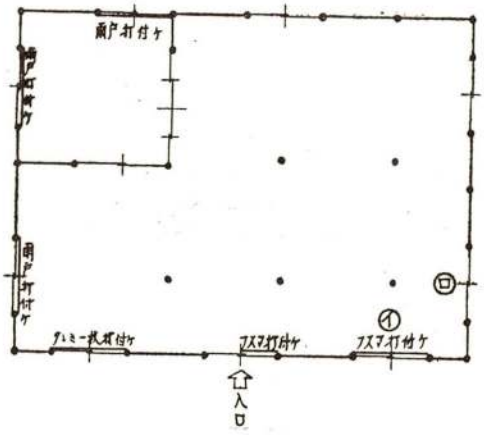
第 6 圖　第三號及第五號家屋



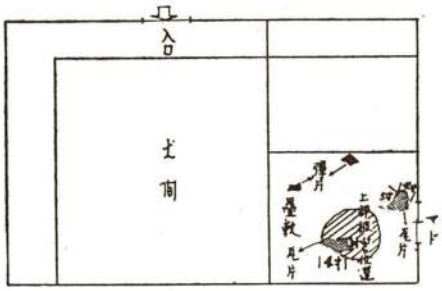
第 7 圖　第四號家屋　平面及軸組展開圖



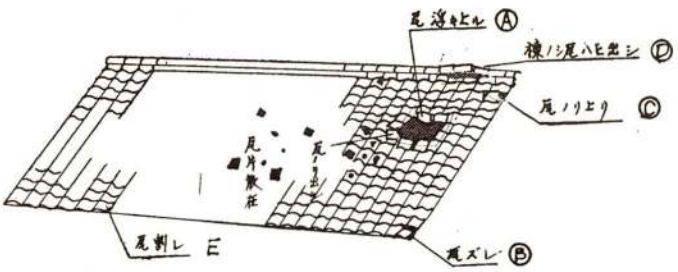
第 8 圖　第四號家屋姿圖



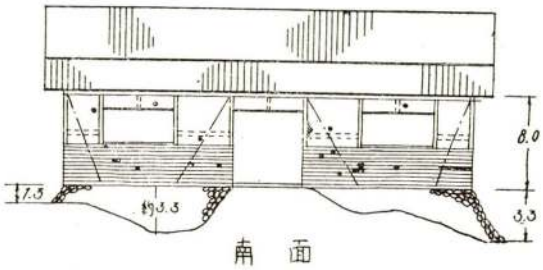
第12圖　窓出入口配置圖
（第一號家屋）



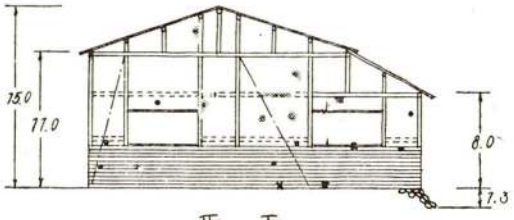
第10圖　北側破壞屋根直下ノ彈片



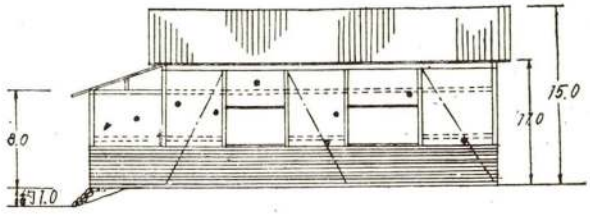
第 9 圖　北側屋根被害狀況（第一號家屋）



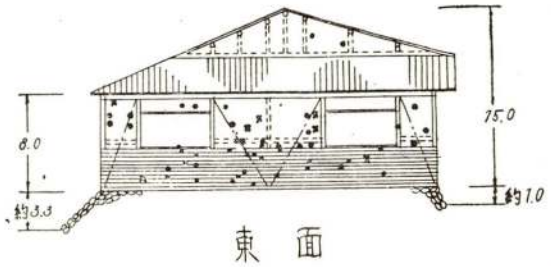
南 面



西 面



北 面



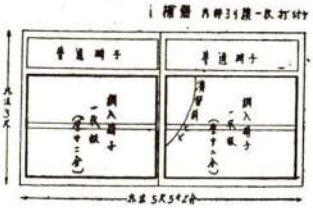
東 面

※ 外面壁土剝落小舞竹現ル

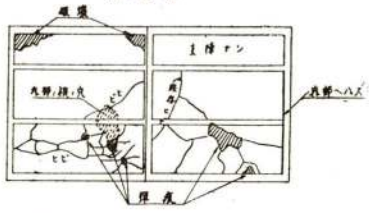
• 彈片貫通矣

× 彈 痕

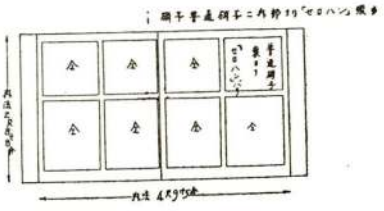
第11圖 彈 痕 表 示 圖（第一號家屋）



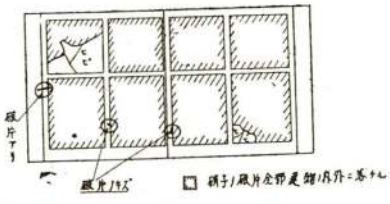
演習後



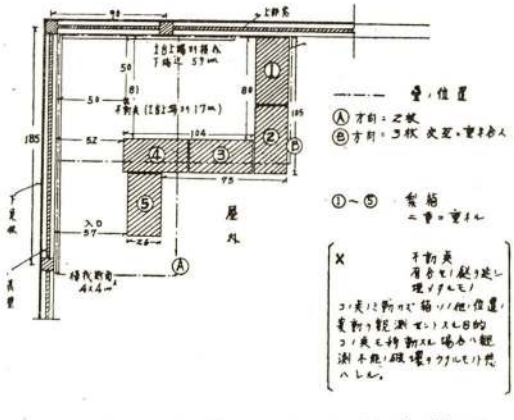
第13圖 窓（第一號家屋）



演習後

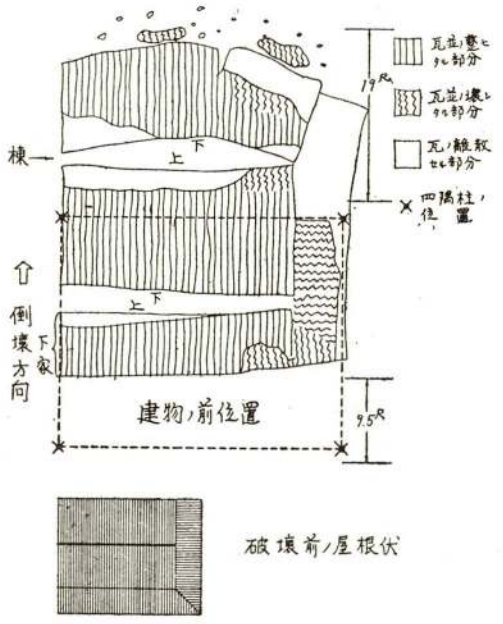


第14圖 ㊀ノ窓（第一號家屋）

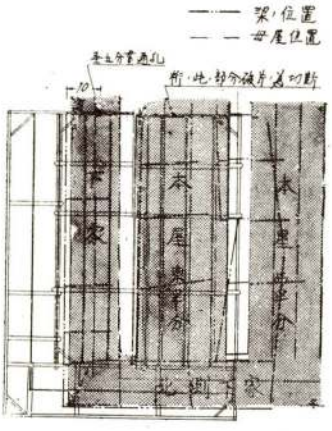


第15圖 室 內 防 護 施 設（第一號家屋）

逆瀨川實爆演習・木造家屋調查……擔當 大阪府建築課、兵庫縣建築課

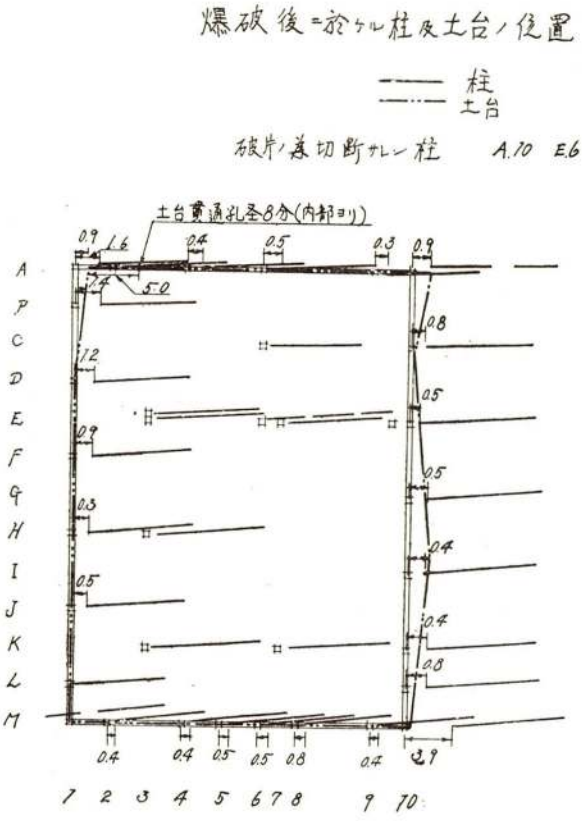


第16圖 屋 根 面 倒 壊 圖
（第二號家屋）



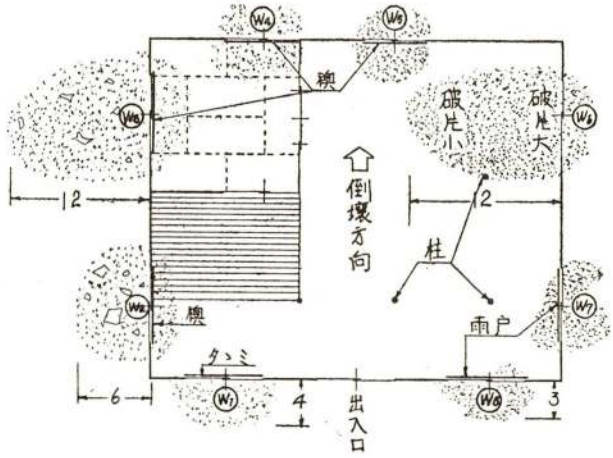
第17圖 （第二號家屋）

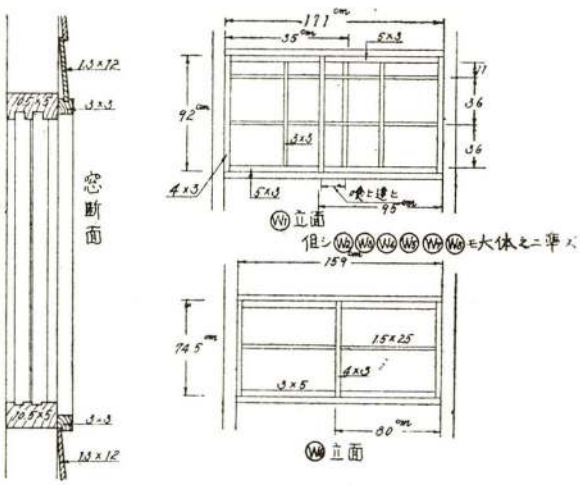
第18圖 窓 被 害 狀 況 圖
（第二號家屋）



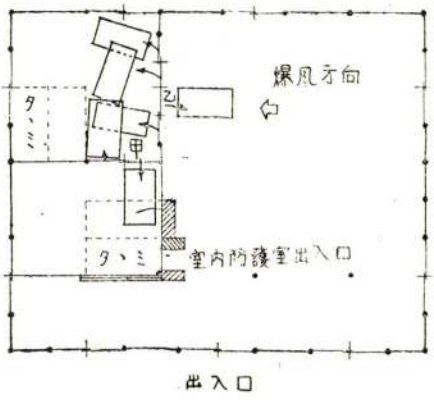
第18圖（第二號家具）

逆瀬川實爆演習・木造家屋調査
大阪府建築課・兵庫縣建築課

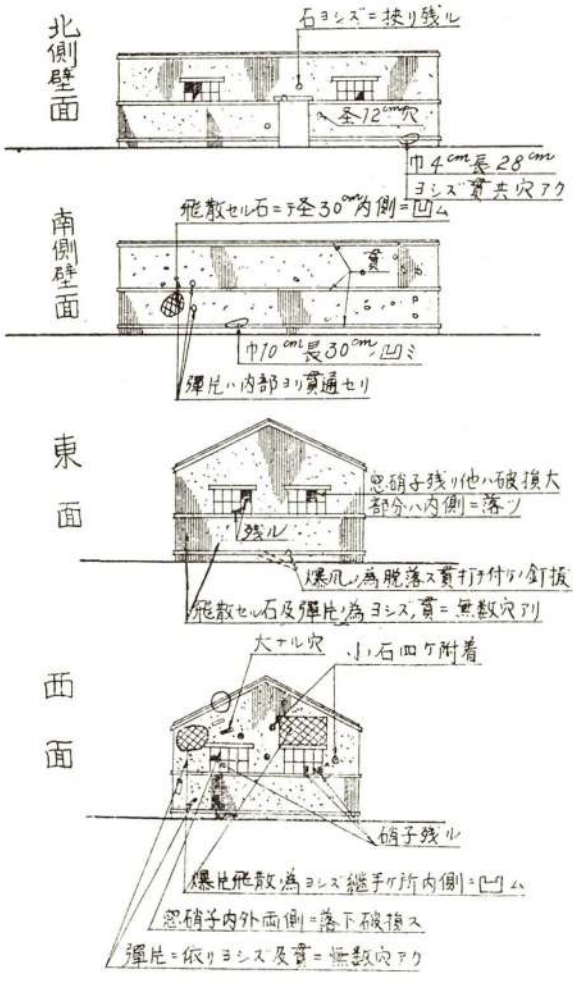

W4
W5
W6
W6
W6
W2
W1
W1
W7
W6
W6
W6



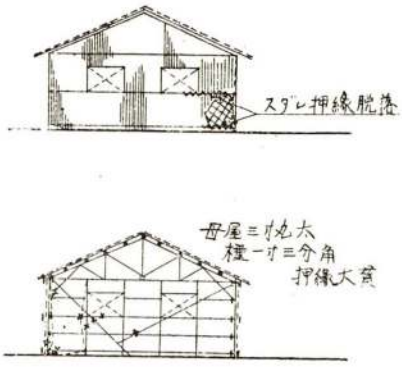
第20圖　窓　詳　細　（第二號家屋）



第21圖　室内被害狀況
（第二號家屋）

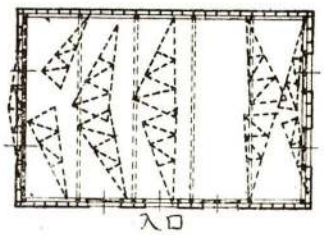


第22圖　第三號家屋壁面被害



第23圖　小屋組落下圖（第四號家屋）





←第24圖　第五號家屋壁面被害

建築技能工界の現狀及び將來

鈴木忠五郎

前　言

創立廿五周年記念號を出すので、將來の建築界について書いて見よとの仰せ、建築界の將來と云へば、相當に廣汎に亘るわけで、中々、その大要を察知することは困難である。將來を語る卜者でなければ、大言壯言出來ないが、自分の關係して居り、亦一つの理念を抱懷して、その實現を企圖してゐる關係上、その大要と理想を述べて、將來はかくなるべきもの、かくあるべきものであり亦現在その方向に進展しつゝあることを率直に書いて見たい。其して、御批判に與りたいと思ふ。技能工界、之は技術者社會と區別して見たわけで、建築の計畫、設計及び指導監理するものでないものを技能工としたもので、大工、左官、石工、塗工、其他を總括したものである。建築職工界の將來となるべきものである。

建築技能工は從來さまで考へなくても充分にあり、その技術も優秀であつたゝめ、之に關心を持ち研究指導するの必要は無かつたものである。然るに時局下、無關心にされたが爲でもあるまいか、勞力の不足、技能工の不足は、工事を遲延せしめ、甚だしきは停止の已むないものもあるわけである。時局下、高度國家防衞建設、大東亞戰爭の完遂、大東亞共榮圈の確立には、勞務の調整が必要であり、低物價主義による丸公の問題も、公定賃金、勞務供給の問題、其の他の國策が遂行されねばならないわけである。

之が爲には個人企業、自由企業、自由職業であり、氣儘に仕事の出來た建築技能工界は一大驚異であつたわけである。之が完遂せしめん爲に、統制會、統制組合化が必要になつた理である。かゝる時局要求から次第に組合の結成、企業の合同も次第に企劃され、實現されつゝある現狀である。　　以　上

A　組合の現狀

建築技能界は各職別に、兎に角曲りなりにも組合が結成され、國策遂行を目的として發足したので、未だに組合を持たぬ業界はないわけである。只、業界人でありながら、組合員でないものは、未だに相當ある。明治維新當時、帶刀を禁止した樣には行かない。恰かも「チヨンマゲ」を禁止した時、大勢は之に順應したが、尙やめなかつた人も相當にあつた。組合の必要、その使命は、充分に知りながらに、尙元の巢戀しさに、組合に入りたくないもの、僅かな組合費を損失と見て這入らぬ氣の小さい人も少くない。只大勢は如何とも致し方ない。組合に這入ると否とを問はず、政府の方針は組合を中心として進展し、指導しつゝあるわけである。その實例として、米の配給、甲勞及び乙勞の申請も、電話の購入にも、組合長の證明を要する等である。尙公定賃銀の實行、勞務者の供給、徵用の一部も、組合の力を、機能を利用し、報國隊の結成となり、その機構を以て、戰時下の建設機能を完くせんとしてゐるかに見える。工作班、修理部隊の組織も、組合の機能により、始めてその運用を始め得るわけである。

國家の命令、技能的の要求は、その組合を通じて實行されつゝあるわけで、この意味よりは、組合は、準官廳の如き感がある。隨つて、個人の知識、研究、能力だけでは中に變轉する規則、事務、國策への順應は難かしくなつて來た。より大きな力を使はねばならなくなつて來たわけである。

かゝる使命は朧氣ながら、自覺して來た、一方技術生活は、勝手の解釋では許されなくなつて來た。規則の不備、欠陷も個人の力では、どうにもならなくなつてしまつた。特に最近の如く、法規命令は、直接生活に大關係を持つ、食料品に、米に、職業に、即ち使用材料の制限、賃銀に、勞務者の雇傭に、自由は許されなかつたわけである。

之が知識の少い、特に法律知識の少い、技能者の精神的打擊を大きくした。法規の解釋と技術內容、その一例を云へば、勞務供給令による建築現場の如き、遲れ勝ちな正確でない。數と時間的に

正確を期せられぬ場合の適用、公定賃銀と技能能力、仕事の能率の大小、技術の巧拙による内容の變化、恰かも一定の規準のないものに、一定の標準にて規格せんとするものである。甚だしきは、數的に余り關心を持たぬ階級の者が簿記をやらなければならない。大體、大握みで仕事したものが原價計算をさせられるのだから、實際仕事にならぬのも無理はない。

更に之を指導し、監理するものは警察署になるから、之亦、建築技能界の眞相を知らず、形、外觀から、法規の違反を摘發することになれば、仕事の能力は低下し、手の付けられぬ現狀が見られる。組合は、此處に實際の使命を發見し、之が打開に邁進せんとしてゐる。

即ち、組合は、技能界の指導者であり、開拓者啓發者であり、更に調査本部、研究本部であり、良き相談所になるわけである。

B　技能生活と組合

以上の意味から、技能生活、即ち大工生活、左官生活は組合の指導啓發により、生活の活路を發見し得るのである。その第一義として、糧食の問題、米の增量、組合の斡旋、その機構により、その配給を完くし得る。現に左官が乙勞である。之は大工、手傳、石工の甲勞に對し、現在のモルタル塗を主體とする技能より見れば、不合理である之が改正方を當局に懇請してゐるが如き、組合の機構を通してこそ出來る。

町會機構では不可能なるものである。

更に軍手、作業衣、作業地下足袋の配給、即ち作業用衣料品、純綿の特配等も今後の事業であり、工具、更に機械用の鐵鋼の特配、一ケ年に要する工具の滅損、處要鋼量の申請、又使用資材の獲得、大工に於ける釘の問題の如き、物資調整使用よりも、今後、組合はその力により調査をなし、その正鵠なる數字を、國家に示さねばならなくなる。技能生活は、組合を離れてどうにもならなくなる。否それが指導、啓發により生活の合理化、伸張を計ることが出來ることになる。

更に又、現在の賃金の公定に就ても、更に請負（分括請負）に就ても、組合の事業は大きいものが期待される。その一例として、標準化様による工法、之を三段階位にすれば、それにより、請負額の最高、所謂丸公が規格出來る。賃金が公定、材料が公定なれば、之を工夫創案し、製作した物建築物にも、公定が可能である。此處に職業的に安全、即ち經濟上の安定が得られるわけである。その一例に貸家長屋建築を主體にすれば、仕口、繼手、高さ、部材の標準から、A號坪當り手間請負30圓、B號25圓、C號20圓と云ふ様に考へるが如き、又、モルタル3回塗り、厚さ5分、A號10圓、B號8圓以下等と規格することは不可能ではない。この規準を定めてこそ、建築界の經濟的規準が立つ、家賃問題も解決がつく筈だし、又官廳の建設豫算と合理化して來る筈である。資材と經濟規準、積算規格を創案か、協議かは組合自體の協力發展に大きな使命があるわけである。

之には相當の指導者、技術者とか、技術組合の良き啓發者となり、徹底的に調査研究の上、決定しなければならない。余りに自己の利益のみを主張してはならないし。現在の危險負擔、一ケ月の仕事日數を現在の機構にのみよる事もどうかと思ふ。合理化されたる機能の上に立つ創案も期待すべきである。

次に公定賃銀の活用、棟梁、世話役級の技術者の資格、仕事量と技能、見習工の昇給其他、個人の力ではどうしても正しく強く出來ないものは組合で解決すべき義務がある。技能者の段階も必然定むべきである。之も單なる仕事量のみでなく、勞務者の有する技術、技巧、指導力、知識、更に仕事量までも考査決定すべきものである。

更に保險制度の實施、國民健康保險組合の實施生活標準の向上の爲、組合貯蓄の奬勵、其他生活を中心として、將來組合の立場は重要なる地位を獲得することになる。

C　徒弟練成と組合事業

勞務調整令の結果、緣故のあるもの以外より徒弟を募集することは出來なくなつてしまつた。第二世の獲得は、技能工養成創立の外に道はない。所員、生徒の募集だけによる技能工の養成、徒弟募集の方法があるばかりである。之亦組合の力を以てしなければ、これが實現も難しいものであるが、何れの組合も相當の關心を有し、少い知慧、

困難なる經濟負擔の對策を考慮しつゝある現狀である。併し、技能界の進展は、第一に研究し、實施を計らねばならぬ問題であるが、之又直接利益を上げ得ないのと、負擔の多い割合に、組合員の直接關心、生活に一大驚異を與へぬ故、敬遠されつゝあるものである。

D　企業合同と時局突破

經濟界が一大轉換をした、現金制度、前渡制度金利のない、否見ない制度、中間者を含まぬ制度が、建築技能界にも大影響をもたらした、特に物資の配給、切符配給制、勞務供給の合理化、手續の複雜化、合理化、其他等は、個人だけの企業、小さい企業單位、その小さい例として、棟梁一人にて仕事の獲得、仕材、積算もやり、官廳へ手續もし、材料の配給の申請、切符による建材の獲得引取り勞務者の申請、その報告等、單に仕事を熱心にやればよかつた時代、建材は電話一本で、直ちに獲得出來た時代、勞務者の余つた時代の樣に、簡單には行かなくなつて來た。企業の單位の中にも、それぞれ分擔して、專門的に研究し、變轉する規則に準據して、合理的に請負し、營業を繼續しなければ出來なくなつて來た。夜だけの事務では、中々營業が續けられなくなつて來たわけである。

企業合同の聲、希望は相當に大きくなつて來た企業合同した業者の實相によれば、10人の業主が一つになれば、仕事は元の倍加する。3倍化するの實績を擧げてゐる。下請の職人、技能工も常傭となり、移動しなくなる。

事務が良く運び、信用が倍加する。之は經濟的の信用のみでなく、法人化する故、總てが、明朗化して來るが爲であると思ふ。只要は建築技能界には、余りに高價なる工具機械を使用しなければ出來ないものが少い。仕事は一元のものよりは、得意先より與へられるものが多いので、そう努力せずとも仕事を得られ、相當營業を現在もやつてゐる。時には不如意の日もあるが、曲がりなりにも續けて來てゐる。それに合同すれば、少くも暇はなくなる。合同すれば、給料になる。それもそう馬鹿に高級と云ふわけには行かない。配當はあるにしても、その標準は、合併の規準は中々困難であるに比し、配當までの期間、少い給料だけでは生活が出來ないと云ふ惡條件下にあるが爲に、合同して剩費を省かねばならないとは考へては居るが、先に立つて主張し、之に突入するものは少い。併しこの企業合同の機運は熟して居る。長い躊躇は許されまいと信ずる。

地域的の企業合同、尙全國的に仕事網を持つ、所謂野丁場のもの、大請負業を得意先とする下請者の合同、地域其他に關係せず、只事業的に企業を大きくして、時局に添はんとする者達の自發的合同等と考へられる。

合同して後は、職工の待遇改善、厚生福利の設置も出來、亦養成も出來ることになる。即ち、年末の賞與、月々の勤勉手當、家族手當、昇給其他の方法で、相當に待遇も出來る。亦、住宅の建設貸上も出來る。何れにしても、勞力の保持が出來ることが、營業上の利益である。之が爲に、相當の突貫工事、期限付の工事も安心して出來るし、勞務供給組合員たることも出來る等幾多の利益が獲得される。尙、經濟的に大きくなる、資本が豐富になる結果、個人企業で購入出來なかつた工具及び機械を購入し得る。仕事の能率を倍加することも出來るわけである。

E　工事斡旋と材料斡旋と組合

將來、組合强化が一層徹底し、組合以外に技能者なしと云ふ所まで行けば、大きな工事の積算に勞務者の見透し其他について、組合の本部に紹介あり、その斡旋、援助を求めて來る樣になるに相違ない。組合にはそれだけの資料と調査をしてなければ出來ないが、之は可能であると思ふ。

甚だしき進展は、來年度の官廳の工事總量を大體計算し、之に對する勞務技能者の豫定、即ち足留めも出來るし、尙地方組合への援助も出來て、工事の技能工割當計畫も出來るわけである。進んでは、技能工の配給計畫をやり、之を斡旋して、組合員にその責任を負擔せしめることも出來るわけである。勞務調整令の完璧は此處まで來れば、申分ないわけである。

次に、工事用材料の配分、製造量の制限も出來るわけで、統制された範圍内での仕事を、國策上より割當て、それだけの生産量による許可工事の

遂行の完全を期すことも出來るわけである。

中々困難なる問題ではあるが、將來、組合の統制、總力を完全に發揮させれば、出來るわけである。組合をして其處まで發展せしめるには、其處に法的根據を考へねばならないと思ふが、之もやがて出來るのではないかと思ふ。組合を通じての技能事實、技藉（戸藉に對して、技能者の能力履歷其他を明記したもの）を何時でも持ち、その證明書を出せば、その證明により、その人の賃金も決定して、何處でも使用される處まで進むに相違ない。國民登錄たる勞務手帖だけでは、技能者には不滿に相違ない。技能生活の中心、指導啓發者としての組合の發展は、現在理想的の技能界を指導する。特に自由勞務者として、中心なき社會に中心を與へるのは、この方法で、現に各組合とも時局對策、教化、生活と云ふ方面に全力を擧げて努力して居るから、將來そこまで運ばれるに相違ないと信ずる。

終りに、技能界の組合は、過去の親睦第一より生活へ、時局突破へ、その方向の大轉換をなしつゝ大努力、血みどろの大進軍を開始してゐる。當局も亦、之を指導し、その啓發に當つてゐる。

尙、個人企業を單位とした技能者の業者には時局突破に、企業合同をなし、大東亞建設への準備に取りかゝつてゐることは、建築界の爲に喜ばしいことである。技術界は時局突破に來るべき時の準備に血みどろの進軍だ。一方建築技術界はどうか、これだけの轉換ありや、更に建築協會の時局轉換に何等かの暗示があると思ふ。紙面だけ目前の事象を述べて筆を擱く。（昭和17.4.3　脫稿）

（筆者は大阪府立今宮工業學校教諭）

「南方事情を語る」座談會記事訂正

三月號南方事情を語る座談會記事中、18頁2段、上より13行目　齋藤氏とあるは速記の際の誤記にて、話者は　深山氏（醫博大阪市立西診療所長）でありますので訂正致します。

紫烟室御投稿に就て

○先般御投稿をお願ひしました處、御賛同を賜り其の後も續々執筆の御内意を受け愈々充實して來まして、今月の紫烟室は異彩のある賑かなものとなりました。

○今後も是非御投稿をお願ひしたゐと存じます、尙執筆御申越次第原稿用紙お送り致します。

○掲載は順に致します爲、都合で遲れる事があるかも知れませぬが御諒承願ひます。

新興木構造の理論と實際　VI

宇賀神行一

VI　部材の刻込と組立に就て

（A）刻　込

新興木構造に於て骨組を形造る部材の數は複雑多岐に亘るので、この刻込は普通木構造と可成り趣を異にして居る。

細少なる部材を結合し、渾然一體としての骨組を作るこの構造に於て、若し一部材に1m.mの不同が在つても多數結合した場合の結果は豫想外に影響が大きい。又2面乃至4面6面剪斷と云ふ繼手や仕口を處理しなければならない場合、鐵骨と違つて木材は厚さが非常に嵩むので、ボールト孔の不同は實に苦しむのである。

更にヂベルを挿入したり、鐵板のガセツトプレートを用ふる場合の困難は作業手のみでなく、これが監督に當つて居る者にも實にはがゆく思はれる。筆者の經驗からしても組母屋をトラスへ接續すべき時、鑿孔の不同から宙間作業の爲め一個所のボールト留めに1時間以上も費したことがあつた。

新興木構造に於て使用する材料の多くは、その斷面が矩形で、比較的纖細なる爲め、木材の通弊として割裂節、樞捻纖維切れ腐蝕等の影響を考慮に置かねばならない。製材上から第80圖の様な反りの起ることは周知の處であるが、構造用に供するものは充分此の點を吟味し、例へば束材に2枚の矩形斷面を有する弦材を接合する場合等、木表と木表を束材に對間的に配することが好ましい。

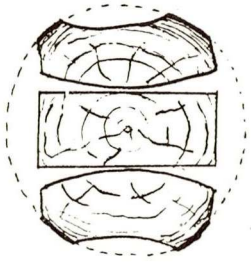
尙斷面決定の折、所要部材は成可く角材よりも矩形斷面材即ちごひら材を選ぶことがボールト接合上利點が多い。然し矩形斷面材は前述の様な木材の通弊に左右せられ易く、著しく格點間の距離の長い應壓材として矩形斷面材を用ふることは避けねばならない。止むを得ない場合は中間に適當なパツキングを挾み固定する必要がある。

更に部材刻込に先立つて、配材上考慮す可きことは木材の末或は元の使用法である。同一木材の强度も末と元とに於ては相當の差異のあることは云ふ迄もない。共處で出來る限り交互に挾み合せ繼手等は千鳥に第81圖の様配材することが理想である。

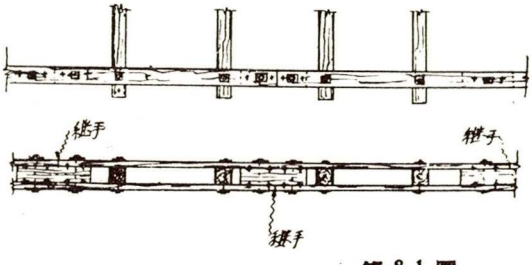
ボールト及ヂベルを用ひた構造の場合、最も危險な點は附近にあるので、この附近に甚だしい纖維切れがあつたり、節の集中したもの、割裂や腐蝕のあるものは好しくない。

從來の製材法は成可く多量に製材せんとして根曲りや節を考慮せず、所要斷面を得て居たのであるが、新興木構造に使用する木材は飽く迄も忠實に材料の吟味が必要で、根曲りに依る纖維切れ、割裂又は節等に依る最影響を未然に避けなければならない。

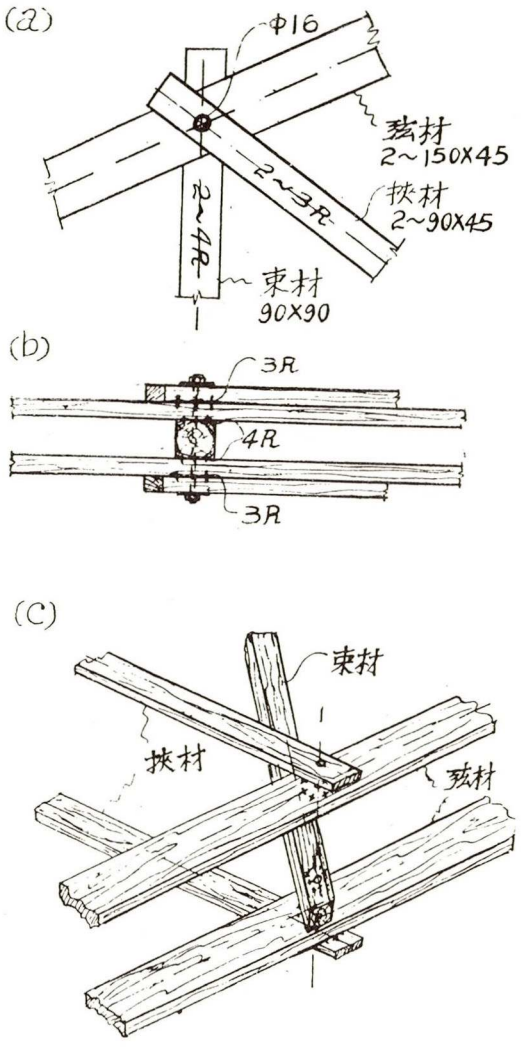
第80圖の如く丸味の材も木裏を表面に出して使



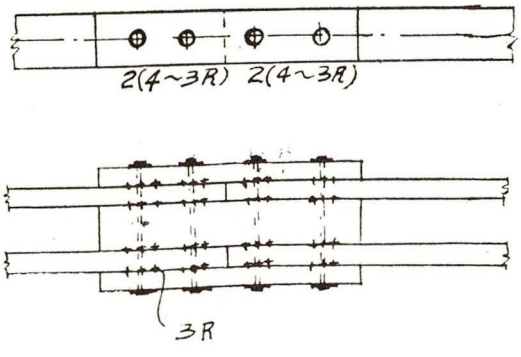
第80圖



第81圖



第 8 2 圖



第 8 3 圖

用すれば、ヂベル少の數い部分には充分使用に耐へるから、不合格品として摘出する必要もなからう。

構造上單一材の最少斷面は獨逸法規では完全斷面（Volle Querschnitte）が 60 cm^2 以上又は最少徑 6 cm以上たるべしとの規定からしても、先づ此の程度を理想とし、新興木構造の各所に行はれる複合材に於ては、各部材の斷面積が最小限度 36cm^2 以上であることが望ましい。

次に刻込の實際に就いて記述して見よう。先づ設計圖の記載上特に注意し度いことは斷面圖又は詳細圖、矩計圖等に正確な中心線の記入である。これは偏心力の起生を防止すると同時に、新興木構造が從來の木構造に依る納まり第一主義の手法と全く異つた手法に屬する故である。

壓入式ヂベルを使用する場合の記載方法も一々汎例を擧げず、第82圖の様に中心線を合致した處に格點を設けることは鐵骨構造の場合と同様に取扱ふ可きである。

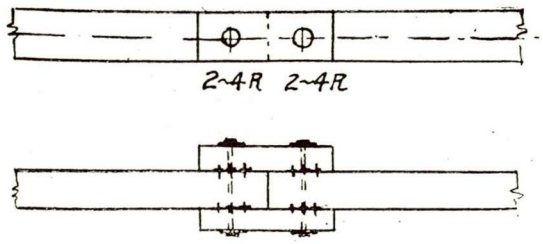
（a）圖に於て束材に對する書入れ 2 ～ 4 R とは 4 個のヂベルが材の兩面にあるのを示し、挟材に對する書入れも同様で、結局束材と弦材との間には各 4 個、挟材と弦材の間には各 3 個、合計14個のヂベルを此の格點に使用する譯である。又第83圖の様な材の繼手に於ては 3 個のヂベルが 4 面に挿入され、且それが片方に就て 2 組あることを示して居る。

第84圖はガセツトプレートを材の兩面に當てゝヂベル接合をする場合、ヂベル 4 個宛 2 面で 2 ケ處計16個のヂベルを用ひて、ボールト接合をなす一例である。

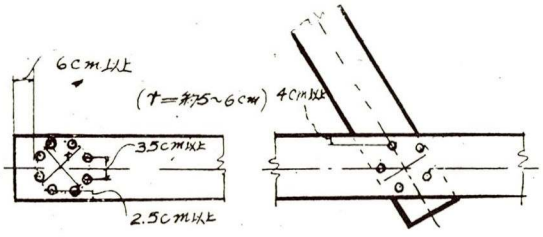
設計圖に基いて先づ現寸圖を作ることが刻込の第一手段である。

造船に於ける肋骨の現寸圖は實に煩雜なものとされて居るが、決して此の工程を省くことの出來ない様に新興木構造に於ても絶體的條件と云はれよう。現寸圖は平旦な板張りの上に通例對稱的な骨組は其の半分を圖面に基き精確に墨出しをして行くのである。Rの部分は尺杖に錐を差入れ、コンパスとするのが便利である。

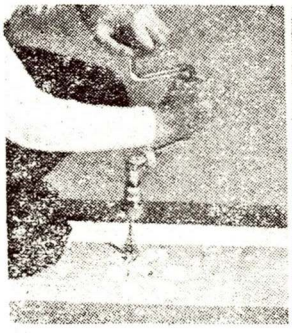
次に型板を取るのであるが、型板には板割程度の厚みのものが適當である。ボールト孔の部分に



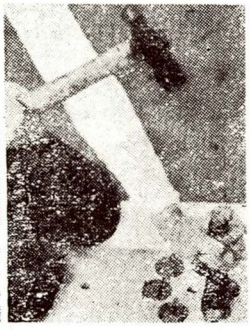
第84圖



第85圖



第86圖



第87圖

は錐をもみ込んで中心點を出すのである。處が筆者は型板に所要ボールト經の孔を穿ち、その儘墨出しをして大失敗をした苦い經驗を持つて居る。これは4面6面と云ふ結合に於てボールト孔の不同が出來、前述の様な不手際な作業になつたのである。

型板にはボールト孔の寸法、ヂベルの個數及其の位置、接合方向や部材の名稱又は其の員數を書き記して置く必要がある。

トラス梁に於ける型板を作る場合は起（むくり）を考慮に置かなければならない。普通起は梁にかゝる積載荷重の計算に應じ、$\frac{1}{600}$～$\frac{1}{800}$程度で構造及用材に應じ適當に配慮すべきである。

組母屋又は小屋筋違等も一々現寸圖を引き型取りをすることは出來上つた骨組に歪を生じしめないし、よしんば多少の歪があつても、之を矯めるのに樂である。同一部材を規格化して多數墨出しをする場合は亞鉛鍍鐵板を使用して型板を作るのも一方法である。長さの著しく長いものも適當な補强をした型板を使用した方が誤りがないと思ふ

扨て材料の割當が出來たなら型板を用ひ、墨出しであるが、これには是非共罫書針を用ひ度い。何故かと云ふに、竹筆を用ひたのでは、その厚み丈け增すだらうし、多人數で思ひ思ひに墨出しゝたのでは全く不規格なものになつて終ふに違ひない。墨出しされた材料の切取りは、材端に穿たれたるボールト孔の直徑の 9d 以上、又ヂベル接合をなす時は、第85圖の如く、材端に挿入せられたるヂベルより些く其6cm 以上間隔を置いて切り取る様にし度い。

新興木構造に於ては努めて斷面を缺取らざることが理想であるが、納まりの關係から相缺き、座彫り又は一面を缺き取つた渡腮等、場合は適當な補强方法を構じなければならない。然し土臺に密着する柱の元に短枘を作ることは差支へないし、眞物筋違や燧材を大入流枘ボールト留めとなすことも理想である。單一材たる土臺や桁、母屋等の繼手に追掛大栓打とすることが好ましい。

次に部材に穿つボールト孔は普通ボールトの直經より2mm～3mm大きな孔を作る方が組立てに當つて困難を感じない。然しボールトのみを以て接合する場合は、成可く小さくすることである。

經の大き材料に孔明けするには、電氣ドリルを使用した方が、孔の周圍が清淨である許りか、比較的眞直に穿たれる。

鯱、圓盤ヂベル、輪形ヂベル、樽形ヂベル、サツシユヂベル等を用ひる場合は、嵌込み孔を正確に適合せしめないと、反つて接合効果が劣ることになる。

壓入式ヂベルを用ふる場合には、第85圖の如く材端から少なくとも 6 cmの餘裕を附けないと、材が割れて耐力が著しく殺減せられることになる。又材緣との間隔も同様な理由で、2.5cm 以上離す必要がある。但しトラスの弦材に於ける場合の如き材の纖維に斜の方向に力が加はる時は、材緣との間隔は 4cm以上引離してヂベルを打込むことが望ましい。

壓入式ヂベルはボールトの周圍に、半經5cm～6cmの附近が適當な位置とされて居る。壓入式ヂベルの打込み方法は、ヂベルに依つても相違するが大體鍔の兩方向に爪の出たものであるから、其の鍔を座彫する必要がある。工作の樂な方法は同一型の材料を平に枕をして並べた後、逐次第86圖の樣に座彫りをして行き、更に第87圖の如くヂベルの鍔にパイプを當て、其の上から大玄能で打込んで行く。此の場合、墨の位置に節や割裂、丸味がある時は、適當に之を避けて行かねばならない。

壓入式ヂベルの打込みには出來得る限り2～3回で打込まないと、爪の孔が弛んで所期の耐力が得られないことになる。

ヂベル工法に次いで釘付工法に依る部材の割込であるが、釘付工法は俗にげんぞうと稱して、兎角現場では輕視せられて居る。然し釘付工法の刻込は嚴格に强度を得ようとする場合には、部材の密着如何が重大な意義をなして來るのであるから、墨付けから切り取り迄入念な施工を要求せられる釘付梁等に於ける斜繋材の角度、束材の長さ等充分注意し度い。

尙時局柄、金物節減の建前からして部材の厚みは可及的に薄いものを數多く配置する方が釘の目方も減じ、一體としての强度が得られる譯になる

角度に切取る場合は、努めてはたを用ひて數本の材を型板と共に締め付けて鋸入れをするか、自由曲で正確な墨出しをすると、比較的密着度のよい部材が得られる。又釘接合に使用する材料は角通しの良いものを選び、釘は木材の厚さの1/6～1/8程度の長さが必要とされて居る。

次に膠着接合を採用する場合の刻込であるが、筆者の試みたラーメンに依る骨組の一例からすると、次の理由から施工は非常に困難と思はれた。

① 膠着劑に3千本と稱する膠を用ひたが、膠そのものが比較的高價である。
② 接合面の部材を一々削仕上をしても捩れや反りがあつては完全に密着しない。
③ 乾燥する迄長時間壓力を平均に加へるのが困難である。
④ 加壓が不足すると、膠の溜りが出來て、接合効果に影響する。
⑤ 乾燥を速かならしめんとしてフオルマリンを用ひたが、家具類と異り部材が大きいと反つて効果が悪い。

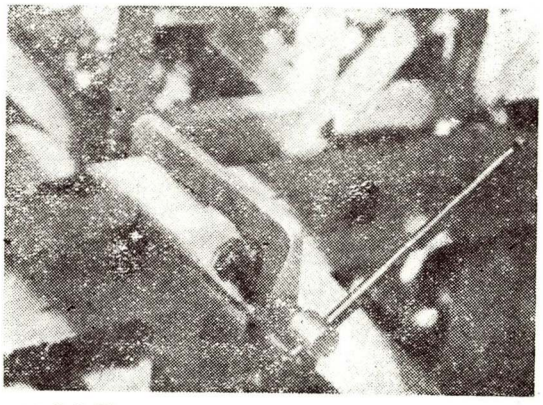
此の樣な理由で膠に代る格安で、理想的な接着劑が發明せられざる以上、先づ現場工法で構造材を膠着に依り接合を試みることは不可能ではなからうか。然し獨逸では着々實施せられて居る處からして、今後吾國でも一段と研究を要するテーマ



第88圖

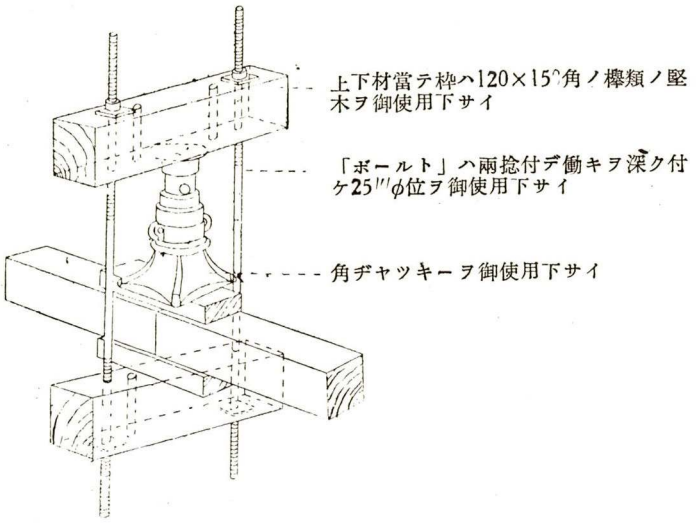


第89圖



第90圖

「ヂベル」締付用枠見取圖



第91圖

と思つて居る。

（B）組　立

組立に先立つて刻込を終つた部材の員數並に調材方法、又ヂベルの打込に誤りなきか、肝心の部材に缺點なきか等の檢査が必要とされて居る。

次に組立に移るのであるが、組立のプランには部材の儘現場に搬入して組立る方法と、又豫め鐵骨の様に所要部分を組込んで、現場に搬入する方法とがある。

特に重量の嵩む骨組は豫め建て方を考慮に置いて組立てないと、往々施工の中途で失敗を招くことがある。骨組を組立てるに適當な位置は建方の項に詳述することゝし、ヂベルとボールトを用ひる普通トラス梁又はトラスの組立ては第88圖の如く直立せしめて行ふ場合と、第89圖の如く平にして組立てる場合がある。

構造の大きなものは、その下端が地盤に餘り接近して居ては、ボールトが締め付け難いから、馬（高さ40cm程度）を飼ひ、此の上に部材を架構の型に列べ、組上つた構造物に歪のない様に馬の高さを平面に直すことを忘れてはならない。

馬の上に符號に合せ、既にヂベルを配した部材を順次重ねてボールト孔にボールトを通し、スパナーで締め付ける。此の際部材を强打する様なことは避けないと割裂を來し、ヂベルを配する意味がなくなるので、第90圖の様なシヤコマン、又は第91圖の如くヂヤツキ等で締め付けることが望ましい。

ボールトは捻子を充分長く切つた兩捻子のものを用ひると、部材の接合部を兩面より平均に締付けられる故、座金が減込でも尙隙間があると云つた無理が生じないのみか、往々捻子山を破壞する危險も少い。壓入式ヂベルを使用する場合のボールトの總長さは剪斷面數とヂベルの片側の爪の長さの倍數をボールトの働きとすべきである。ヂベル接合を採用するには、豫め座金をボールト直徑に應じ、適當なものを撰擇すべきことは前にも述べた處であるが、概して大きなものを使用する。此の爲め座金を當てスパーナでも樂に締付けられる場合もある。スパナーの柄を長くすることが、著しく締付けを樂にすることは云ふ迄もない。其處で60cm～75cm程度の鐵パイプをスパナーの柄に差し込んで組付ける方法も行はれて居る。

ボールトの經が種々異つて居る部材の締付には自動車工具にある様な組桿スパナーや、スリーヴスパナーを用ひると能率的で、筆者は特別註文のフリー付スパナーを使用して居る。數ケ所のボールトが並列して居る繼手等の場合、之等のボールトを一様に締付けないと、締付けられず、捻子山を破壞して終ふ虞れがある。兎角捻子山を馬鹿にして終つた程始末に惡いものはない。戻すにも戻されず、其の儘に放置し勝のものであるから、ボールト締めは充分合理的にし度いものである。

新興木構造に於ては部材の厚みが一定して居ないものを極めて合理的に納めて行かねばならないのであるから、トラスの弦材と束の挾み方等は、その設計に於て熟慮する必要がある。

製材上の杜撰から施工の實際に當つては種々な難題も起こる。これが鐵鋼の原材と違つて、木材が自然物であるから、一様な規格品とは云へ、實

に個別的なものと見られる。

同一寸法の材料でも製材が異れば、その木材をガセツトプレート接合せんとする場合は、多少の目違が出來る故、著しいものはその一材を豫めはつてボールト締めを行ひ、充分密着せしむる必要がある。

新興木構造では工場ボールトと、現場ボールトの區別を附し、工場ボールトは建方に於て再ボルト締付の必要なきまでに地上作業を入念にすべきであらうと思ふ。刻込組立に就て述べ來たれば際限もない故、此の點にて留め、次號に於ては建方の實際に就て述べることにしよう。（つゞく）

（筆者は日本ライト建築株式會社技師）

菖蒲池厚生住宅展地鎭祭

時　3月10日午前10時30分——午後3時
所　菖蒲池現地並新溫泉
出席者　來賓
　關急　竹內　孝氏（建築課長）
　同　鈴木角一郎氏
　同　岩佐信也氏
　學園　岡部顯則氏
　　中島　氏
　駐在所　岡田　氏
　出品者
　大林組　安部重藏氏　外三名
　竹中工務店　平塚鎗吉氏
　　小林三造氏　外三名
　清水組　木原佐吉氏
　　油谷清治氏　外三名
　藤木工務店　土佐義雄氏　外三名
　岡本工務店　岡本新次郎氏
　　山中茂一氏　外三名
　木村組　矢野義夫氏
　　大森一太郎氏　外三名
　双星社　津山達夫氏　外四名
　上田組　上田亭治郎氏　外四名
　協會側
　　井上記念事長、幹事長
　　松本　同　、副幹事長
　　中西住宅展幹事長
　　小林幹事
　　松久保幹事
　　大和書記長
　　戶川書記
　　山形書記
　　森島書記

1. 午前10時30分—同現地集合の土地元氏神社の神官により地鎭祭擧行
1. 神官により供饌、修祓、祝詞奏上後中西住宅展幹事長により鍬入れの式あり終了後來賓、出品者、役員、玉串奉典　井上記念事業幹事長挨拶、出品者代表竹中工務店平塚鎗吉氏の祝辭あり、神官撤饌後閉式
1. 夫れより一同新溫泉に於て折詰を開き中食
1. 一同歡談の後午後3時散會

建築聯合協議委員會の經過に就て

幹事 中澤誠一郎

1. 成り立ち

滿洲事變を經て、更に支那事變の處理に當つて居たわが國は、昭和14年9月第二次世界大戰の勃發によつて、眞に有史以來の大試練に直面するに至りました。

既に昭和6年の滿洲事變の發生前後から、國內に屢、次の事件に當面してゐた我國は、こゝに世界歷史の一大轉換に際會し、皇國の國是を完遂するために庶政百般に亘り、急速に根本的刷新を加へる必要に迫られ、昭和15年6月の近衞公の新體制樹立聲明、同年8月第二次近衞內閣による基本國策要綱の發表によつて、所謂新體制樹立の發足となつたのであります。

從つてわが建築界に於ても、この國家の動向に沿ふべき建築の體制刷新に關する熱心な要望が起り、各方面にこれが研究或は運動が起つたのであります。此所に於て建築學會は昭和16年2月日本建築協會、日本建築士會、建築業協會の三會に對し、時局に對應すべき建築體制に就て協議すべき委員會の設置を提案し、三會の贊同を得て茲に建築聯合協議委員會の成立を見たのであります。

2. 設置要綱と構成

建築聯合協議委員會の設置要綱

（1） 時局に對應する爲建築上の體制につき研究協議する事を以て目的とす。

（2） 差當り建築學會、日本建築協會、日本建築士會、建築業協會の聯合とし、聯合各會より4名づゝの委員を選出して委員を組織す。
委員會は各會選出委員總數の半數以內の數の委員を囑託して組織に加ふることを得、又委員會は更に建築關係の會を聯合に加ふることを得。

（3） 委員會の經費は各會よりの支出金を以て之を支辨す。

（4） 委員會か研究協議の結果は之を聯合各會に報告す。聯合各會は之を尊重すべしと雖も之に拘束せらるゝことなし。

斯くして昭和16年3月20日第1回委員會を開催し、委員會はその後2回に亘り新に委員會を囑託した結果、現在の委員氏名は下の如くであります

日本建築協會選出委員

井上新二君、片岡安君、鈴木一幸君、竹腰健造君

建築業協會選出委員

鈴木　甫君、武富英一君、島田　藤君、富永長治君

日本建築士會選出委員

石原信之君（前、黑崎朝男君）中村傳治君、松田軍平君、山下壽郎君

建築學會選出委員

北澤五郎君、佐野利器君、內藤多仲君、中澤一郎君

委員會選出委員

伊藤　滋君、清水　一君、堀越三郎君、吉田安三郎君、新名種夫君、藤田金一郎君、鎌田隆男君、小林清周君

3. 委員會の經過

昭和16年3月20日第1回委員會を開催し、互選の結果、佐野利器君委員長に當選し、委員長の指名によつて中澤誠一郎君幹事となり、更に委員會に於て新たに委員を囑託することゝなり、人選は委員長に一任し、これにより囑託された委員は上記の通りであります。

第2回は4月12日、第3回は5月17日、第4回は6月7日、第6回は7月5日に開催し、此の5回の委員會を通して、各委員より建築界內外の時

局に關する動向の報告或は意見の開陳があつたと共に、之等に對する究研討議を續けた結果、建築界の新體制考究の方向について大綱的に一つの見解に到達したと見られ、第5回委員會に於て委員長より從來の各種意見を分析且つ綜合した委員會の今後の動向に關する意見の開陳あり、協議の結果、新たに建築各部門別に其の具體的方策竝に之れが實行方法を研究するため後に記す様な專門委員會を設置することになつたのであります。專門委員會委員の詮衡は委員長に一任となりました。

斯くして其後は專ら各專門委員會に於て、後に記す様に部門別に研究が進められた結果、先づ第一部會より「建築企畫中樞機構の設置」に關する報告の提出があつた。同年11月5日第6回委員會を開催して右報告を審議し、相當字句修正の上これを可決しました。更に翌17年1月に至り、第1部會より曩に報告した「建築企畫中樞機構の設置」に關聯する問題として「中央官廳に於ける建築行政機構の整理、統合」「地方廳に於ける建築行政機構の一元化」「建築行政の運營上必要なる諸方策」第2部會より官廳營繕並にその他の營繕に關する體制に就ての研究報告、第4部會より「建築施工新體制要旨」の提出がありましたので、本年2月12日第7回、2月24日第8回、委員會を開催して、之等の報告を審議し、一部修正の上これを可決しました。

尙各部會よりの報告成案は、審議決定の都度中間報告として聯合各會へ報告し、他日全部會の成案完成を俟つて適當に取纒めた上、更めて報告する事にしたのであります。

又前に記した第1部會の報告成案たる「建築企畫中樞機構の設置案」は、その後建築學會よりの提案によつて、四會連名を以て昭和16年11月25日附で、內閣總理大臣及び企畫院總裁に建議しました。以上が今日までの委員會の經過であります。從つて委員會は更に第3部會、第5部會よりの報告提出を俟つて、之れを審議すべき姿勢にあるのであります。

4. 專門委員會の經過

專門委員會並びにその委員は下の通りであります。

第1部會

建築行政機構に關する事項

伊藤憲太郎君、大村巳代治君、菅野　誠君
小林隆德君、武富英一君、○中澤誠一郎君
中村傳治君、堀井啓治君、村野藤吾君
△吉田安三郎君

第2部會

官廳營繕並にその他の營繕に關する事項

太田和夫君、川口一二君、○北澤五郎君、
小林清周君、下元　連君、△田中德治君、
田中正義君、王眞秀雄君、內藤亮一郎君、
藤村　朗君、山田　守君、横山不學君
桐本楠雅君（後に追加）

第3部會

建築設計監督業務に關する事項

鈴木和夫君、竹腰健造君、圖師嘉彥君（中途解囑）土岐達人君、東畑謙三君、西村好時君、橋本文夫君、堀越三郎君
△松本與作君、○山下壽郎君、石本喜久治君、前川國男君、小林秀彌君（3名後に追加）

第4部會

建築施工組織に關する事項

石井　桂君、△大西幸雄君、鎌田隆男君、
櫻井良雄君、○島田　藤君、清水　一君、
富永長治君、西澤藤生君、萩村金一郎君、
藤田金一郎君、柳瀨　駿君

第5部會

建築技術家團體に關する事項

井上新二君、伊藤和夫君、△伊藤　滋君、
市浦　健君、熊谷兼雄君、○小林政一君、
新名種夫君、中西六郎君、坂　靜雄君、二見秀雄君、武藤　清君

○印は主査　　△印は幹事

（1） 第1部會の經過

第1部會は、その研究課題「建築行政機構に關する事項」の研究着手に當り、先づ建築全般に渉る新體制に就いて檢討し、ついで本部會の研究目標を審議した結果、次の五項目を取り上げることにしたのであります。

建築企畫中樞機關の設置

各省間の建築行政事務の整理、統合
現行建築監督行政の改革
地方廳に於ける建築指導監督事務の一元化
造形技術としての建築に對する統制

そうして、その考究に當つては、各事項共實現可能性があり、然も相當突き進んだ改革案を得ることを目標とすることに申し合せたのであります斯くして回を重ねること14回に及び、建築行政の意義竝びに範圍より、改革の必要性、各機關の管掌すべき事務の限界と機構の形式等を審議しました。

更に造型藝術としての建築に對する統制問題を中心として、統制の要否竝びに方法につき、第3部會と共同審議をした結果、統制の必要性竝びにその方法論として造形藝術の審議機關の設置及び建築設計者團體設置に就て一應意見の一致を見、その細部的事項に就ては第3部會でこれを研究することに申し合せたのであります。尙建築企畫中樞機構の設置問題に關しては、その性質上特に部會連絡會議（各部會主査及幹事）に附議して各部會の意見を徵しました。

斯くして昭和16年10月「建築企畫中樞機構の設置」に關する翌17年1月「中央官廳に於ける建築行政機構の整理、統合」「地方廳に於ける建築行政機構の一元化」「建築行政の運營上必要なる諸方策」に關する報告を提出したのであります。

（3） 第2部會の經過

第2部會は、その研究課題「官廳營繕竝に其他の營繕に關する事項」の研究方法として、先づ各營繕機關の現行の情態を調査し、次に營繕機構竝に營繕業務の刷新、整備に關し各委員より私案を提出し、之等の諸案を整理、審議して綜合的な方策を求めることにしました。かくて各委員より提出された主な案件は次の通りであります。

中央研究機關を設置し、建築に關する各種類基礎的調査研究を行ふ事。
營繕中樞機構を設置し、全國建築に關する企畫並に統制、技術員綜合統制、建築施設の綜合的管理統制をはかる事。

官廳營繕に關しては

徹底的に一元綜合する案。
省を單位として省內營繕を統合し、特に共通的にして規模大なる造營物等は一機關に取纏め實施する案。
同樣にして設計竝に施行に關してはこれを民間に委讓する案。

地方廳の營繕を中央の統制下に置く事。
民間營繕もなるべく統合統制し、特に技術員の配置に關しては中央の統制に置く事。
營繕は施設の維持管理事務を行ふべき事。
會計法規を改正し隨意契約制を採り得る途を講ずる事。
國土的、歷史的主要造營物の審議、指導、監督をなすため造營審議會を設置する事。
規格統一竝に設計簡易化をはかり、工事契約は設計大綱主義を採ること。
技術員をして技術機關を管掌せしむる地位を與へるの途を講じ、一面永年專門技術の任に在り得るの制度を設くる事。

之等委員の諸提案を審議し、整理、集約した結果下の四項目に取纏めて審議立案に務めました。

建築中樞機關設置に關する件。
官公民營繕機構の統合、統制竝に整備に關する件。
營繕事務是正竝に簡易化に關する件。
營繕機關の管掌等に關する件。

上記の內第一項は本部會案を回附して、第1部會に於て成案することゝし、二、三、四項目に就いて審議を進め、昭和17年1月これを委員長に報告しました。此の間本委員會を開く事6回に及びました。

3. 第3部會の經過

第3部會はその研究課題「建築設計案業務に關する事項」に就て如何なる研究項目を採擇すべきかに極めて多くの時間と論議を費したのであります。それは建築の設計と云ふ事を考究することは即ち建築の本質論を堀り下げることになるからであります。斯くて愼重討議の結果、下の樣な項目により審議することにしました。

建築設計の本質を檢討し、建築文化及び建築新體制との關聯に就ての考案。

民間設計監理部間の組織化と其の動員態勢の整備。

建築物の造型文化的立場より見たる新體制。

斯くして之等項目に關する各委員の私案の提出或は又特別委員會による原案の作成等をなし、今日迄に委員會を開催すること16回に及びました。報告原案の作製を了し、近く報告提出の運びに立ち到つております。

（4） 第4部會の經過

本部會はその研究に着手するに先ち特に研究態度として

實行見透しのつかぬ理想案を排すること。

現實を固執せず高所よりの達觀を失はぬ事。

委員の意見は自由にして外部に於ける立場と無關係なることを申し合せました。又特に建築業界に於ては既に現實の問題として種々新體制に關する事實が行はれてゐるために、一應之等の事實に關する報告を聽取しました。斯くてその研究課題「建築施工組織に關する事項」の審議に就ては、直ちにこれを具體的に進行させるために、各委員の私案提出を求め、之等を遂次審議の上、下の通りの協議要項を採擇しました。

建築施工業者の再編成。

目的、組織、機能、事業。

再編成されたる建築工業組織の運營

下請制度、勞務組織、資材、運輸、金融、適正價格の決定方法

新建築工業組織より外部に對する要請

規格統一、技術者再教育、片務契約是正官界新體制の確立、生活保證制度の確立、其他

建築工業施工の工業化、建築技術の確保向上

爾後之等の項目に基いて協議を進め、關連項目については、その都度協議を繰返したる結果、報告原案を作製し、これを審議すること4回に及び昭和17年1月委員長に報告を提出した。此の間開催した委員會回數は11回でありました。尙本部會に於ても、建築中樞機構の設置を要望し、第1部會と連絡して、これの立案を全部會に委任しました。

（5） 第5部會の經過

第5部會はその研究課題「建築技術家團體に關する事項」を研究するための順序として、次の様な目次を採擇しました。

我が國再編成の方向を見定める。

國家機構內に於ける職能團體の位置と使命職能團體としての技術者團體の在り方。

建築技術家團體の在り方。

現存建築關係の內容。

新建築技術家團體の組織とその設立方法。

本部會が特に此の様な順序を撰んだのは、第一に新しい機構の考察を建築家と云ふ立場からのみ行はづ、廣く國の機構の一部としてなすべきであると云ふ理由、第二には團體と云ふものゝ存立意義が今後非常に變革されることが明かに豫見されるからであります。斯くして審議を進めた結果

團體とは官民を通じての國家機構の一翼たる性格を責任を持つべきものたること。

建築技術家團體とは、今後遂次整備さるべき諸々の職域組織に對して、之等を橫に貫き、之等職域組織の活動に側面的に協力すべきものたる事。

に見解の一致を見、此の見解に基いて新建築技術家團體の組織內容を工夫すると共に、現情から將來の體制に達するための具體的方策の考究に努めたのであります。本部會の委員は、その約半數が東京在住であり、半數が關西在住であつた爲、第5部會としては今日迄3回を開き、東京、大阪に於て各別に委員會を開き、時々連絡を計つて來たのであります。漸くその成案を得るに至り、近く委員長へ報告を提出する運びであります。

以上が建築聯合協議委員會並びに同專門委員會の經過の概要であります。建築聯合協議委員は各專門委員會の報告成案をその都度一應これを審議可決しつゝありますが、更に全部の提出を見た上、之等を綜合的に重ねて審議すると共に、それ等諸案の取扱ひを考究決定することにならうと思ひます。

新體制部會經過報告

日本建築協會

大東亞戰下其の戰爭目的完遂の爲、諸種の組織は改編自由主義機構より統制機構に改編され着々軌道に乘り進みつゝある大轉換期に、獨り我が建築界のみが舊套を守り、時流に遲れるべきでなく國策に應じて建築界の新體制を確立すべきであるとの見地から昨年8月12日、進んで此の新體制問題の研究に入り日本建築學會、日本建築士會、建築業協會、日本建築協會の4會本會の下に協議を進めしが專門委員を設け更に深く研究する事となり本會も即應する爲下記の8部會に別ちて、各主査、幹事、委員、諸氏を依囑して、以來連日協議を重ねつゝあつたが、漸く各部會共結論に到達し、既に答申案提出せる部會あり、答申案提出の爲案文を練りつゝある狀況である。

下記の通り三部會の決定答申案及其の經過を記して、本協會新體制部會の經過報告とする次第である。

新體制部會

第1部會	建築行政	第5部會	團體
第2部會	營繕	第6部會	學校
第3部會	設計	第7部會	建材
第4部會	施工	第8部會	設備

第3部會報告

總括目標　建築を（早く）（安く）完成する事

第1章　對內的事項

1. 設計と施工の連關問題に設計家としての立場を檢討
   ○建築事務所は建築主の信賴委任を受け從來の設計監督事務は勿論施工完成に至る迄建築に關する一切の行爲を代理するを以て業務の本體とす
2. 豫算及見積問題
   ○現狀は餘りに微細に亘る嫌ひあり、依て此點尙研究の餘地あり
3. 契約の問題
   ○契約は可成簡易にし、所謂建築設計者の權限を擴大する事
4. 監督方法
   ○監督員の數を減じて能率增進を計り建築設計者の權限を擴大する事
5. 設計圖の程度
   ○可成簡略にして必要止む得ざる程度となし建築設計者の權限を擴大する事

第2章　對外的事項

1. 建築の認可許可事項を迅速にする事
   ○當該官廳に建議する事
2. 手續の簡易化
   ○（上記に同じ）
3. 設計業者を地方廳に於て認定する事
   ○國家的に建築士を公認するを主旨とするも不取敢地方廳に於て之を認定する事
4. 材料の配給の豫想を知らしむる事
   ○工事進捗の都合上配給に關する大體の豫想を知るの必要ある事
5. 非常時下建築諸法規の改正補正の件
   ○建築諸法規の全般に亘り臨戰的に檢討する事
6. 官廳營繕方法の改善
   ○能率增進上民間設計業者の業務を參考とし其の餘力を民間に善用せしむる事

以上

第5部會報告

1. 日本建築協會第5部會に於ては建築新體制に關し檢討を重ねつゝあつたが、今日は既に技

術院も出來て社會狀勢に相當の變化を來たしたのであるが、技術院の現在は航空技術に重點を置いて居るが技術院と各技術者團體との將來の關係も略察知出來る時代となつて來た

1. 一方建築界に於ては技術以外の極めて複雜な諸問題が複輳して來た。建築勞働者の問題、建築資材の問題。國家新體制に對する建築界の對應問題等にてある。此等の諸問題は單に建築の技術者のみならず、建築業、材料業設備業、等建築關係の總ての者の結合協力によつて考究せらるべきものである。

又玆數年來建築技術者丈の團體では對社會的に微力であつて、此等建築關係者の總てが一丸となつた强力な團體の必要である事を一般が痛切に感じて來たのである。

1. 將來の見透しも略付いた今日にあつては、建築技術の研究團體と建築の對社會問題を取扱ひ翼賛奉仕する團體とは別箇の二つの團體とし、相援けて行つた方が寧ろ國家目的に添ふのではあるまいか。斯く二つの團體が共分野に專念する事によつて國家社會に奉仕貢獻し得る事には何等變りはない。人的、物的資材の不足に對する場合とか。國家政策上必要なる場合は別であるが、整理統合必ずしも好結果を招來するものとは思惟されない。

1. 學會は50年の傳統を持つ建築技術者の團體であるが、此際寧ろ建築上、材料、設備等の諸團體も其技術的方面の研究は擧げて是れを學會の中に含める事として、技術の研究を學會に一元强化し、學會は技術の研究を以て國家に奉仕し、其代り學術以外の他の複雜な建築の社會問題は技術者及び技術者以外の建築關係者をも網羅した。他の一つの新團體に於て取扱ふ事とした方が適當ではあるまいか。

1. 斯くして技術研究を使命とする團體は現在の學會とし、他の新團體は、新に之れを作るか又は日本建築協會を改組して是れに當てるか何れかの方法を採るのである。日本建築協會は學會と同じく建築技術者の團體ではあるが多年本會の主張に基き建築の社會問題、建築家の團體としての社會奉仕に重點を置き、僅少の定款の改正にて新團體の形態に改組し得られ、相當の資産をも有するを以て是れを利用するが最も便宜であると思ふ。本部の所在地などは別に考慮すればよい。

1. 斯の如き新團體には

イ　行政部門
ロ　營繕部門
ハ　建築士部門
ニ　施工業部門
ホ　材料部門
ヘ　設備部門
ト　其　　他

の諸部門を設け理事、評議員等は各部門から適當數選出する事が良いと思ふ。

1. 此等の部門は一つの獨立した會とし、新團體は其聯合團體とする事にしたい。

第7部會報告

1. 製品の規格統一化

○建築資材の範圍を限定し製品を單純化するや然して建材不足を急速に製産擴充を計る事

1. 企業合同

○命により同種類の企業合同を急速に行ひ製品の檢査をなし適正なる價格を設定する事

1. 配給機構の確立

○軍直接間接工事、官廳工事、軍需工場　工事民間工事、生産擴充工事等に分ち配給制度の是正をなし圓且迅速の配給をなさしむる事

1. 建材局設置

○商工省內に局を置き各府縣に建材課を設け圓滑なる運行を計る事、技術部、建材部、建設部等を設け、株組織とすることも考慮する要あらん。

1. 代用品强制使用及研究援助

○代用品の强制使用を命じ、之等の研究指導及援助方法を講じ時局に對應する事

靜岡市靈域懸賞應募作品審査報告

靜岡市復興に伴ふ寺院復興計畫並に共同墓地新設を含む靈域計畫懸賞に關し、昭和16年10月3日之れが募集を公表したる結果、應募希望者432名に達し、1月31日締切時刻までに應募せられたる數37通なり、之れを應募者住所別に見るに、東京市15通、滿洲國4通、神奈川縣3通、大阪市2通兵庫縣2通、其他岐阜市、名古屋市、廣島縣、朝鮮、靜岡市、千葉縣、京都市、埼玉縣、西宮市、秋田縣、熊本縣各1通にして廣範圍に涉れり、而して昭和17年2月7日より13日迄東京市麹町區三年町社會事業會館に於て審査會開催、審査委員長帝國大學工學部長工學博士內田祥三殿司會の下に帝國大學教授工學博士岸田日出刀殿、內務省防空局施設課長中澤誠一郎殿、同國土局計畫課技師北村德太郎殿、文部省宗教局保存課長青戸精一殿、同課技師工學博士大岡實殿、靜岡市長稻森誠次殿全委員愼重審査の結果、當選者の決定を見たり。尙ほ審査委員會の囑に應じ、審査員岸田博士より審査講評ありたり。

靜岡市復興靈域計畫懸賞競技設計應募圖案審査總評

岸田日出刀

前　言

去る昭和15年1月15日の靜岡市都心區域の大火により名刹實室院の他21の寺院類燒し、多數の國寶を始め夥しき史料、文獻及美術品等悉く烏有に歸し、墓石亦荒廢し去るに至つた。靜岡市はその復興に當り、寺院墓地が市民の信仰に及ぼす影響の大なると防火對策の必要とより、適當なる郊外に靈地を選定して燒失寺院中十ケ寺をここに集團移轉することに決定し、本靈域計畫を一般より懸賞競技の形式により公募する事とした。靜岡市當事者のこの達識に對し、まづ大きな敬意を表したい。

本靈域は都心の東約3粁餘の位置にあり、その一部陵地には市忠靈塔及陸軍墓地の建設が計畫され、東北に近く富士の靈峰を望む景勝の淨地にして、こゝに十ケ寺の寺院、葬祭場並に共同靈園を配し、渾然調和の一靈域を實現せんとするものである。

應募圖案に對する總評

本競技設計に於て應募總數計37といふ數は決して多いとは言へないであろう。然しながら前にも記述したやうに、本競技設計のもつ特異性と、その課題の困難さや、更に又現在時局下の本邦建築技術者界の諸勢情等から推量して、これ以上の多數の應募總數を期待することは些か無理のことかもしれぬ。

全應募圖案を通覽するに、何れも苦心努力の作が多かつたことは審委員として何より欣快に堪へないところだつた。即ち數の不足は質の豊富さによつて充分補はれたものといへよう。本競技設計は特異の性質をもつから、所要の應募圖面を整然とまとめあげるためには、本競技設計に對する並々ならぬ熱意と努力とがまづ何より必要である。應募者各位がその繁忙なる時間を割いて、最大級の熱意と努力とを本競技設計のために盡されたことに對し、審委員として絶大なる敬意を表したい

本競技設計に於て求むるところの內容は二つの要素から成立つ。一は靈域の綜合計畫である、他は寺院及葬祭場の建築設計である。本競技設計の特異性は實にこの點にあり、前者には多分の都市計畫的要素を含み、後者は純然たる建築の造形意匠を主眼としてゐる。これら二者共に優秀なる佳案を求めんとするのが、本競技設計の企圖とるところである。全應募案を概觀するに、これら二要素の兩全をよく成しえたものは甚だ稀であつたことは、本競技設計の特異性と、その困難さをより示してゐるものと思ふ。例へば靈域の配置計畫には見るべき點あるにも拘らず、寺院及葬祭場の建築設計には何を見るに足るものがないといふが如き、又その逆の場合も尠くなかつた。更に細かな點では、寺院の建築はよいが、葬祭場のそれはあまりよくなく、又その逆の場合等も多かつた。

審査に當つては、靈域計畫と寺院及葬祭場建築設計の何れをも同等の價値あるものとし、その何れかに輕重の差を附する如きことなきやう各審査員に於て充分の考慮をなすの用意を忘れなかつた。靈域の綜合計畫に當りては、道路、寺院、葬祭場共同墓地等が各々其所を得て秩序整然、而も全體として渾然調和した綜合計畫が巧みに解決されなければならぬ。その配置計畫が一糸亂れず又整正たるものでなければならぬことは言ふまでもないが、更にその全體と部分との間に微妙な調和と變化の妙とが巧みに表出されてゐなければならぬ。寺院の配置にしても、十ケ寺を唯安易に一ケ所に並列したり道路や葬祭場等も唯これを漫然と配するが如きことは避けなければならぬ。更に墓地は兎角陰鬱なる雰圍氣を醸成し勝ちであるから、之に明朗潤達なる氣分の表出を達成するために、靈域全體の計畫がそれに役立つやうに入念の工夫が凝らされなければならぬ。

寺院（庫裡）及葬祭場の建築設計に當つては、現下の資材節約の主旨をよく滿足しながら、而も更に清新なる樣式意匠の創造が求められてゐる。だがこれは言ひ易くして極めて解き課題でもある此の如く困難な課題が、本競技設計によつて直ちに解明されようとは期待し得ないであらう。本競技設計の二、三の應募案中に提示された新しい樣式手法の一端に接してひとまづ一應滿足すべきものと考へる。

唯應募圖案中の多くに示されたやうな過去に於ける日本佛寺建築樣式の單なる模倣再現に終始した如きものは。餘りにも因陋である。過去の佛寺といふものに捉はれ過ぎたものとの非難をまぬがれないであろう。さればとて過去の佛寺建築にみる傳統的な手法を微塵も止めぬ斬新奇拔の形成手法によるものも今日の佛寺なるものゝ內容を深く考へるとき、遽かに贊意を表し兼ねる。

現代の佛寺建築を樣式上如何にすべきかは建築學術上の極めて困難なる課題であるが、本競技設計の應募圖案に關する限りに於ては過去の佛寺建

築の傳統にみる表現形式を基調として、これに現代の要求から試みらるべき相應の變改を加へた程度のものに好感がもてた。募集規程の主旨中に指示された「一新機軸の樣式」に對してあらゆる試みがなされることは是非共必要なことではあるが問題はそれへの解答の如何である。尠くも本競技設計應募圖案に於ては、過去と全く分離した斬新なる樣式の中からは現代日本の佛寺建築といふものに對する建築造形感をよく滿足するに足る傑出した佳作提案は之を見出すことはできなかつた。

入選諸案に對する批評

一等　福

本案は應募全案中の白眉であり、其靈域計畫並に寺院及祭葬場建築の設計共に應募諸案中隨一の佳作である。一等選定に際し各審査員之を推すことに全員殆ど一致したことは、此作の傑出性をよく裏書きするものといへよう。

其靈域計畫をみるに、忠靈塔、墓地、寺院、祭葬場等を綜合包含するこの地域を、閑靜にして尊嚴、明朗にして決適なる鄕土的綜合墓地として市民敬仰親和の一中心地たらしめんとして、域內各要素が巧み諸和統一の妙を發揮してゐる。その道路計畫は外部との連絡系統も秩序整然としてをり靈域內道路、廣場、綠地等の配置計畫にも、其細部に至るまで入念の工夫が施され、共同墓地の配置やその綠化計畫、更に名譽墓地並にそれらの附帶諸施設に對しても、極めて細心の注意が拂はれてゐる。

建物配置をみるに、葬祭場は靈域內主要道路の稍奥深く、正面に廣い前庭をもつて東面して建ち靈域全部の略中心的位置にあり、十ケ寺も單調に墮しない程度に程よき變化をもたせながら整然と集約配置してある。

葬祭場建築は、築者の意圖する「日本人が感得しうる最も尊嚴なる樣式」への解答として、一見神社風の表現をもつが、千木、勝男木等はなく、これを一言の下に神社風と斷するのは當らない。日本的性格を基調とした表現とも言ふべきも、神式、佛式、クリスト教式等の諸種の形式により葬祭のことが行はれることを考へるとき、この種の建築表現は蓋し妥當適切の形式であらう。直線を主たる表現素材とするその建築意匠は清新の氣溢れて好適である。

寺院の本堂は、一見在來の佛寺建築そのまゝ踏襲の如くに見えるが、仔細に觀察すれば、隨處に苦心の新味あり、而も全體として佛寺建築らしい親和味に富む佳作である。庫裡もよく、本堂との連絡等も趣深く計畫され、塀との粗合せにより隣地や道路から獨立して寺として、そこに獨自の環境をつくり出してゐるのも巧みである。更に葬祭場も寺院も建築資材節約の趣旨をよく體して、即時實現可能の程度にまで實行性がよく考慮されてゐるのは、他の應募案に多くその比をみない長所でもある。

一等二席　略

二等一席　靑

靈域配置をみるに、その主要道路は南方よりする在來道路の延長上にあり、寺院、共同墓地、葬祭場等の配置概ね可。本案の特に傑れたるは、その葬祭場の建築意匠にして、各宗派に捉はれず共同の殿堂たるに應はしきものと、意圖により簡素平明にして尊嚴莊重而も一種の親しみある建築表現に成功せるもの、蓋し非凡の技能といふべく但し寺院の建築は概ね在來の佛寺建築の樣式を襲用したもので、まとまつてはゐるが、葬祭場の建築に示された案者の冴へた技能は多くこれを認めることはできぬ。

二等二席　略

本競技設計の特殊性

本競技設計は面積1萬6千餘坪の廣大なる區域に渉り、靈域の綜合配置計畫をなすと共に、更に寺院及葬祭場の建築の設計をも含むものにして、而もその建築の樣式は昭和聖代の文化を象徴するに足る清新雄渾なるものを求め、加ふるに資材を最も合理的に集約驅使して寺院としての尊嚴を發揚し以て信仰の殿堂として大衆敬仰の門たらしむべき一新機軸の創成を求めんとするもの、蓋しこの種の競技設計は從來あまり多くその例をみざるところ、極めて特異の性質をもち、又甚だ困難なる課題といふべきである。

當選者左の如し

一等　東京市小石川區茗荷ヶ町74番地
社寺建築設計事務所　自營
小林謙一
東京市杉並區天沼1丁目297番地
都市計畫東京地方委員會囑託
金井靜二

二等　大阪市東區京橋2丁目大阪市役所
天滿分廳舍內建築部第1建築課設計係
矢代幸三郎
勝山純二
岡本忠行
鳥越良一
西原直一
村島彰

二等　福岡西部第64部隊氣付永末隊
谷口正久
下關市長崎町矢ヶ迫2184番地
島田正二
西宮市神中島14番地
德永正三

三等　東京市澁谷區代々木初臺539番地
造園其他設計監督
西川浩

三等　東京市中野區上高田1ノ240
大藏省營繕管財局勤務
竹崎文二

三等　名古屋市熱田區傳馬町1丁目1番地
建築設計業　自營
武川義郎

選外佳作

靜岡縣都市計畫課
匂坂弘美
福島理平
西川正信

（以下略）



勤労奉仕

津田　鑿

輝やかしき皇紀2600年記念事業の一つとして帝都宮城前廣場を整備し奉り、式日其他並に10萬人の人員が參列し得らるべき聖域築造土木工事は東京市肇國奉仕隊の編成により廣く勤労奉仕に依る作業は延人員約180萬人を要し、開始以來昭和16年11月迄に約半數、即ち90萬人の奉仕により樹木の植替、石垣の取除き、道路の變更等着々と進捗しつゝあることは既に周知の事である。

一般國民の奉仕には老若男女を問はず參加することを得、幼は國民學校五年生位より高等女學校を始め、男子の各學校、各團體、町會、婦人會、地方より上京の有志各位等夥しく作業順位決定に係員はいつも腦殺さるゝとは喜ばしき限りである

東京市民も亦各區別に分かれて參加、或る時は婦人連に男子の組と既に數回、半日の奉仕に勇んで出場をなしたる誇りの人々がある。

昭和16年11月7日自分の屬する町會より第5回目として今回は町會男子理事中より抽籤にて奉仕に參加の通知に接し、自分も中老組なれど、その一員に加はつた。

當日は幸ひの好天氣に惠まれ、定刻に馬場先門內西側に參集、午前中勤労者の退出を待ち、假身仕度所に更衣を終り、指導員に引率され、町會員とある揭示場の前に整列、左に天理教員、次に國民學校、次に女學校其他の團體を加えたる順序となる、中央壇上には指揮官登場せられ、掛員の司會により國民儀禮に始まり、本奉仕の意義に就き約20分間雄辯に、且熱心なる訓示がある、頗る名口調……諸君半日と雖も　皇居の前にて神聖なる勞働に從事され、然かも本事業に參加したるものは姓名を記帳され、永久に保存さる、とは有難御思召の程感激の限りである。みなさんの汗の結晶は決して無意味で終るのでないと結ばる。

恐れ多くも明治天皇の民を惠まるゝ御製を謹んで拜讀中、女學生の片隅にくすくす笑ひたる者がある。指揮官は一だん聲を高く引率せる教員に向ひ、「何んたる不心得の生徒であるか、斯の如き生徒を教育する教員方にもその責任がある。今後は假令無意識にても斯る不心得なき樣にと嚴重に申渡された。最も千萬の事にて、一同襟をたゞした。

肝銘すべき訓示終り、之れよりは一班宛に分かれたる指導員の指圖により作業せられよと壇を降らる。一列の前線に指導員一名宛部署に就き 1234.1234の番號と共に點呼を終り、此の4人は一組となり、其の日の作業たる土砂の運搬をなすこととなる。1番のものは荷車の內に入りかじ棒を握る。2番のものは左例に、3番と4番とは後部に廻りあと梶と役割の決定を終る。

勇ましき軍歌は擴聲器よりなり響く班の數字が記されたる小旗を持つ班長を先頭に指導員に隨ひ一組宛の車と國民學校生徒、女學生のそれぞれシヤブロ、リヤーカー、モツコ等、體質に應じたる道具を持ち發足する。

車は各3メーター宛のあいだを置き、次々に動き出す。二重橋前方より遙かに皇城を拜し進んで

右折すれば小高く積み上げられたる土砂の置場に至る。此處にて更に指導員より勞働に就いての注意がある。

1. 車は自己のものではないから破損せぬように取扱ひ、土砂を積む際必ず枠の8分目に止めて運搬し、道具は叮嚀に使用すること
2. 3メーターの距離を前車と後車の間隔とすること。之れは衝突を防ぎ事故を起さぬようとの注意である。事故は怪我の基で、現時は一人にても半人にも御國の爲に役立つには身體を大切にする必要がある。國家はいくらでも働く人を要求して居るとの注意を受く、枠に投げ込まれる土砂は、始めは中々簡單にはいかぬもので、其の內血氣の連中は老人組をしり目に山盛りとして勇んで居ると、直に指導員に8分目に減ぜられ、微苦笑する組がある。
3. 指定の通路を必ず番號順位に急がず、をくれず歩調を揃えて往復すること。近道廻り道等列以外に勝手に自由行動をとることは禁ずる。
4. 5分間宛の休憩時間には喫し得らるゝ丈の煙草を見計ひ、それ等の量に點火し、もし火の殘りありたる時は地中に埋め、附近の枯草に飛火せぬように注意すること。
5. 荷車の曳き方、シヤブロの使ひ方等一々手をとり、指導員の教示を受く。
6. 作業中は無駄口をきかぬこと只默々として働くように。

いよいよ奉仕に取り掛る、各自シヤブロに土砂をすくひ上げ、荷車に積込む、やがて全組積み終ればピーの合圖と共に順序よく車輪のきしる音もさわやかに進んで行き、指定の場處に土砂を落ろして歸り、又往きては戻る。斯くして約30分のち第1回の休憩となる。11月初なれども流石はひたいに汗がにじむ。腰をかける位置も一々指定さる一息入れて居ると、2號令で向ひ合に双方より各自手を延ばし合ひたる距離を置き、整列すると、婦人會の奉仕隊が一人は茶わんだ他の人は土瓶を持ち、あつい番茶をついで廻る。その味は實に甘露で、のみ終れば清水を手桶に滿たして運ばる。それにて洗ひ、次の列に廻わす。何をなすにも一定の法則に隨ひ、共同的で自我の許されぬは規律を守るによき教訓である。數回の休憩と共の間に體操をなし、勞働にもくもくと約500人は土砂の積みをろしに往復、かくて午後三時半に至れば、終業に近い合圖が報ぜらる。

二重橋の前に整列、敬禮の後又4人の一組は各歩調を合せて堂々と歸り來る。各部隊は1と2番の人は車の掃除、3と4番はジヤブロを水洗ひをし、車の上に4丁ならべ　翌日他の人々が直ちに使用するに差支へなきよう整然と最初の位置に配列し終る。程なく次席の指揮官いとも嚴肅に且つ叮嚀に終業につき一場の挨拶がある。僅かの義務を果して却つて恐縮を感ずるのである。次に町會よりのものには區長又は代理より之れも又叮嚀なる謝辭を受け、更に一同感激する。

尙紀念寫眞希望の人々には東京日々新聞社の奉仕にて無料に近い價で寫眞撮影の勞をとらるゝも嬉し。斯くして始めの更衣室に戻り、衣服を改め洗面を終り、明朗な氣持となつて退場した。折しも皇城の綠の森をとをし櫻田門と議事堂の高塔の中間に赤い夕陽は美しく靜かに沈んで行くのである。何んたる麗觀であるか、是の絶景に浴するも亦光榮のひとつで誰れのまなざしにも今日の奉仕に參加したる御蔭を喜ぶ如く只感激に滿ちて馬場先門外滿員の電車に又は徒歩にそれぞれの家路に就いたのである。

時局は重大である。此の時に僅かの時間なれども當日受けたる精神教育には非常な効果がある。

1. 各自勝手な行動は斷じて許されぬ。凡てが軍律式である。
2. 勤勞奉仕作業を體驗して始めて强く知り得る其の意義を諒解すること。
3. 始めは何んとなくつまらぬ如き感じがありしも、訓示と終業の際に謝辭の挨拶を受け感激し、機會あれば再度奉仕に參加の希望が胸を突くのである。
4. 指導員の一言一句と、其の動作は實に職責に忠實熱心で、よき指導者である。建築實施の現場はいつも亂雜になり勝である。此處に斯の如き組織を應用せば、工事の進捗

も且つ經濟上に大なる利益があると考えらるゝ。

5. 自分の希望としては官、公、私とも長より給仕、小使の方に至る迄同時に若干の人員交代事務に差支なき程度に、一度半日の奉仕に參加をすゝめたい。かつて（市長其他の高官の方々の奉仕はあつたが）半日の勞働それ程苦痛でなく、寧ろ有益である。特に位置階級の差別を附せず、共同的に服務する精神を養ふには貴き體驗を得る又となき好機會である。

6. 皇居を拜する人々の通行する場處にての作業なれば、之れ等の內あるものは奉仕隊の勞働區域を避け、行き過ぎる理解のあるものもある。又あるものは相當にきらびやかにきかざりて吾々の一隊、しかもその內には白髪の老人あり、婦人あり、いわくありげの人々の荷車を曳き居るを見て、何んと感じてか只行過ぎる連中があるのは甚だ遺憾のことで、此の場合一度體驗したるものには定めし今日は御苦勞樣位の挨拶はあつても惡るくはあるまいかとも相棒とひそかにさゝやき合ふのである。

女學生の腕や足をあらはにモツコをかつぎ、土を運ぶ姿を藝術寫眞のモデルにせんと、寫眞機を向ける人がある。自白すると自分もかつてその不心得者の一人であつた。無意識でも斯る行爲は絕對に愼まねばならぬと、茲に改めて懺悔する次第である。

奉仕後2ケ月を經て附近を通行すれば、相變らず多くの熱誠なる人々の勤勞である。何れにか吾等の部隊の運びたる土砂も、婦人連の植付たる芝もある。其の他の工作も追日整備され、坦々たる道路は既に清らかに3分筋小砂利を敷詰められたるを見て、新に集合力の如何に強きかと無量の感に打たれ、過る勤勞の日を靜かに回想した。

（昭和17年2月稿）

（筆者は津田鑿建築設計監督事務所長）

まどがみ

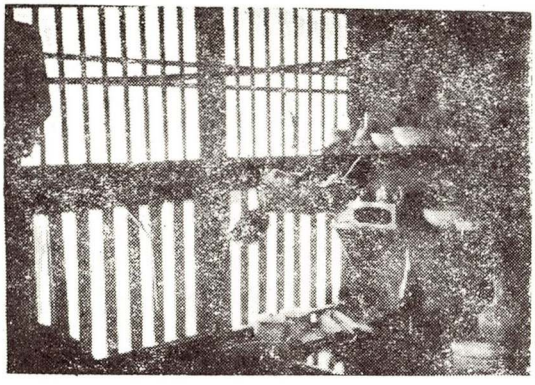
（大東亞共榮圈と日本建築界の問題）

山口　正

もう、かれこれ20年にもなるか、筆者が、始めて、奥羽地方の民家を見てまわつた時、山深い、ある紙をすく村で、まどがみといふ言葉を教はつた事がある。障子紙の事なのであるが、語のひびきが好くて、びつたり來るように思ふ。障子といふ觀念によらず、廣い意味で、まどを對象とする方が、農家における日本紙の地位を思ふとき、一層ふさわしい。北陸地方では、緣界のらんまをよあけまど、雨戸の上のらんまをこじきまどと呼び、雨戸に明りとりの障子がはめこんであるのを、ぶつきりあまどといつてゐる。こうして、らんまをまどと呼ぶ習慣、いきぬきのまど、あかりとりのまど等といひならはしてゐる事、等から言つてもまどがみなる言葉は合理的で一般性がある。そして、そういふ部分には、障子のあるなしに拘はらず、美しい日本紙が丁寧にはつてある。よあけまどが金色にかがやいて、威勢のよい鳥の影が聲と共に横ぎつて行つた夏の朝の思ひ出や、春の夕の薄桃色の大戸の紙のつやゝかさや、夕立をばらばらと傘にきいたと思ふと、もうきつい空の色が傘紙の色を明るいものにしてゐたり、見世棚の圍ひ障子に行き交ふ暮の人影等、日本紙による我々の日本らしい氣分ほど、ゆかしいものはない。

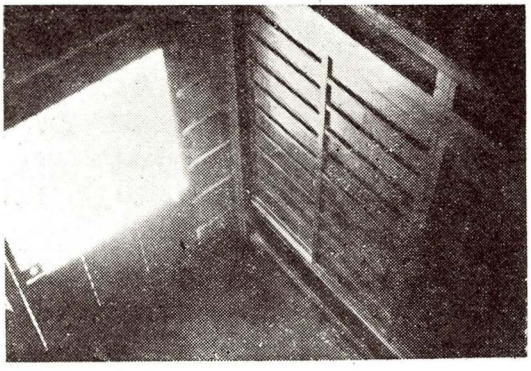
美しくて、丈夫な、そして衞生的で合理的な、日本のまどがみは、主として楮を原料として造られる。

冬至の頃、刈りとつた楮を釜に入れて蒸し、皮を剝いで乾かす。これを黒皮といふ。黒皮を川に浸して、足で踏んで外皮をはぎとり、太陽に乾かすと、白皮が出來る。その白皮を煮えたぎる灰汁に浸して、かきまぜながら、更に1時間位煮る。煮えたぎると、白皮をあげて、清水で洗つてあくを拔く。あく拔きのすんだ白皮は、川晒によつて漂白する。それを棒でたゝきほぐして、水を滿し



第 1 圖

山形縣東置賜郡中川村　字中山ニ釜渡戸（カマノハタ）
大坂德之助氏宅　「ダイドコロ」の「ナガシ」



第 2 圖

京都府乙訓郡向日町字鷄冠井（カイデ）東井戸、
五十棲常次郎氏宅　「ニワ」の大戸口

たすきをけに入れてねりを加へ、すの入つた枠ですくひあげ、ゆり動かしてゐる中に、濕紙が枠に殘る。濕紙は紙床の上に1枚づつ積み重ね、重しをかけ、次に1枚づつ乾板の兩面にはけではりつける。この乾板が澤山ならんでゐるありさまが、古來多くの畫家によつて、かみすき場風景として愛されて來た。又、かゝる辛勞の多い作業であるため、かみすき場からは、有名な文學が生れもした。こうした一通りでない工程を經て出來上つた日本紙が美しくて、丈夫な事は當然といはねばならぬ。

日本の農家には、この日本紙が豐かに使ひこなされてゐて、主要なる建築材料として重きをなしてゐる。然るにも拘はらず、近頃、農村保健の問題を云爲する者が、この日本紙をガラスに取り換へよなどの異論をなす事があるのは怪しからぬ事である。『日本建築士の』昭和16年12月號に、瀧澤眞弓氏が『日本建築再吟味の問題』と題して、『農家と紙』の事につき、ある建築衞生學者が、『農家の紙障子は凡てガラスに變更されねばならぬ』『農村各家々に窓ガラスの使用普及を以つて農村生活新體制の第一とする』と、某新聞紙上に發表した事に對し、その淺慮短見を指摘して『科學する心とは、紙をガラスに代へる如き事であるまい』と、述べてゐられるのは達見と申すべきである。これは、問題を農村住宅にかりて、淺はかなる科學觀を戒め、眞の學究的なる態度を建築家の上に望んでゐられるのであるが、今少しく、農村の建築と紙の問題について考へてみたい。

大體、農村保健の問題を、建築家の分野において解決しようとする事は、非常に困難である。

我々自身が住む小住宅を漸く今日の水準にとどかせるために、如何に多くの愚作愚論を繰り返しつゝ、長い年月を過したかを思ひ、しかも尙今日國民住宅に對して、一つの解答も與へられぬ狀態を思へば、未だかつて、一顧も與へなかつた農村住宅に、特にその難中の難たる保健の問題に、いさゝかたりとも寄與し得べき力を我々が具有するとは思ひもよらぬ事である。10年、20年、農家を研究したとて、所詮眼でみたにすぎないのである10年、20年、農夫として農家に生活したわけでなし、1日2日の訪問から、この複雜微妙にして、強い傳統を有する農家建築の眞髓を摑み得る筈はない。まして、改良の何のと、大きな口を利いてみたとして、そこに一體何に程の價値があるといふのか。我々は農家の改良を云爲する前に、**農家から學びとつたところのものを以つて、農家をも含む建築全體の問題を考へねばならぬ。**單に、改良の對象として考へるには、農家は餘りにも貴い存在である。

農家の改良など、案として成立するものでなく云ふてみるさへ恐ろしい程むつかしい事である。紙をガラスに取り換へる位の事は手輕で云ひ易ひ事で、一應は肯けない事もないかに思はれるが、事實は恐るべき反逆である。

ガラス論者は、農家が暗いといふのであるが、

事實は決して暗くはない。第1圖のかまのはたの大坂氏宅のだいどころのまどを見てもらひたい。一體どこが暗いといふのか。これはある年の6月の撮影であるが、冬3メートルの積雪があると、この室はもつと明るくなる。第2圖のかいでの五十棲氏宅の大戸口、紙いつぱいに溢れた光が、くちのまのせん削りの板戸を美しく浮かびあがらせてゐる。この大戸など、引手に小指1本あてがふと、するすると輕くあく。この紙をガラスに換へると、そうはいかない、備前の大道郡、古都郡あたりには、型板ガラスのはまつた重い大戸が多い。こゝに紹介した大坂氏は10人、五十棲氏は5人の子福者であるが、何れも明朗健康で、俄學者に氣づかつてもらふ必要は更にない。

農家が陰氣で暗いなどと考へてゐる事が第1の誤り、陰氣で暗くても、紙をガラスに換へる位で片附くと考へてゐる事が第2の誤り、農家におけるまどがみの地位役割効用の認識を缺く事が第3の誤り、日本紙やガラスの研究不足が第4の誤りこの誤りに滿ちた說論を瀧澤氏が指摘されたのは敬服に値する。

農村で物をいふ前に、もつと農村を見なければならない。もつと農村で聞かねばならない。もつと農村を味はねばならない。天井裏のすゝがどんな味がするか、農家では用を達したあと尻の始末をどうするか、何もかも知りつくしてからでないとうかつに物は云へないと思ふ。餘談にわたるが、昔、近江伊香立の百姓は、山城の鞍馬まで肥を汲みに通つた。途中、江文、藥王の三峠の急峻を越えるとき、肥がこぼれると、べんとう箱でこれをすくつたといふ。北河內の農民は、舟で大阪へ肥を汲みにゆく途中、肥桶に頭をつつこんで晝寢をし買ひとつた屎尿を舌でなめて、濃淡を試みたといふ。農村といふところは、かくの如く徹底したところである。

照度計を据えて、眼を患つてゐる者がゐるからといつて、そう簡單に、ガラスをすゝめられてはたまらんと思ふ。

數にしてみれば、僅かな割合しか占めない、都市や近郊住宅の研究に夢中になり、重大な農家の研究を怠つたがために、今日、ガラスをめぐつてこんな議論をしなければならぬ事は、我々の大きな怠慢であつた。農家の改良の如き、國內の問題はもうとつくに研究しつくされて、實行も終つてゐなければならない時である。省みて淋しいのは日本建築界の研究の行きとどかなさかげんである

明治が45年、大正が15年、昭和も今年は17年だ歐米の建築を學びだしてから、ざつと80年。80年といへば、大化白雉の文化輸入期から天平の成熟期までの年數である。我々は一體何をしてゐたのか。もう、自己民族を表現し、時代を表徵する型式も出來てゐてもよい時分だ。それに、規格の統一もまだ。構造研究は緒についたが、材料はてんで問題にならない。建築の語さへ整備されてゐない。ましてや建築道德など、いつの日にかこれが成形をみる事が出來よう。

南へ、北へ、多大の關心と人手を奪はれて、追ひまわされてゐる日本建築界である。研究も仕事も課題が多すぎて、心が散るばかりで手が廻らん在來、餘り仕事の能率など考へなかつたから、こんな時に徹底してまごつく。まごつきながらも、研究は不足なりに、仕事は不充分なりに、なんとかなつてゆく。ところが忘れてならないのは、我々の背後に、大東亞共榮圈の全建築家が追從してゐる事實である。この圈頭に立ち、時代の關頭に立つ我々の責務を考へてみると、その餘りに重大なるに比し、餘りに微力なる我々である事に心安からぬものがある。我々は教へる事を知らないながらに教へなければならず、力なくして導く事を試みなければならない。シユーエダゴンや、アンコールワツトや、プロブドルを讃嘆賞美する事が日本建築文化の力だといふのか。永定門や節孝坊や皷樓や牌樓やを撮影上梓する位が日本建築家のなし得る唯一仕事であつてよいといふのか。南をむいても、北を眺めても、建築的には恥しい我々である。しかも南と北とを從へて立たねばならぬときが既に我々の前にある。

明治の始め、我々の先輩は歐米文化の吸收に務めた。それらの作品は記念すべき、ヨーロツパネスクとして、我々のアルバムに殘らうとしてゐる然し、己を空しうして專ら吸收に務めた時代は、むしろ幸福であつたかも知れない。その吸收を未だ充分に消化せざるところの我々が、こんどは反對に、吸收されんとしてゐる。國土より立ちあが

る生氣は空にみなぎつて八方に擴がり、やがて地球もおうはんとし、四邊を洗ふ潮は、世界の隅々にまで滲透せんとしてゐる。老大家や如何に。中堅幹部や如何に。青壯年建築家や如何に。我々は果して、大東亞共榮圈の建築界を指導するべく充分なる能力と用意を有するや。

（昭和17年3月31日稿）

（筆者は京都市役所營繕部第一技術課技師）

新しき體制を待つ

中川了文

産業の合理化と言へば、聞き古した言葉であると言ふよりは一昔前か！その様なことを叫んだこともあつた様な位に想ひ起す程度であらう。今その産業の合理化は新しい意味において、戰時下の産業合理化として叫ばれ、着々と實現しつゝある殊に陸軍經理局の肝煎で、その軍管工場の能率增進を促してゐるやうに承る。吾國で最初に之の運動が叫ばれたのは昭和5年1月11日、時の濱口內閣の斷行した金の輸出解禁のその對策として、井上藏相は緊縮政策を提唱し、その實行策としたのが産業の合理化であつた。

元來この運動は吾國をもつて嚆矢とするのではなく、1921年第一次歐洲大戰によつて一躍成金國となつた米國が、國內が好景氣が沸つて、繁榮爛熟に達したとき「ハーバート・フーヴアー」は産業界における無駄が、産業當事者の利益の縮少のみか、全米の利益を縮少せしむるものであると見て、遂に技術、機構の改善を叫んだ。之が取りもなほさず「無駄排除運動」即ち産業の合理化である。その後1925年に獨逸は米國のこの「無駄排除運動」に「ヒント」を得て、戰敗後の復興運動を起したのが「合理化」運動であつた。では米國の産業合理化なる「無駄排除運動」と、獨逸のその「合理化」運動とは如何にその性質を異にしてゐるか、之を一言にして答へるならば、太田博士の名言「アメリカ」の繁榮と「ドイツ」の復興である。

だが米國にしても最初から富める國ではない、彼も借金國であつた。獨逸からも、英國からも、佛國からも借金してゐた。それが第一次歐洲大戰を好期に一躍富める國となつた。持てる國となつたのである。戰ひのドサクサにまぎれて大事泥成金となつてしまつた。之に反して、獨逸はあの叩きのめされた慘敗のどん底から、疲弊と衰微を切り抜けて、あらゆる手段、凡ゆる方法を講じて祖國の挽回のために時の外相「ワルテル・ラウテナウ」は自ら陣頭に立つて決死的に乘り出したのであつた。それはあの有名なる「コンチエルン」や「トラスト」や「カルテル」等の問題の産業方面のみならず廣く國民生活、家庭生活に迄及んだのである。では吾國のその第一次産業合理化運動は何れの方のそれを「規範」としたのか？……

其れから10年、支那事變も大東亞戰爭に擴大して第6年を迎へた今日のその産業合理化は、過去のその何れのとも性質を異にするのである。勿論吾國の第一次のその運動と本質的な相違を見出し得るのである。あの當時の産業合理化運動は前代未聞の不況から救ふべく個々の營利勘定を目標とせる自由主義資本主義經濟理念に基くものであつたが、今日提唱され、斷行されつゝある産業合理化運動は戰時經濟促進のための擧國的運動であり國家目的のための一億一丸となつて滅私奉公、公益優先の誠を捧げる愛國的運動である。そこには闇取引も個的利潤の追及もない筈である。……

獨逸は當時あの運動の着手に際しては、米國の「資本」に對して、彼の目標としたものは「物」と「時」と「人」である。この三つを無駄なき様教育と指導に當つた。そしてこの三つの裡の最後の最大なるものが、他の二つを支配すると考へた要は人である。人の完全なる錬成と體制であると試みに歷史の頁を繙いて見よ「フリードリツヒ」大王も言つたではないか「人間こそ一番大なる富である」と。

「ラヂオ」に、新聞に、雜誌に、映畫に知るあの輝しい戰果、たくましい國內の秩序、20年にしてあの立上りの姿よ、獨逸は一朝一夕にして甦つたのではない。

大東亞戰の序曲支那事變勃發の年、日本建築協

會では會員に檄を飛ばし、翌年の建築界の見通しについて「ハガキ回答」を求めた。筆者も長期戰と短期戰の二樣の方面から所感の一端を述べておいたが、不幸にも最惡の豫想に近かつた樣だ。現時局下の情勢と想ひ合せ、眞に無量の感慨に咽ぶ次第である。今此處に再度貴重なる紙面を拜借すれば

問1. 昭和13年建築界の豫想

問2. 時局下の建築界に對する感想及對策

一に對して……此問題は今次事變が長期繼續か年內解決かの二樣の方面より考察せねばならない若し長期繼續するとせば、吾建築界には現に遭遇せる恐怖以上の「パニツク」に出會する。資金調整法は、更に嚴に民間の工事も1萬或は2萬位を限度として、凡て中止を命ぜられるのであらう。鐵鋼材統制に於ても最惡の場合、例へば加工材、或は建設中のものさへ解體の止むなき位は覺悟する必要があらう。然して從業員は戰線へと召集される。此難局を切拔けるに耐ゆる準備が必要である。之を一部巷說の如く、年內解決と見るも、戰時諸法令である臨時資金調整、輸出品の臨時措置鐵鋼工作物建設許可、其他の取締令が、事變終了後1ケ年內は活用せられるため、一部の業者即ち軍需關係、政府指定事業以外は實に悲慘なものであらう。故に13年吾業界は前者ならば……略

二に對して……吾建築界の人々は余りにも財政經濟に對して無智過ぎた。只眼前の一少利益にのみ囚はれて、建築事業なるものを余りにも小範圍に見てゐた感がある。建築事業が一國の財政經濟と密接なる關係のあることを考へておらなかつたその結果が、今次事變における戰時經濟體制に發令された臨時經濟諸立法に對して、只唖然として手を拱くのみであつた樣だ。時局講演會、座談會等、時期を少し過ぎてゐた。泥繩と言ふか、實に喘いでゐる。然らば如何にその對策を講ずるか。戰時體制下にあつては建築事業は偏心的になる。依つて「カルテル」「トラスト」の如きものを造る。之は經濟學說に說くその正しきものではないが、其れによつて相互扶助の體形で進む。勿論官民の協同は申すに不及凡ゆる建築關係が之の方法をとる……略

時代の寵兒、企業合同、整理統合、企業聯合、國策會社、經營財團（營團）等も要は「コンツエルン」であり「トラスト」であり「カルテル」の理想的なるものに外ならぬ。

一方建築界の新しき體制は如何、他團體に先んじて廣く會員にその行く方を問ふた協會でさへ、未だ各種部會が續行中ではないか、聖戰6年、既に南京は更生し、一地方軍權として、重慶政府が辛じて余喘を保ち、香港は落ち「シンガポール」も亦吾が手に歸した今日、かつては國民徵用の大分が眞先に建築技術者に下つたことを忘れてはならない。建築界の新體制の一致を見ないのは滅私奉公の念に欠けてゐるのではないか「自我」が去り切れぬのではないか、今こそ斷然立つべき秋ではないか。聖德太子憲法17條の1に曰く「和を以て貴しと爲し、忤ふことなきを宗と爲せ。人みな黨あり、また達れる者すくなし。是を以て或は君父に順はず、また隣里に違ふ。しかれども上和ぎ下睦びて事を論ふに諧ふときは、すなはち事理おのづから通ふ。何事か成らざらん。

三に曰く、詔を承けては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せて四時順り行き、萬氣通ふことを得。地、天を覆はむとするときは、則ち壞ることを致さむのみ。是をもつて君言ひ、臣承け、上行ひ、下靡く。故に詔を承けては必ず謹め。謹まずんばおのずから敗れなん。

九に曰く、信は之義の本なり、事ごとに信あれそれ善惡成敗は、要、信に在り。群臣共に信あるときは、何事か成らざらむ。群臣信なければ、萬事ことごとに敗す。

十五に曰く、私にそむきて、公に向ふはこれ臣の道なり。およそ人、私あればかならず恨みあり。憾みあるときは必ず同らず、同らざればすなはち私をもつて公を妨ぐ。憾み起るときはすなはち、私をもつて公を妨ぐ。憾み起るときはすなはち制に違ひ法を害ふ。ゆゑに初章に曰く、上下和諧せよと。それ亦この情なるかな。

十七に曰く、大事は獨り斷すべからず、ただ大事を論ふに逮びては、もし失あらばことを疑ふ。ゆゑに衆と共にあひ辨ずれば、事即ち理を得む。

官民諸賢もつて座右銘とすべし、太子由緒の地

大阪こそ率先起つて、その範を示すべきではなからうか。「シンガポール陥落」昭南島祝賀の日。

（筆者は中西六郎建築事務所勤務）

自然漫想

明山幸治郎

時々「自然」と云ふ事を漠然と考へ、漫然と想ふ事がある。更に突込んで考へて見やうとするのだが、結局は漠然たり漫然たらざるを得ないのである。

自然は其自身有か無か知らぬ。然し乍ら現はれて發する所或ひは宗教となり、藝術となり、道徳となり、或ひは科學上の法則となる。凡そ此の世の中に於て、自然を源泉とせざるものは無く、云はゞ自然は吾々の母體であると共に、形而上に或ひは形而下に於て、總ての表現の吸めども盡きぬ泉である。

自然物は凡て生々として美しく、無駄が無く、如何に微小なるものでも夫々の存在の意義を有し吾々に何等かの感じを與へる。淺く見れば淺く感じ、深く見れば深く感じる。自然は吾々の心を寫す鏡でもある。吾々の起居動作、作品其の他凡ゆる表現は如何に其れが善美を盡せるものであつても、自然の氣の通はぬものであれば、やがて飽氣を感じる。反對に如何に表現が拙くとも、自然の心を宿して居るものには何となく美と愛着を感じる。

元來人間は他の動物と同樣に自然と共に生活して來たのであるが、文化が進むに從つて自然より自分をプロテクトする傾向を生じ、更に進んで對抗的になり、果ては自然征服と云ふやうな凄い言葉が生れて來た。然し此の自然征服は實の所自然に從ふと云ふ事では無からうか。

物質文明が進むにつれて、自然に對する觀念が薄くなり、不自然な狀態が多くなり、種々の過誤が生じて來る。宗教或ひは其の他の種々の教へは此の不自然な狀態にあるものを自然の心に戻し、而して現在の生活に生氣を與へしめる。又藝術家は更に高遠なる自然の心を追跡し、其れを個性的に表現して社會に美を與へる。一方科學者は幾多の先人の發見した法則を基礎として、更に新らしい法則を摑まんとする。自然の心の內深く入り込み、自己の心と一致した時、所謂悟りを開いたと云ふ。

昔一流一派を編み出した劍聖が、人跡絶へた幽境に仙居したのも大自然に接觸して、其の心を體得せんが爲であつた。其の他所謂一道一藝の達人が如何に自然の心を體得する事に努力したかは誰でも熟知の事である。

廣義に於ける技術は自然より得たる種々のエレメントを綜合して、一つの廣義に於ける有機的な存在を形成するワザである。故に良き技術者たる可き者は、巧な綜合者であると共に、各自の分野に於て熱心な自然の研究者たらねばならない。

現在の航空機が如何によく出來て居ても、其の機能は鳥の機能には及ばないし、船にしても魚には及ばない——鳥や魚は飛行機や船の如く役立つかと云はれるかも知らぬが、其の樣な事は問題外としておく——然し乍ら飛行機にしても、船にしても、其れがよく出來て居る程美しい事は、そろそろ認められ出して居る事である。

船も飛行機も幾多の科學を要素とする有機的な綜合物である。各要素が最も機能的な位置に大きさに然も無駄が無く配置された場合、即ち最も自然的な狀態に置かれた時、其の形は自づから自然の心を宿して、美しく感じられるのでは無からうか。逆に何か不自然に感じられるものには、技術に何處かに缺陷がある樣に思はれる。此の事は建築に於ても同樣である。建築上の各要素を最も適當に配置出來た時には、其の建築物の使命にふさわしい外觀を有し、且自然物を見る樣な感じを與へる可きであらう。

由來日本人程自然に親しみ、之と融和して生活して來た民族は世界に其の類を見ないと云はれてゐる。吾々の祖先が如何なる態度で、自然に接して來たかは其の生活に表はれた幾多の樣式に見る事が出來る。吾々の祖先の殘して呉れた多くの遺物は如實に其れを物語つてゐる。

明治より大正の初期にかけて、歐米の文物は偉

大なる勢力で擡頭し、爲に祖先の遺産は一時影を沒した觀があつた。大東亞建設の叫びと共に、吾等大和民族固有の精神發揚が叫ばれ、吾々の祖先の偉業が見直される樣になつた事は誠に喜ばしい限である。ギリシヤの肉感的な彫刻美に醉ふ一方に於て、吾々は吾々の血の通ふ祖先の殘して呉れたギリシヤに勝る所の凡ゆる官能を超越した崇高にして永遠な美を靜かにたゝへてゐる佛像のある事を忘れてはならない。

吾々は更に文化が進む程より一層自然を熟視し而してより深い何物かを摑み得て、社會に益する所あり度いものである。　擱筆

（筆者は大阪帝大工學部造船科教室勤務）

「施工上の基礎智識」の必要性

西村清士

前　記

1月號の「日本に建てる住宅」の中で、山田醇氏は氏が學校を出た當時、施工や積算の方面に頭を向けると馬鹿にされたものだが、請負人や大工、左官に頭を下げて此の方面に沒頭したと言つて居られる。又近頃の各種報告に技術者不足を散見する。是等に刺激されて日頃の抱負をまとめて見たものである。

支那事變は大東亞戰爭に進展し、大東亞の建設は大東亞の建設に向つて發展した。我々建築家の責務又重且大となつて來た分だ。

此のよき年に生れ遭はせた光榮を思ふと共に、益々職域奉公の完全遂行を期し、建築家としての任務達成に邁進しなければならない。

飜つて現在の建築界を顧るに、一般技術部門同樣、質に量に飛躍的發展を續けつゝある。然して是等の達成のため必要な人才は各所に於ける養成機關の增强速成機關の新設にも拘はらず、要求を充足して居ない。その結果、現在の建築技術者は分不相應の荷重を課せられる事になり、1建築技術者が負擔する工事量の大なる事、今日に優る事は無かつただらう。

我々が卒業して社會人となつたのは、昭和の始め、濱口內閣の緊縮政策の眞最中であり、又大正震災復興も一片付き、建築界は不況のどん底だつた。就職したものゝ仕事の割に多士才々と云ふ有樣で、學校出たての我々は、仕事らしい仕事にはありつけず、謄寫版の原紙淨書、青寫眞の燒附等までさせられたものだ。淨書した原紙の讀合に建築用語がスラスラと讀み切れず、其の都度口惜しがりつゝ一語一語と仕口に一般施工に積算に智識を深める事が出來た。現場に於ても亦そうだ。トロ監等と云はれながらコンクリート施工を立番し調合の正確と混捏の充分とを期した。こうして居る中に、或は時計で、或は感で工手間を學び、段取りを習得しつゝ基礎智識を深める事が出來た。もつとも是は卒業證書に賴らず、一工人から完全なる建築技術者えとの信條から出た實踐でもあつた。

其頃の狀態に較べると、現在は全く異つて居て鋸を持つて居る者は、大工、鏝を持つて居る者は左官と言ふ位多忙であり、從つて建築學科を出さえすれば、もう一人前の技術者として多量の工事を擔當させられると言ふ有樣である。之は若い技術者諸君にとつて全く光榮であり、幸福であり、慶賀すべき事に違ひない。往時の我々がいつになつたら一人立ちさせられるのかと憔燥した樣な心配もなく、當面の工事量消化の爲凡ゆる努力と精進を續けて居らるゝ事だらう。然し餘りにも多忙過ぎて、我々が折にふれ、時にふれて習得した施工の基礎的智識を研究する時間さえも與えられないのでは無いかと危まれる。

施工の基礎的研究が科學的に追究され、研究室に持込まれる樣になつたのは古い事ではない。然るに現場には之と逆行して施工を等閑視する傾向が見え出して來た樣に考えられる。そして學究が進むにつれて研究の發表は一部學者の嗜好位に考え、現實より遠い物とする氣風が生じて來たのを見逃すわけには行かん。

そればかりでは無い。施工の閑却化は從來の當然の納りをも簡略化し、粗惡施工に退歩する氣配さえも見える。惡意からするもので無く、知らず識らずの中にする粗惡退歩である。最近は自由主義封鎖に名を借りて學理に基く施工法や、正しい

納りによる施工法を且那の暇仕事視して排撃するものさえ現れて居る世の中である。

即ち仕口は大工に委せておけばよいと言ふ考えを持つて居る人がある。研究室では材端減入込強度等と云ふ術語まで設けて一小胴突きも見逃さず科學のメス深く研究を進めて居るのに、之は又餘りにも仕口に向ける注意が不足ではないか。又コンクリートの施工について見るなら調合が科學化し、混捏が方法と時間とその他のあらゆる因子について調査を進めて居るのに、是等は設備無しでは實現不可能だとして理論の實際化につき何等努力しないのみならず、所謂建築技術者の自尊心はトロ鑑の業務蔑視する傾向さえ認められる様だ。

言はんとする事は仕口とコンクリートとの施工に關してだけではない。大量工事の消化と所謂建築技術者の自尊心とは餘りに先走の傾向を生じ、注意の徹徹を缺き、惹ひては完全施工の根本義を忘却する様になりはしないかと恐れる次第である施工の根本理念無しに出來上つた建物は形骸がいくら立派でも各要所の缺陥よりして故障も多く、損耗も早い筈だ。此の事は建設戰途上財源資材を死用した事になり、現在の時勢に於ては最も考慮すべき事だ。

施工の閑却化は近來の傾向であるが、最近の人才不足が一層拍車を掛けて居る様な狀勢を示して居るので、此の中に育つ建築技術者は何と言つても再思三考し、忙中の閑を利して一歩一歩施工の基礎智識に親炙し體得せねばならない。最近の建築技術者の浮薄さを云ふよりも、最近の建築物に故障の多い事を思ひ浮べて見ると、是が老婆心の表現事象ではないがと恐れる。

建築は住む機械と定義された事もあるが、一般機械製作の機械的、科學的なるに較べて、建築施工は餘りに臨機的、應用的であり、所謂野丁場的である。施工の基礎的、研究萬全なる者が周到なる計劃と綿密なる注意を以て始めて有終の美を納め得るものである。

以上の如く施工の基本的智識は今までの程度の建築を完遂する上にも必要缺く可からざるものであつた。然るに現在我々が直面して居る建設戰は今までに比べて量に於て實に膨大である。

然も之の膨大量を限定された資材と寡少なる勞力と最短縮された時間とを以て完成せねばならないのだ。それだけではない。

建設の範圍も北は零下50度の北滿より、南は赤道を過ぎて尚南常夏の島々を含んで濠洲迄も我々の活躍舞臺にならうとして居るのである。

要請された場所に要請された建築を竣功せしめる事が我々に與えられる命題だ。その時はその土地の風土、資材、勞働力を逸早く調査消化し、建築目的に向つて、その風土に適合し、その土地の資材を利用し、その土地の勞働力を活用しつゝ我々の手で工事施工を實施しなければならない。此の施工こそ施工の基礎智識に立脚せる應用技術の華であり、こゝに施工の基礎智識は益々重大なる役目を持つて來る分だ。此の時に臨んで基礎智識無しでは應用技術も望めず、又薄弱なる基礎より發足したのでは生兵法のそしりの如く、危險極りないものであらう。

施工の基礎的智識の重要なる事は言を俟たない所だが、現在の狀勢に於て特に必要なる事を思ふ時、之を閑却せず涵養に務め大東亞建設の一翼建築部門の達成に遺憾なきを期し度い念願である。杞憂とは思ひながら、敢えて筆をとつた次第ですが、先輩各位の御教示を仰ぎ度く存じます。

（以上）（17.2.8）

（筆者は滿洲第374部隊勤務技師）



防空建築規則の改正

岡田達也

防空建築規則は昭和14年4月東京市に適用されたのを最初とし、以來順次全國の防空上重要都市並にその周圍部町村に適用されて居りますが、其の後の火災の經驗、防火、防彈の實驗及び新興資材研究の結果に鑑み、從來の規定では防空上不充分な點もありましたので、去る3月27日付を以て之を改正し、4月1日から施行して居りますのでその概要を述べる事にいたします。

1. 適用區域の擴大

今回の改正に依り從來の適用區域には全規定が適用されるばかりでなく、一部の規定は其の他の市街地建築物法適用區域全部に適用される事になりました。即ち重要建物、重要施設は必ずしも防空上重要な都市にのみ集つてあるものでもなく、燈火管制や僞裝も防空上重要都市だけに必要とは限りませんから、次の事項に關する規定は市街地建築物法適用の區域全部に適用される事になつたのであります。

イ、用途上重要な建物の待避施設に關するもの
ロ、石油タンク、重要工場又は事業場の動力源其の他の重要設備の防護に關するもの
ハ、灯火管制設備に關するもの
ニ、僞裝施設に關するもの

2. 改正された事項

イ、木造建物の防火力强化

從前の規定では道路に面する部分は隣地に面する部分より消防に容易であるとの見地から防火構造施工範圍が輕減されて居つたが、實際の經驗上輕減する程消火活動が容易にならないので、通路幅の如何に拘らず、道路の中心から3米（建物高4米を超える部分は5米）以內を必ず防火構造となす事に改正されました。又窓、出入口其の他の開口部に關する規定も嚴となりました。その上防火構造も强化され、耐火木材、金屬板、石綿板張の時はぐつと嚴になり、隣地境界から2米以內の外壁には使用出來なくなりました。

ロ、人命防護施設の强化

從前の規定では床面積600平方米を超える建物では3階建(外壁木造、鐵造では2階建)以上のものにだけ準防護室等の設置を要求して居つたが、待避施設の必要性は階數に無關係なので階數制限を廢し、床面積600平方米を超える建物は平家でも待避施設を設けなければならぬ事になりました。又用途上重要な建物には準防護室其の他の施設だけでなく、用途、規模によつては更に防護室の設置をも命じ得る樣になりました。その上從來はこの防護施設は直ちに設けなくとも設け得る空地を保有しておけば宜しかつたのですが、それだけではいざ施設を要するといふ際に間に合はぬので、今後は必ず防護施設は設ける事に改正されました。尙防護室の構造も從來の規定では不完全なので、その構造を改め、且防彈扉、防護壁の設置をも規定せられました。

3. 追加規定された事項

イ、大規模木造建物の防火構造

從前の規定は木造建物の規模如何を問はず一樣の防火構造を要求して居りましたが、規模大なるものは災上の際周圍への延燒力大なるばかりでなく、飛火に依る類燒の要因ともなり、火災擴大の虞あるため、一般木造建物

より更に嚴な構造となす様規定され、即ち床面積600平方米、軒高5米を超える建物は外周を準耐火構造とし、內部も緩燃燒構造となす様規定されました。

ロ、門、墻塀の防火構造

門や墻塀も延燒の媒介をしますから、その規模、構造、周圍の狀況により防火的な構造にしなければならなくなりました。

ハ、瓦葺屋根の防火構造

屋根瓦の間隙から火の粉が入つて飛火となる事例が多いので、野地は土居塗とするか耐火木材、不燃材で造る様規定されました。

ニ、軸組構造材の防腐施工

防火構造とする壁體の內部木材は腐朽し易いから、主要構造材には防腐劑塗、壁體內換氣等防腐的な方法をなす事になりました。

ホ、地窖の設置

空襲時に身廻品に執着して居ては消防活動が鈍り、火勢を增大させる原因となります。そこで各家庭の貴重品、生活必需品等を藏保し充分に防衞活動をし得る様に各戶に地窖を設けさせる事になりました。非住家や土藏其他適當な施設のある家には必要ないでせう。

ヘ、重要施設の防護

重要工場其の他の重要施設の動力源設備其の他作業上重要な設備の防護は特に緊要であるから、之を收藏する建物の耐彈構造、防護壁の設置等を命じ得る事となりました。

ト、燈火管制の設備

工場其の他の灯火管制設備は建築後取付けるのでは不完全な場合が多く、建築の際設備するのが至當でるから、必要な場合は之を命じ得る事になりました。一般の住宅でも一室か二室は完全に設備しておきたいものです。

チ、代用資材の採用

「マグネシヤセメント板」「木毛セメント」が防火構造の壁塗用として採用されました。「防火塗料」もその使途は大規模建物の天井塗に限られて居ますが、採用されました。「防火塗料」の規格は近日中に制定される筈です。

以上簡單に說明いたしました。之が取扱の具體的方針については機會があれば、又筆を執り度と存じます。此の度の改正は資材難の折ではありますが、當然の强化でありますから、防空建築の趣旨は塗りつぶすより疎開である事に思を致し、設計に際し建物の間隔、通路からの後退等に御配慮をお願ひいたし度いと存じます。

防火改修規則の公布

岡田達也

木造家屋の集團である我が都市の空襲對策としては、防空建築と防火改修とを併せ實施しなければならぬ事は今更申すまでもない事です。從つて防空建築規則施行以來全國の防空上重要な都市では既に着々防火改修を實施して居りますが、それは法令に基き施行して居るのでありません。勿論法的には市街地建築物法第18條に依り改修命令は出せるが、その場合の補償規定では防火改修に對する補償はせぬ事となつて居りますので、廣い地域の一般建物に正式に命令を出す事は一寸差控ふべきが至當とされ、補助金を出すと共に唯勸奬の一途を以て實施して來たのであります。時局下益々木造家屋の防火改修の促進を要する時、勸奬だけでこの大事業を完遂せんとする事は最適の方法とは考へられませんので、先般の防空法の改正で防空上必要な場合は一定區域內の既存木造建築物の防火改修工事の施行を命じ得ると共に、市町村長に代施行をさせる方途を開き、補助金の規定をも設けた次第であります。そして更に防火改修をせしむる區域、改修を要する建物の範圍、改修の程度、方法等については去る3月27日付を以て防火改修規則を公布し、4月1日から施行する事になつたのであります。

以上の様な經過ですから、防火改修規則の內容は從來實施して居る防火改修を法令化したに過ぎませんで、大略次の如きものであります。

1. 適用區域

防空建築規則全適用の區域の全部又は一部の

區域に指定します。從つて今迄の通り防空上重要な都市の全部又は一部に適用されることになります。尙現在既に改修が進捗し、豫定通り完成の見込のものはこの際改めて命令を出しません。

2. 適用建物の範圍並に改修の程度、方法

防空建築規則の木造建物の防火構造の規定を準用し、小さな建物や窓、出入口の構造、長屋の防火區畫に就ては多少緩和する場合があります。又建物が腐朽、破損して居て改修しても、その効果のない様な時は建物の補强其の他の措置を命ぜられます。この場合は改修の一部として補助金を出します。但し藁茸、草茸で屋根の構造を改めなければ、防火効力のない時は市街地建築物法第18條で改修を命じ、補償金は出しません。

3. 實 施 方 法

改修工事は街廓毎に一群として施行しなければなりません。又工事前に改修設計に付市町村經由で地方長官の認可を受け、且竣功した時や指定された工程に達した時は、その旨届出を要します。

以上の程度でありますが、尙防火改修組合とか申請届に關する規定は施行細則として各府縣令を以て近日中に制定される筈であります。

戰時立法と建築物法

岡 本 正 次 郎

支那事變勃發と共に經濟産業の各部門に多種多様の統制法規の設定があり、殊に産業部門に於いては、各種の製造、使用制限となつて現示された更に此が大東亞戰爭に進展するに及んでは一層强化、改正されたものである。

一方建築行政方面も過去の單純な監督、指導行政より一變して新時代に則應する爲め、あらゆる角度から睨みをしなければならない狀態となつて折角努力研究を必要とする様になつた。

元來建築物は物資の綜合體であるので、過去の様に自由觀念で無雜作、無勝手に建築出來得るの觀念は抹消された結果、製造制限、使用制限の統制法規が建築界に及ぼす壓力は逐次加重となり、量的に考へれば、建築界は次第に衰退の歩を辿るに到つた。然しこれも大目的のため、又未來の光明を期待する一試鍊で、充分自重健闘すべきである。

此等統制法規は「國家總動員法」及「輸出入等ニ關スル臨時措置ニ關スル法律」に根據を持つものである。市街地建築物法に依る許可、認可に先行して處分されねばならぬものであり、從つて各種の建築書類で統制法規と關聯ある場合には此の許可を得る事が先決問題となつて來るのである。

今事變より戰爭に移行する迄發令になつた各種の統制法規の內で、比較的建築行政に關係の深いものを寸摘して回顧して見る。

◎鐵鋼工作物築造許可規則

建築關係者に馴染深い統制法規で、薄鋼板使用までも許可制となり、僅かに樋、庇等が使用可能として殘つて居る。

◎銅使用制限規則

これは吾人が最初にお目に掛つた統制法規であつて、銅、銅合金を建築物のあらゆる部分に使用することを禁止されたものである。

◎臨時資金調整法

國內資金を調整する爲めの法律であつて、事業設備の新設、擴張、改良でも命令の限度を超ゆる資金使用の場合は許可を要する。現在それ以下の資金でも工場では1萬圓、工場以外では2萬圓を使用する場合「臨時資金調整法ニ關スル調書」を提出して頂く。

◎木造建物建築統制規則

これは木造建物に使用されて居る重要物資の節約と合理的使用の目的のために公布されたものである。則ち不急不用の建物を抑制して得た物資を時局に必要な建物に振り向けんとするものである

30. 25坪の制限は充分徹底して認識をされて居る

◎臨時農地等管理令

農地を耕作地以外の目的に使用するを防ぐもので、特に郊外地方面で臨時敷地を設定して建築せんとするとき抵觸する場合がある。

農地50坪以上のものに對して許可制となつて居る。

◎企業許可令

經濟の總力が發揮せらるゝ樣商工鑛業の事業に對して許可制の實施を見たものである。これは現在商工鑛業の442種類に制限されて居る。事業の新設のみでなく、擴張の場合にも許可を要するものもある。

關係法令施行年月日等一覽表

種目	根據法令	公布年月日 第號	施行年月日
國家總動員法		昭和13年3月31日 法律第55號	本法施行ノ期日ハ 勅令ヲ以ツテ之ヲ定ム
輸出入等ニ關スル臨時措置ニ關スル件		昭和12年9月10日 法律第92號	公布ノ日ヨリ施行
臨時資金調整法		昭和12年9月10日 法律第86號	昭和12年9月27日
鐵鋼工作物築造許可規則	輸出入等ニ關スル臨時措置ニ關スル件 第2條及第3條	昭和12年10月11日 商工省令第24號	昭和13年7月15日
銅使用制限規則	同上	昭和12年11月6日 商工省令第28號	昭和12年11月10日
木造建物建築統制規則	同上	昭和14年11月8日 商工省令第67號	昭和14年11月13日
臨時農地等管理令	國家總動員法 第13條法第1項及第3項	昭和16年1月31日 勅令第114號	昭和16年2月1日
企業許可令	國家總動員法 第16條及第16條ノ3	昭和16年12月11日 勅令第1084號	昭和16年12月13日

社團法人・日本建築協會・創立25年記念
記念式典・功勞者感謝表彰式・祝賀會

創立25年記念式典

昭和17年3月30日。この日我が日本建築協會創立25年記念日にあたりぬ。ときあたかも大東亞戰のさなか、大御稜威のもと勇猛果敢なる將兵の華々しき活躍により、南方各地に赫々たる戰果をあげたるは　一億國民齊しく感謝感激をく能はざる處であるが、更に本戰爭の完遂と世紀の轉換契機とに際會し、牢固たる決意と、雄渾なる氣宇の要請せられる重大なる秋に當り、我々3千會員は創立25年を迎へ、記念祝福するとゝもに、更に團結を堅め、技術報國に邁進すべく誓ひ得るは何たる幸福ぞや。

この日、記念式典は午後4時より中央公會堂に於いて、片岡會長を初め、會員各參列のもとに開かれた。定刻、鈴木式典部長開會を宣し、一同起立、會場正面に奉安したてまつりし伊勢大神宮大麻に對し、戰捷祈願の最敬禮、續いて宮城遙拜、皇軍勇士に感謝ならびに武運長久の祈願、護國の英靈に對し祈念をなし、國歌合唱を終つて着席した。

次に片岡會長の式辭、つゞいて大阪府知事祝辭（井上建築課長代讀）建築學會々長祝辭（中西主記代讀）建築業協會祝辭（鴻池小六氏代讀）朝日新聞社々長祝辭（松本副幹事長代讀）などの披露が終つて、片岡會長音頭のもとに聖壽萬歲を奉唱し、式を閉ぢたのであつた。

×

式　辭

時惟レ昭和17年3月30日本會發祥ノ日ヲトシ、創立滿25年記念式典ヲ擧グルニ際シ、來賓諸賢ノ參臨ヲ仰ギ會員各位ト俱ニ此ノ盛儀ヲ行フ寔ニ欣快ニ耐ヘザル所ナリ。

回顧スレバ大正6年今月今日、今橋大阪ホテルニ於テ創立總會ヲ開ク。當時會スル者近畿在住同志39名、春光ヲ浴ビテ前途洋々ノ聲ヲ揚グ。爾來春秋20有5今ヤ大東亞共榮圈内ニ亘リ3千餘名ノ會員ヲ擁シ會勢降昌ノ一路ヲ辿リ基礎漸ク固ク斯界有數團體ノ一トナル。亦同慶ノ至リトス。此ノ間本會ガ社會國家ニ貢獻セシ事業ハ枚擧ニ遑ナシト雖モ其ノ業績ヲ考フレバ尙忸怩タルモノナキニ非ラズ。本會ノ大使命達成ニハ尙幾多成サントシテ果サザリシ重要事項山積ス。加フルニ大東亞戰日ヲ逐フテ擴大シ皇軍亦西ニ東ニ赫々タル戰果ヲ收メツツアル秋、進ンデハ之等地域ノ建設復興ニ、内ニアリテハ都市防空其他益々職域奉公ノ誠ヲ盡スベキ責務ヲ痛感スルコト切ナルモノアリ。就中本會多年絶叫セル防空問題ハ1日モ之ヲ忽ニスベカラザルモノニシテ25年ヲ一劃期トシ會員各位ト共ニ克ク協力一心、更ニ强大ナル團結ノ下ニ防空其他時局ニ即應スル事業ノ促進指導ニ邁進センコトヲ期スルモノナリ。

茲ニ創立25年記念式典擧行ニ當リ、聊カ所感ヲ述ベテ式辭トス。

皇紀2602年3月30日

社團法人日本建築協會

會長理事　片岡　安

×

祝　辭

社團法人日本建築協會創立25年記念式典ニ當リ祝意ヲ表スル機會ヲ得タルハ本職ノ尤モ欣快トス

ル處ナリ、貴會ハ斯界ノ雄片岡會長ヲ中心トシ3千有餘ノ會員諸賢ト共ニ夙ニ建築部門ヲ通シ社會ニ貢獻セラレル處不鮮就中都市計畫並ニ建築物法施行ノ促進ト住宅改造、防空、防火問題等ニ寄與セラレシ功績洵ニ著大ナルモノアリ特ニ近年都市武裝促進指導ニ目醒シキ活動ヲ續ケラレツヽアルハ邦家ノ爲慶賀ニ耐ヘサル處ナリ、今ヤ國ヲ擧ケテ大東亞共榮圈建設ノ眞只中ニアリ內外共ニ建築關係各位ノ獻身的努力ニ俟ツモノ多キ秋斯界ニ於ケル强力ナル團體ノ貴會ガ其ノ一貫セル建築ト社會ノ旗幟ノ下ニ益々職域奉公ノ成果ヲ擧ゲラレ、更ニ飛躍發展セラレンコトヲ希フモノナリ、茲ニ輝シキ記念式典ニ際シ聊カ蕪辭ヲ述テ祝辭トス。

昭和17年3月30日

大阪府知事　三邊長治

×

祝　辭

本日茲ニ日本建築協會ノ創立25年記念式典ヲ擧行セラルヽニ當リマシテ一言祝辭ヲ申述ルノ機會ヲ得マシタコトハ私ノ最モ欣幸トスル所デアリマス。

今ヤ前古未曾有ノ大東亞戰爭ガ開始セラレマシテ大御稜威ノ下幸ニ皇軍將士ノ勇戰ニ依リ忽チ緒戰ニ於ケル赫々タル大戰果ヲ擧ゲラレ一億國民ノ齊シク隨喜感激ニ堪ヘナイ所デアリマスガ今後此戰爭ノ完遂ト世紀ノ轉換契機トニ際會致シマシテハ牢固タル決意ト雄渾ナル氣宇トガ要請セラルヽノデアリマス。斯ル前代未聞ノ輪廻ニ當リマシテ創立20有5年ノ一大式典ヲ擧行セラルヽコトハ眞ニ意義深キコト、裏心カラ祝意ヲ表スル次第デアリマス。

顧ツテ我建築界ヲ鑑ミマスルニ幸ニ先輩各位ノ御盡瘁ニ依リ近代ノ進步發達ハ洵ニ目醒シキモノガアリマシテ邦家ノ爲眞ニ御同慶ノ至リデアリマスガ將來ノ大東亞新秩序ノ建設ニ當リマシテハ高度國防國家乃至再軍備ノ建前カラモ或ハ資源開發乃至共榮圈設定ノ立場カラモ到底舊來ノ因習ニノミ立籠ツテ居ルコトハ許サレナクナリマシタ仍チ產業立地計畫又ハ國土計畫、住宅問題、東亞諸地方ニ適應スル建築ノ研究、建築ノ工業化及規格化、計量ノメートル化、建築教育ノ革新、技術者及徒弟ノ養成、建築界ノ新體制問題等ハ速カニ計畫シ準備セラレナケレバナラナイ緊急ノ事項カト存ズルノデアリマス幸ヒ日本建築協會ニ於カレマシテモ例ヘバ片岡會長ハ先年都市計畫法制定ノ主唱者トシテ不朽ノ功績ヲ效サレマシタ如キ其傳統ノ社會奉仕ト研鑽ノ精神ニ依リマシテ本會ト東西相呼應セラレマシテ今後共益々之等ノ問題ニ付御協力下サルナラバ獨リ建築界ノ爲ノミナラズ邦家ノ爲眞ニ御同慶至極ニ存ズル次第デアリマス。

終リニ臨ミ日本建築協會ノ終始一貫本會ノ盟友トシテ御協力御支援ニ預リマシタコトニ對シ深甚ノ謝意ヲ表シマスルト共ニ本日ノ輝シキ記念式典ヲ契機トシテ將來益々雄飛發展セラレムコトヲ裏心カラ祈ツテ止マナイモノデアリマス。

一言蕪辭ヲ申述ベテ祝辭ニ代ヘル次第デアリマス

昭和17年3月30日

建築學會々長工學博士　內藤多仲

×

祝　辭

本日茲ニ日本建築協會創立25年記念式ヲ開催セラルヽニ方リ聊コノ盛儀ヲ祝福スル爲蕪辭ヲ呈スルハ余ノ最モ欣快トスル所ナリ顧ルニ大正6年陽春片岡博士始メ斯界ノ有力ナル數十氏ノ同志的結合ノ下ニ建築報國ノ信念ヲ高ク揚ゲ國家社會ノタメ大イニ活躍セラレ現ニ會員4千名ヲ數ヘ權威アル團體ニ發展今日ノ隆盛ヲ見タルハ洵ニ慶祝ニ勝ヘザルナリ。

コノ間我國都市改造ニ劃期的黎明ヲ齎シタル市街地建築物法並ニ都市計畫法ノ二大法典制定ハ實ニ同會ノ主唱獻策ニ負フ所タリ又櫻ケ丘住宅博覽會ノ擧ハ我國住宅ノ改善ノ先驅トナリ正ニ天下ヲ風靡セルノ感アリ更ニ防火耐震或ハ防空ノ各建築ノ普及啓蒙ニ日モ足ラズ國防建築確立ニ邁進セラルル之等貴會ノ建築界ニ貢獻セラレタル事ハ蓋シ枚擧遑アラザルベシ今ヤ大東亞戰爭勃發以來其戰果ニ依リ我領土的進出モ愈々廣域ニ亘リソノ任務一

層重大ナルヲ覺ユルノ秋會員諸氏ニ於カレテモ自重自戒益々職域奉公ニ專念セラレン事ヲ切望シテ已マザル次第ナリ。

右聊所懷ヲ述ベテ祝辭ト爲シ併セテ日本建築協會ノ發展ヲ祈ル。

昭和17年3月30日

建築業協會

會長工學博士　横河民輔

×

祝　　辭

日本建築協會創立25周年ニ當リ協會ガ今日迄ニ爲サレタル研究ト實際トノ兩方面ニ於ケル偉大ナル業績ヲ回想シテ衷心ヨリ敬意ト祝意トヲ表シマス協會ガ廣範圍ニ亘ツテ行ハレタ諸事業ノ中デモ都市計畫ト建築物法問題、住宅問題、震火災問題、防空問題、建材問題、職工放化問題等ハ最モ喫緊且ツ機宜ニ適シタルモノデアリマシテ、ソノ社會方面ニ及ボセル影響功績ノ大ナルコトハ夙ニ識者ノ認ムル所デアリマス。

今ヤ皇國ガ大東亞共榮圈建設ノ爲、振古未曾有ノ戰ノ下ニ在ル際防空問題ヲハジメ諸般ノ事業施設ニ協會ノ盡瘁協力ニ俟ツベキモノ頗ル多シトイハネバナリマセン。愈隆昌發展ヲ重ネラレ國家ノ爲貢獻ノ益々大ナランコトヲ只管希望シ祈願スルモノデアリマス。

昭和17年3月30日

朝日新聞社々長　村山長擧

功勞者に對する感謝並に表彰式

續いて「功勞者に對する感謝並に表彰式」が同じく鈴木式典部長の司會のもとに開かれた。

先づ、片岡會長に對し、25年間に涉る功勞に對し感謝狀ならびに記念品贈呈が、竹腰副會長によつて行はれた。參列會員一同拍手を以つて此に和した。

次に片岡會長より記念事業寄附者に對し感謝狀贈呈があり、今林大林組常務取締役が寄附者を代表し、之を受けた。

續いて、會員のうち多年協會の事業に參劃盡瘁せるを以つて表彰されるもの井上新二氏以下167名に及んだ。

最後に、協會職員大和書記長以下3名にその勞をねぎらひ、表彰が行はれた。

尙、本日表彰されし會員名下記の如し

靑柳　貞世	赤松　修	秋田喜代治
淺野　新一	井上　新二	井上　福藏
伊東宗太郎	伊東　恒治	伊藤　和夫
伊藤幸太郎	伊藤　武文	伊藤　正文
猪瀨幸太郎	池田　實	池田　宮彥
池田谷久吉	石井　春雄	石川　寬三
石川純一郎	板井　公威	今林彥太郎
岩尾　保衞	小笠原祥光	小川安一郎
小川　陽吉	置鹽　章	大倉　三郎
大澤　幸平	大下順三郎	大原　一泰
大原　忠隆	岡田　孝男	岡部　顯則
岡本新次郎	落藤　藤吉	加藤　誠二
加藤　善吉	籠田　定憲	片岡　安
葛野壯一郎	龜井幸次郎	川口　一二
河合貞一郎	木子　七郎	木村　寬一
岸　壯年	北垣熊之介	桐本　楠雅
久保田種吉	楠瀨　儁	黑田　茂
小西　一良	小林　清	小林　三造
古宇田　實	佐藤　四郎	佐野　俊三
阪井　米吉	阪口芳三郎	酒井勇三郎
境　正一	作間日出生	淸水　榮二
椎原　兵市	鹽路　惣吉	設樂　貞雄
篠原　太郎	芝田　知重	島田　良聲
白石登喜男	新名　種夫	須賀藤五郎
鈴木　一幸	鈴木金太郎	鈴木　末尾
鈴木忠五郎	園部　泰文	田中　綱
高岡與三吉	高木眞太郎	高木　太作
高田理一郎	高橋　榮治	高松平太郎
瀧澤　眞弓	竹腰　健造	竹中　景一
武田　經一	栁橋　諒	谷　隆夫
谷　民藏	玉置豐次郎	津田　敏雄
塚本　猛次	坪井　誠一	鳥井　信
內藤　亮一	中井新一郎	中澤誠一郎
中島　智喜	中西　甚作	中西　六郎
中野順次郎	中村　義雄	永澤　毅一
波江　悌夫	丹藤　良雄	野呂長四郎
長谷部銳吉	塙　信	坂　靜雄
伴野　貞三	日高　胖	樋口辰太郎

姫野　武	平塚　鎗吉	平野　忠雄
富士岡重一	福知　秀夫	福永佐和吉
藤本賢太郎	古川　豐	古塚　正治
堀口　甚吉	堀田献次郎	本田　林八
本多　正道	前内文二郎	牧野　忠
政岡　基次	增井　敏克	增山　新平
松井清之助	松久保敬三	松本　禹象
松本　儀八	三木　來三	三浦　茂
道田泰治郎	宮田　秀穗	宮本　長治
村井　進	村上　徹一	村田　小一
村田　治郎	村野　藤吾	本野　精吾
森　正藏	森田　慶一	森本　藤吉
矢田　鐵藏	安井　武雄	柳下　實
藪中　一良	山口儀三郎	山田　初次
山田　誠	山中　茂一	山本　春水
山脇友三郎	横山　尊雄	吉田　信武
吉本政次郎	呼子　正	和田貞治郎
和田　登	渡部　圭吾	

記念講演會

引續き、大阪警備府海軍大佐竹内平七氏の「最近の國際情勢に就て」の講演午後5時よりあり、時局に對し深き認識と感銘を與へた。

祝賀晩餐會

續いて午後6時より會場を3階大食堂に移し記念晩餐會が開かれた。一同和氣靄々裡に食事を認めたる後、デザートコースに入り、先づ片岡會長の挨拶があり、次いで松本記念事業副幹事長の司會のもとにテーブルスピーチに移つた。來賓を代表して内藤建築學會々長、古宇田神戸高工校長續いて會員より竹腰健三氏、石川純一郎氏、波江悌夫氏が夫々立ち所感を々べ、午後8時閉會した。

會報

常務會（第7回）

時　4月6日午後5時50分——6時30分
所　陳列場
出席者　理事　井上副會長、竹腰副會長
主記　桐本、西澤、藪中
主計　松久保
編輯　伊藤、小林、大下

議事

1. 記念事業防火改修展委員追加委囑の件
2. 靜岡市より當選圖案會誌に揭載方依頼の件
3. 會員詮衡

報告

1. 通信費値りの件
2. 關急より萬葉集大和地誌外寄贈の件
3. 2月分會計報告附記念事業勘定中間報告
4. 入營、出征、除隊報告

住宅委員會（第3回）

時　4月2日午後6時——8時
所　當倶樂部室
出席者　委員長　伊藤
幹事　岡本
委員　石井、矢田、菅原、小林

議事

1. 集合住宅案基本條件檢討

陳列場幹事會（第4回）

時　4月14日午後5時30分—8時
所　陳列場
出席者　幹事長　松久保
常任幹事　野中、道田
幹事　楠瀨、神、西澤、矢田、吉田

議事

1. 資料集成の件
2. 防火展出品勸誘の件
3. 防火展招待の件
4. 陳列場出品勸誘の件
5. 二日會會合の件

材料委員會（第2回）

時　3月9日午後6時20分—8時20分
所　協會倶樂部室
出席者　委員長　楠瀨
幹事　榊
委員　後川、竹內、前野、松久保

議事

1. 研究項目に附協議の結果下記の通り決定
建築資材の所要量調査
次回委員會に資料持ち寄り方を各委員に依頼する事
1. 次回は定例日（第3木）3月19日開會の事

材料委員會（第3回）

時　3月19日午後5時45分—8時10分
所　當倶樂部室
出席者　委員長　楠瀨
幹事　道田、榊
委員　高田、竹內、前野、松久保、後川

議事

1. 基礎の問題に就いて協議に入るも先に研究方針の決定の必要あり、約10項に分け毎月2回開くとして7月迄の4ケ月間に終了の事とし、各自分擔して材料持參の上委員會席上に於て取捨し綜合的なものとし一つ一つを纏めて行く事とす。
次回に就いて左の如く決定す
1. 次回研究項目は基礎屋根の資材調査
2. 次回は4月2日（定例日）とす。

材料委員會（第4回）

時　4月2日6時30分—7時30分
所　陳列場
出席者　幹事　前田
委員　高田、竹內、野中、前野

議事

1. 榊、高田、竹內、前野各委員より提出の資料に付檢討右資料を道田幹事整理の上取纏め次回提出の事
2. 高田委員提出の木材數量表を青寫眞に燒付ける事

第二部會（第7回）

時　3月11日午後6時—8時
所　當倶樂部室
出席者　主査　川口
幹事　伊藤
委員　楠田、黑田

議事

1. 各委員自案に就いて詳細の說明あり終つて決議文作成の爲討議に入る、種々協議の結果大體答申案の骨子は出來、伊藤幹事總合案文作成の上其の案文の承認を得る爲今一應委員會を召集の上答申案を提出の事と決定
1. 答申案文、各案を綜合的に研究次回迄に伊藤幹事案文作成
1. 次回を最終回として今月中に再會答申案を決定

第三部會（第1回）

時　2月5日午後3時—4時
所　當協會倶樂部室
出席者　主査　池田
委員　藪中

議事

1. 東京に於ける狀勢を參考にする

必要あり、從つて東上委員竹腰東畑の二氏の都合よき日を選び再會協議する事に決定す

第三部會（第2回）

時　2月26日午後4時20分—5時
所　協會倶樂部室
出席者　主査　池田
委員　藪中

議事

1. 出席者少なく決論を得る事不能なるも本部會は本日を以て打切り今日迄の概略を下記の通り會長宛報告する事に決した

總括目標建築を「早ク」「安ク」完成する事

第一章　對内的事項

1. 設計と施行の連開問題に設計家としての立場を檢討
2. 豫算及見積問題
3. 契約の問題
4. 監督方法
5. 設計圖の程度

第二　對外的事項

1. 建築の認可許可事項を迅速にする事
2. 手續の簡易化
3. 設計業者を地方廳に於て認定する事
4. 材料の配給の豫想を知らしむる事
5. 非常時下建築諸法規の改正補正の件
6. 官廳營繕方法の改善

第四部會（第10回）

時　3月13日午後6時—8時
所　當倶樂部室
出席者　幹事　伊東
委員　岩尾、松久保、小西、岡本、木村

議事

1. 四會連合の案文七項目を骨子として意見書の提出求め其れに依り答申案を作成する事とす。
2. 次回は3月中に開催する豫定なるも日時に就きては伊東幹事一任

第五部會（第7回）

時　2月23日正午　2時20分
所　竹葉本店
出席者　主査　松本
幹事　谷
委員　井上、中西、伊藤、藪中、野中、堀内、古塚、大下、岡田、北垣

議事

1. 日本建築協會第五部會協議案取纏めの件

編輯幹事會

時　4月2日午後6時—8時
所　倶樂部室
出席者　幹事長　小林
常務　伊藤、大下、錦田
幹事　尾龜、志賀、竹内、宮崎

議事

1. 紫烟室記事に就いて協議の件
2. 6月號編輯方針決定の件
3. 防火改修座談會開催の件
4. 5月號は25周年記念號である爲增頁の件

會員動靜

入會

會員

生田　五郎君　豐中市新免943（大阪府警察部建築課）
岩尾　元治君　神戸市葺合區生田町1ノ27ノ5岩尾工務店
上原　健二君　神戸市湊東區中町6ノ190（關谷組）
工藤　梁君　大阪市北區中ノ島（大阪市役所土木部整地課）
關谷幸治郎君　神戸市葺合區雲井通4ノ17（自營）
望月先治郎君　神戸市林田區大道通1ノ5（關谷組）
大野　宗雄君　此花區中江町17（株式會社鴻池組）
加藤　熊雄　北區若松町43（落合組）
神吉　虎吉君　住吉區中野町番外九（長谷部竹腰建築事務所）
佐藤　運平君　尼崎市西本田沖904（株式會社鴻池組）
高田錠之助君　豐中市野畑1331ノ1春日莊アパート（小河建築事務所）
高畠　理市君　東區北新町2ノ3（長谷部腰建築事務所）
土肥　拓哉君　東淀川區十三東ノ町2ノ65（平田組）
福田　耕治君　堺市南田出井町1ノ6（株式會社鴻池組）
福島　哲君　神戸市林田區長田町1ノ32金森方（西村建築事務所）
藤田　重夫君　神戸市須磨區妙法寺字池ノ中254ノ1（神戸市經理部建築課）
吉川　平君　旭區赤川町6ノ720ノ1（中西建築事務所）

地方會員

青木　瀧夫君　漢口日本租界成忠街61號（株式會社竹中工務店）
安田　臣君　東京市澁谷區代官山町代官山アパート26號館ノ93（住宅營團建築部）
星川　庄八君　東舞鶴市餘部下4ノ112木村組出張所（株式會社木村組）

特別贊助員

稻川　三郎君　北區末廣町3
大林　義治君　天王寺區上本町8の54（日產興業株式會社）
木村米次郎君　京都市下京區北小路通西洞院東入井筒町650（日本工材株式會社）
平田忠次郎君　旭區放出町7ノ7（平田組）

平井　武次君　神戸市神戸區元町通6ノ232(興亞工業所)

井上　敏龜君　尼崎市小島北ノ町32（自營）

楮　　長一君　兵庫縣三原郡倭文村庄田土井（谷安組）

金木　雄三君　兵庫縣武庫郡本山村岡本（東亞化工株式會社）

加納　久雄君　京都市上京區小山西大野町66（自營）

黑川彌三郎君　西區江戸堀下通2の2（自營）

山田　甚作君　豐中市字南刀根山196ノ1（日東紡績株式會社大阪營業所）

普通賛助員

小谷　利郎君　京都市下京區中堂寺庄ノ內西町27

南澤　大六君　佐世保海軍建築部

小林　傳七君　府下三島郡高槻町高西（長谷部竹腰建築事務所）

寺井榮治郎君　京都市伏見區向島庚申町

退　會

會　　員

秋山慧二君、魚田常治君、小西武雄君、谷垣宣二君、山下正君、山本和夫君、山內武雄君、福富清君杉浦文雄君、松尾博之君、島田正三君、平川節三君、住友謙二君

地方會員

山內武雄君

特別賛助員

上村慶一君、瀧田安市君、高岡宏一郎君、古澤與三八君

普通賛助員

塚本新司君、中川淺治郎君、山崎廣君、黑田三男君、藤本兼雄君、阪本健吾君、阪本政一君

轉居・轉勤

會　　員

山縣覺太郎君　東淀川區國次町643

中島猪之吉君　神戸市灘區櫻口町2ノ21

後藤　勝男君　府下中河內郡玉川村字稻葉902

和田　義弘君　北區宗是町1.(大阪ビル田中工業株式會社大阪支店內)

上野　一三君　府下豐能郡庄內町大字島江5ノ1

野澤　　勉君　兵庫縣傷痍軍人兵庫療養所第7病棟5號室

井手　正雄君　京都市上京區小山下總町35

地方會員

大岩　貞雄君　富山縣射水郡大門町吳羽紡績社宅

千原大五郎君　東京市世田谷區代田町2の823　西丸修方

中村　謙治君　兵庫縣武庫郡御影町字御量87ノ1

佐藤　靜夫君　滿洲國安東市大和區4番通5の2ノ25(滿洲國安東市大和區4番通6ノ1日產土木株式會社安東出張所)

懸山　良雄君　佐世保市祇園町64村田方

田邊　卓爾君　滿洲鞍山市元町32ノ2(滿洲飛島組出張所內)

梶垣　　寬君　奉天市鐵西區雲峯街一段165

森脇　圭三君　奉天市大和區高千穗通13號ノ4

西山　唯志君　東京市杉並區高圓寺6ノ642

前田　善增君　宮城縣名取郡館腰村飯ノ坂（株式會社淺沼組增田出張所內）

大瀧　丈夫君　北支派遣戊第5300部隊近藤隊

宮村　次郎君　千葉市長洲1ノ90

井尻　義雄君　滋賀縣蒲生郡安土村大字常樂寺上橫町

村井　　進君　東京市麴町區大手町厚生省生活局住宅課

鈴木　和夫君　京城府京畿道廳建築課氣付

西村　清士君　滿洲第374部隊滿洲

瀧石　一夫君　國遼陽市本町81福高組方

普通賛助員

津田　豐治君　朝鮮咸鏡北道清津府東水南町100（三菱清津製鐵所新築工事場大林組三菱清津出張所內）

平野八十次君　兵庫縣武庫郡御影町西平野御影莊內

天津　　勇君　府下北河內郡友呂岐村香里櫻ケ丘畑下方

死　亡

普通賛助員

豐田　正雄君　昭和16年7月3日逝去謹んで哀悼の意を表す

編輯後記

編輯常務

伊藤和夫　大下順三郎
小林清　錦田直一

目に青葉、山ほとゝぎす、初鰹の候とはなり申し候て、編輯當番は廻り廻つて筆者の番ともなつたが、一向に變り映えもせぬこと夥しく、誠に恐縮千萬甚だ相濟まぬ次第である。時恰も、わが日本建築協會創立25年記念式典に際會し、世が世ならばあまたの計畫もなし得て「建築と社會」をいともけんらんに飾るすべのあるものを御時世なれば致し方無之、いともつゝましく、自祝(自肅にあらず)式典を報ずる程度にて引下るもいみじき次第なり

それはさておき、我が協會の生みの親、育ての親たる片岡會長を初め、幾多長老の方々のお集まりを得て「協會創立當時の回顧」の座談會及び中堅各位によつて「建築界の將來を語る」座談會の二つを催し、本誌に掲載し得たことは、定石にしてあきたらぬ思ひはすれど、せめてもの會員諸賢への贈り物として捧げる。

其他、記念事業として、慰靈祭、見學旅行講習講演會など計畫中のもの數多くあるが、何れ時機を見て本誌に報告するとしよう。

建築界新體制樹立要望の聲を聞いてから大分久しくなるが、この間我が協會に於いても夫々の部會を設け檢討中であつたが、そのうち二三の部會より結果報告を得たので、こゝに紹介する。

又、學會、協會、士會、業協會の四會聯合の協議會に於ける報告を本會に寄せられたので併せお目にかける。

敵機、愈々本土に襲來し、一億國民の緊張を促す。「備へあれば憂ひなし」用意おさおさ怠りなく努められよ。(こ)

建築と社會

第25輯　第5號

毎月1回1日發行　定價(送)　1冊 50錢(郵稅2錢)　12冊 6圓(〃 24錢)

昭和17年4月25日印刷　昭和17年5月1日發行

發行・編輯兼印刷人　戸川弘
大阪市北區朝日ビル日本建築協會內

印刷所　プラトン印刷社
大阪市西區江戸堀南通2丁目13番地

發行所　社團法人　日本建築協會
大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
電話長北濱(23)4501番(9)
振替口座大阪 39975番
日本出版文化協會會員番號222043

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

禁轉載

本號に掲載せるものは一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

●第二五集　第五号　掲載広告一覧（掲載順）

三菱商事
大阪加工
田中商会
米本栄商店
日本陶織
矢橋大理石商店
ライトラバー商会
南満建材工業所
協和製作所
平松釣戸車製造所
大阪窯業セメント
建築金物商会
寧楽屋家具装飾店
椎名営業所
萩工業貿易
東洋リノリューム
清水組
鴻池組
村田商会